

オホエヘウフイヒアハ

九十歳、わたくしは空

鈴木康之 昔コピーライター

まえがき

「わたくしはそら」と読みませんでしたか。
そんなに、自惚れちゃいません。

「わたくしはから」と読んでいたきたいんで。

「わたくしはくう」と読んでいただくと、
こそばゆいですけど。

旧約聖書『コレヘト』の「空」とか、
大乘仏教『般若経』の「空」とか、ですね。
それも、ありかも、です。

空ッポ、空ッケツ、空デッポウの、わたくしのアタマ、
ほんとのところは、わかつちやいません。

お気軽くに、どうぞ。

目次

話①	アリスのように パンパンピヨーン	ツキを呼びたい人へ	就活 広告界へ 丹下健三さん 篠田桃紅さん 糸井重里さん…の話
話②	ほらセンサーの針が 振れている	ソシたくない人へ	I 違い セレンディビティ 気づき 味覚 自然界…の話
話③	ダメでも笑って いい加減	力みをぬきたい人へ	病歴 偽薬の愉快 駄洒落 土屋耕一さん いい加減さ…の話
話④	人はできるフリ 神はできないフリ	分かってももらえない人へ	教会 内向き言葉 富田愛世さん 山浦玄嗣さん 気仙語聖書…の話
話⑤	桃紅さんの 消えゆく柳	こだわりたい人へ	僧侶・荒木重雄さん 色即是空 コレヘト 加藤辨三郎さん…の話
話⑥	木きつていいかあ いいぞお	変わりたい人へ	温暖化 藤井一至さん 別な道 中村桂子さん 宮澤賢治さん…の話
話⑦	少ないことは多いこと ゴルフ学校	自由に遊びたい人へ	リンクスランド ピーターズクラブ 自由 考えれば分かる…の話
話⑧	ラーバツハツハ！ 素のゴルフ	シンプルがいい人へ	名著との出会い アウフナフリー J・スターク ゴルフ卒業…の話
話⑨	ボオオオオと鳴り オオオオと消える	AIと距離をおく人へ	L・ハンプトン 音楽は消える 哀れ サグラダファミリア…の話
話⑩	ベッドにもぐって 登山成功	リタイアする人した人へ	早稲田作家 60年安保 死神 松本幹宏さん おいとま…の話

話①

ツキを呼びたい人へ

アリスのように
パンパンピヨーン

早稲田は出たけれど、ヘッ、第二文学部、夜間部なんです。

家の空き部屋に、親戚の一浪と二浪の従兄弟が下宿していて、目の下にクマの顔を毎日見っていました。おれはまっぴらごめんだ、と思っていました。二文でもイイヤと。

ま、倍率が二分の一ほどでして、二文のほうにひittaったわけで。

で、なんで、仏文専攻志望なのかというと、そのころのわたくしは、フランス文学といえば、アンドレ・ジイド、ジイドといえば、翻訳の新庄嘉章*さんが、教授をしている早稲田の仏文と。

それがどうしてなのかというと、高校2年時のクラス替えで、いつもうつむき気味で、気もたせ風情の女子が、フフッ、手紙をはさんで手渡してくれたのが、新潮文庫『狭き門』新庄嘉章訳、だったわけで。

読むほどに、その子とわたくしが作中のアリスとジェロームに、なってしまうという、ティーンエイジャーの、安っぽい同一視病ストーリー。

卒業式のころには、熱は冷めて。勉学の道選びも、初恋の幸運も、アタマが空っぽ、イーカゲンこのうえなしの、17歳でした。

古い親は、夜学は貧しいとこの子が、通うところだと思っているから、夕方に家を出るのを、世間体がよくないと不満顔でした。だからといって、朝に出かけて、図書館で勉強という、孝行息子ではありません。

いまやわたくしが「古い親」でして、テヘヘ。

息子にとって、夕方に家を出るのは、じつにあんばいがよかつたんです。私鉄で五反田で乗りかえ、山手線でゆくと、二駅手前の、新宿の町がオイデオイデする。あのハモニカ横丁に、火が灯る刻限だったんです。

この横丁で「勉強」ばかりしていたから、成績は下のほう。トーゼン。

もともと、文学部など、入社試験を受けられる会社数はかぎられていて。新聞社はおなじ日に重なっていて、一社しか受けられない。出版社はほぼ同時期に集中していて、二、三社にかぎられる。

もつとも、間違つてどっかにひっかかったとしても、編集者のセンスなどなくて、販売や事務はなおダメで、続かなかつたでしょうから、途中退社、再就職のムダがはぶけて、よかつたのかも。

物書き志望だときいた、さる世話好きの知人が「コピーはどうか」と。

エヘッ、複写とりの仕事ですか、と思つてあたりまえの時代。

その人がいうには、ニューヨーク・マジソン街の広告代理店では、ヨーロッパのデザイン先行のスタイルから、コピーという、広告メッセージづくりが先行し、そのあとからデザイナーやカメラマンたちが、仕事をしはじめるスタイルになりつつある、と。

だから、デザインの勉強をしてから、広告づくり全体をリードする、コピーライターになつたらどうか、との託宣。エヘッ、ツンポンカンペンながら、まあなにやら、誘惑的ではあつて。

よくわからないながらも、そうか、そうなのか、ここでも、ま、イヤ、と生来のいい加減さ。だつて、にわかに考えたつてわからないんだし、ほかの道を知らないんだから、まあ、イヤ、イヤ、イヤ、しかないんです。

美大は試験が、おわつていましたし、探すのは美術系短大で、高校からの朋友が「クワザワつてのがあるよ」と。

桑沢洋子さんが開いた、二年制の、桑沢デザイン研究所のリビング科。願書受けしめきり日の夕方、ギリで間にあいました。

グラフィック・デザイン界の、そうそうたる大御所が、なん人も、年イチで講義に来ていました。

ある日、山城隆一*さんが来ました。昔、大阪の百貨店で、文案を書いていた、絵心もあつたのでついでに図案もしていた、という器用人だと、はなしには、聞いていました。ソ、文案、図案といわれていた時代でしたよ。

教室の壁に、自分のポスターを、1点ずつ並べなさい、といわれました。感想をのべるスタイル。講師としては、苦もなくできるラクな講義です。

ポスターは、B全判のケント紙を、重たいベニヤ板のパネルに水貼りして、ポスターカラーで塗っていました。

ほとんどの生徒は、デッサンができるから、イラストがうまい。写真を撮つて、プリントして貼る者もいる。

見た目みんな、カッコいいんです。わたくしは両方ともできません。だから、ふだんから、もっぱらレタリングという、活字描きの練習をしていました。新聞の見出し文字を、スクラップして、自家製の活字見本帳を作り、拡大鏡覗きながら、描きうつす。

日本文字と英文字をバラけさせて、それぞれの形の似たものどうし、たとえば、hの筆記体斜体「h」と、ひらがなの「ん」の字を並べるとか、札という字の右側のツクリに、英文字のlをはめるとか、「一ロソ」の、4文字の間を、くつつけ豆という字に見立てる、ただそれだけのアイデア。

アイデアなんていうもんじゃない、と思いますけど、そんなポスターでした。それしかできないんだから、マ、イイヤ、と開き直って。

山城先生は、どれもこれも、ヘタクソ、といわんばかりの顔で巡回。

ようやくわたくしのポスターの前にきて、「コレ、ダレノ」と。

「はい」と手をあげました。先生は「フン」。それだけでしたけれど…。授業が終わって、先生はエレベータで一階の教員室におりる。

わたくしは、すみやかに重たい作品パネルを片づけて、三階から一階の教員室へ、階段をいつきに、ピョンピョン、駆けおりました。

先生が「フン」と鼻であしらったときの顔つきに、ナーンカ、意味ありを感じて、ワンダーランドへ向かう、アリスになっていました。

アタマに、アリスの「ア」がありました。穴に飛びこんで、白ウサギを追いかけるように、階段を駆けおりたのでした。

「ボク、コピーライターになりたくて、ここに通っています」

先生は、こんどは「フウーン」という顔つきをしてから、ふいに「キミ、デザインセンターニ、キナサイ」と。偉い先生というのは、口数が少ないんですね。いばっているというか、面倒くさがりというか。

待つてください、デザインセンター？ キョッ、エレーツ、です。

日本デザインセンター、略してNDC。一年前に発足した会社で、亀倉雄策さん、原弘さん、山城さん、三人の大先生に、声かけられて、東西から一堂に会した、綺羅星のごときデザイナーたちが、居ならぶ大集団でした。

四年後の1964年東京オリンピックのポスターやらなんやらの制作を、一括指名発注されていたんです。

その面接試験に來い、ということ、なんだと思いました。

わたくしは、さつそく広告コピーの、作品サンプル作りにかかりました。

わけもわからずに、です。覚えていますが、家の新聞を広げたら、東芝掃除機の、広告が載っていて。一時間ほど考えて、『バクダッドの盗賊の如し』なんていう、キャッチフレーズを一本作りました。

ほかの広告でも、二本、三本とできましたが、こんなで、いいんかどうか、ツンポンカンペン、わかるはずありません。

一週間ほどして、家の電話がなりました。母が、「ヤマシロさんというひとからよ」。受話器の声は、

「きみ、来イへんのん」

と関西なまり。

「見ていただく作品を、作っています」

「そんなもんいらへんよ、履歴書もつて、すぐおいで、きょう」

「きょうですか」

「はよ来イ」

出むくと、即入社なのでした。学校のほうは、山城先生が、桑沢校長に、3月に卒業となるよう、話つけてあるという段どりでした。

即社長室へ。亀倉雄策社長が、肘かけ椅子を半回転させ、いちべつくれて「はい、よろしく」と。

これでアリスは、ワンダーランドへ入ることができたんです。桑沢からNDCに入った第一号。

広告制作業界、高度成長の揺籃期。まあね、こんな、まことにへんなあんばいでした。人集めも、いかげんでした。だから、わたくしごとき、半端もんでも、人気会社へ滑りこめ、ピヨーン、と人生を飛べたわけでした。ヒッヒッヒ、ウッシッシ、ではありましたけれど。

桑沢の三階から、一階の教員室へ、ピヨンピヨンピヨーン。なぜかものにも、理由はありませんでした。なにかが光っていた、わけでもありません。ただもう忘我、ボーガ、ボーガ。スツ空カンでした。

山城さんのポスターに、木・林・森の3文字を山型に密集させた、有名作品があったのですが、「ボク大好きです」と、ベンチャらしいのも、忘れていました。

ずーっとのちのち、デザイナーたちのゴルフ会があり、ただ一人コピーライターで、いっしょに遊ばせてもらいましたつけ。「スズックン、上手いねー」なんて、逆にベンチャらいわれましたつけ。

会社は群雄割拠、たいへん刺激的でした。まだ売れ出すまえの、画家・宇野亜喜良さん、横尾忠則さん、まだ売れない詩人・高橋睦郎さん、山本ナントカさん…。

上司は、みんな師匠です。師匠が一部屋。師匠と弟子数人です。

ボスのデスク拭き、卓上整頓、デザインなら筆洗あらい、用具整頓、コピーライターなら、鉛筆けずり。ボスの好みの芯の太さに。お茶だしは、ほどよい温度に。冷たい飲みものは、デスクを濡らさないために、コースター2枚重ねに。

手伝いを命じられると一心不乱。「マダカ」の上目づかいは、喝も同然です。

みんな、動きにキラキラがありました。

わたくしにも、火がつきました。

会社外の友だちに、声をかけ、5人グループで、秋のデザイン・コンペ、当時最大の、日本宣伝美術展、通称、日宣美に、初出品しようと思いました。

デザイン誌で話題になっていた、丹下健三*さんの、都市計画面『東京計画1960』を、一般紙上で6日間連載、とたいそう大見得きつた、架空プロモーションの試作です。

丹下さんに許しを乞うべく、ドキドキしながら東京大学の研究室に電話したものでした。

交換からいきなり御大につながる、まことにおうような時代でした。自己紹介のなかに、わたくしは亀倉雄策、山城隆一の名前を出したはずです。みなさんが、お友だちだと、読んでいましたから。

若造のイキナリの電話を黙って聞いてくれた、丹下さんという方は、優しい紳士で、いらつしやった。

先生は、研究室ではなく、銀座八丁目三原通りの、銀座日航ホテルの、ロビーで会いましょう、と。

中規模のシティホテルで、丹下さんの設計だったと思います。1階フロアが、路面より半階分高い、お得意のピロティ様式。1階はレセプションとエレベータ。あとは、広く明るいロビー、になっています。

三原通り側は、大胆にも一面ガラスばりでした。その反対面は、天井から床まで、左右の角から角までが、一枚の襖になっています。そこに、書道家の枠をこえて世界的に活動する、美術家・篠田桃紅*さんの筆で、わたくしには読めない、万葉集の和歌が、風になびく柳のように吹かれてありました。

ソファアに腰をおろすなり、丹下さんはその柳にほそめた目をやり、

「あつちの、ガラス窓から入ってくる陽の光で、墨は経年変化で褪色していつて、数年後には見えなくなるんです」

と、悦にいつている。

ペルシャ絨毯は、使っているほどに、繊維のツヤが経年美化して、値うちが出てくるものだとか。こちらは経年退化。明らかに文化の違い、ですね。自然まかせの、和の芸術、歳月とともに減衰する自然美、ひとの記憶のなかにとじこめようという、伝統文化があるのでした。

アリスは、この人たちのデザイン構想に、感動のあまり、テーブルの下靴を、バタバタさせたくなるのを、こらえなければなりませんでした。

15分ほどで、丹下さんは、わたくしたちの話にうなずき、励ましてくださいました。このあとは、自分は時間がとれないから、研究室の若い人を、参加させましょう、と。

この短い面接のなかで、丹下さんがふとおっしゃったことが、わたくしの腹に、強くひびきました。

「都市計画とは、建築ではなくて、立ち行かなくなった、あるいは、そうなりそうになつてゐる、都市を、整備する設計なのです」

NDCに入つて、にわか勉強でおぼえた、広告とは「乱れはじめてゐる、あるいは、そうなりそうなる暮らしを、そうならないように、働きかける情報設計」と、同じなんだあと、ひとり高揚したものでした。

翌週、わたくしたちの集まりの部屋に来てくださったのは、のちに鬼才と呼ばれたお二人、ナントナント、いまははや泉下の人、黒川紀章*さんと神谷宏治さん、だったのでありますよ。トコロガ、ドッコイ…。

東京の昼間人口が1千万人をこえて、都市機能が不全におちいらんとする、クライシス前夜、という位置づけ。

東京湾に、はしご状の構造物による海上都市を建設し、まわりには、線形都市圏を展開する。そういうセンセーショナルな、大構想でした。

幹線道路は、制限速度の異なる3層から構成され、すべて一方通行の、10車線車道。その両側に垂直に立つコアをつなぐオフィス群が築かれる。そのまわりに、住居ブロックが建つ。

東京湾を選んだのは、投機的妨害がもつとも少ないから。利権に汚れていない海上に、空間価値を生産してゆくことは新しい希望を沸きたたせる、という予測から、なのでした。

案の先進性や肝の要点を、懇切に解説してくれました。

トコロガです、機関銃のようにカタカナが頻発され、日本語も漢字熟語ばかりで、ツンポンタンペン。丁寧なお人柄なんだとはわかったのですが、話の粘っこさったら、ありません。

フネを漕ぐヤツは、いましたが、イビキが聞こえなかったのが、せめてもの幸いでした。

日宣美展初出品で、わたくしたちのグループは奨励賞をとりました。

社内では、コピー・ルームのスズキがよ、と訝しい目で見られました。

会社の翌年の年賀状が、社内公募になりました。わたくしも、応募しました。ハガキを横向きにして、NDCの横向き五角形の、コープレート・マークをいっぱいにおき、なかに全社員百数十人の、名前をならべるデザイン。これが採用されて、こんどはみんなから白い目で見られて。

褒美に亀倉先生から、翌年のトヨタ自動車の社史の改訂版を担当させられ、「レイアウトも変えてみなさい」といわれ、もう、ウツタンチョー！

先ごろ、新聞に「東京圏の人口 世界3位に後退」という、見出しがありました。2025年の国連の人口調査で、その記事の解説。

首をひねってしまいましたね。

1位は、前回5年前に、2位だったジャカルタで4、191万人。

2位が、前回9位のダッカ。

「3位が、東京3、000万人。前回3、300万人からは、大きくは伸びていない」と、記事にありました。

この記事中の、「後退」にも「大きくは伸びていない」にも、残念ながらというニュアンスが感じられるんです。

ソーナノカイ？ 大きいことはいいいことだの時代は、遠い昔のモノサシなのではないか。マスコミはズレてイナイカイ？



わたくしのような、いい加減ニンゲンにもツキがあるんです。キョロキョロ、ピョンピョンだからです。

わたくしはその後、篠田桃紅さんにはかにお会いできたんです。

いちじ夜や土日、画家の故・澤田重隆*さんのアトリエで、アシスタントをしてい

ました。JALのCAや、サンヨー電機の広告で木暮実千代の、イラストレーションを描いていた人で。写真より綺麗な、美人画でした。

微細なデッサン技術で、ずーつとのち、伊藤若冲展を観たとき、そうか、澤田さんは、こういうの描きたかつたんだ、と思い出されました。

澤田さんには児童向け図書の装丁の仕事が、多く来ていました。絵はササツとお手のもですが、原寸デザインの見本づくりは、タイトル文字のレイアウトや着色など、デイベイダー、烏口、ミゾビキといった、デザイン用具の扱いが面倒だからというので、それをわたくしに手伝わせたくれました。文字を描くのはおまかせで。

小学館から、分厚い『源氏物語図譜』全体の、ブックデザインの仕事が出て、澤田さんの発想で、表紙に篠田桃紅さんによる「源氏」の2文字を配することになりました。

田園調布。和の仕事部屋の空気が、桃紅さんの世界そのものでした。急須からのお茶の注ぎ方など、所作のすべてが柳でした。

このブックデザインは、61年東京アートディレクターズクラブの、銅賞を受賞しました。

澤田さんのお手伝いをしているうちに、編集部の人たちから、デザインは鈴木がやっている、と知れて、イヤハヤ、ご承諾をえて、その後は直接わたくしのほうへオーダーが来るようになり。ハッハッフツフツ。

偕成社、河出書房新社、岩崎書店、あかね書房などから、少年少女もののも、文学全集、推理文学、世界名作などなど。

まめに、いままでにないデザインにして応え、編集者から喜ばれました。

全12巻とか、全24巻とか。家の押し入れに詰まってきて、壮観でした。

コピーより、デザインで、名前が出ちゃいました。



わたくしが、勤めに出たころつてのは、コピーライターという職業名は、世間から、ほとんどわかってもらえませんでした。

故郷の静岡にひっこんだ母に「どんな仕事してるの」と聞かれて。ま、イロイロタクサンさ、と答えるのも、愛想がないと思ひ、関係先広告主のなかに、富士銀行がありましたので、それを口にしました。銀行なら、安心してもらえるだろうという、親孝行の気遣いを働かせたのですが、これが短慮でありました。

「富士銀行の、なんの仕事かね」。コピーといっても、通じないと思ひ、文字を書いている、と答えたんです。コピーは文字ですからね。

親戚筋のある席で、あるおじから「ヤッちゃん、うちの店の、看板もかいてくれんかね」と、いわれました。ヌーン？

母がですね、静岡駅前ですすね、おじに、目のまえの富士銀行のビルの看板を指さして、「これ、ヤスユキが描いたんだとよ」と、得意げに話したことが、あったんだそうであります。ケホーツ。

銀座日航ホテルのロビーは、三年間つとめた日本デザインセンターにも、その後フリーランサーになった、最初の間借り事務所にも、近かったので、しばらくのあいだ、個人的な応接場所として、愛用していました。

いまだきの、バカでかいホテルのように、ロビーがカフェになっていて、なにかオーダーしないと腰もおろせない計算高さもちがって、当時はテーブル使って、なん時間いてもタダ。おうような時代でした。

桃紅さんの、消えゆく柳に、見おろされていると、なぜかただそれだけで身も心も和みました。桃紅さんの墨が、万葉歌人だれのなにを詠んだ和歌なのか、まったくわからず、教養の無さに恥いるばかり。いまだったら iPhone におさめて調べるんですけどね。

この消えゆく柳が、ずっと後、とある早曉、ベッドの中で思いがけない気づきになって現れようとは――。

丹下さんという大きな存在との、わたくしにはもったいない、時間の思い出です。いまも、胸に残る宝物になっています。

こうして振りかえって、いい思い出にひたっている、わたくしだけが持っている宝物です。

昭和のアート分野で、亀倉雄策、丹下健三とくれば、岡本太郎の名前へと飛んでもいいでしょうね。

夏のある夕食時。テレビは岡本太郎さんの特集番組でした。

ダイニングの丸テーブルで、娘がテレビをじっと見ていました。その娘を、わたくしがじっと見ていて、ある考えを思いつきました。

ふと、無為に過ごしていた、自分の中高大学時代を、思い出したものですから。一週間後の食卓にも、わたくしと娘と妻がいました。

「夏休み、何するの」

「ベーツに」

「14歳のいまがチャンス。なにかしたら」

「なにつて、どんな」

「たとえばさ」

と、わたくしは思いつくままに話しました。

「青山の、岡本太郎さんの、アトリエに行くのさ。

呼び鈴を鳴らす。家の人が出てくる。私はコレコレの者です。

先生が、描いておられるところを、拝見してたいんです。

アトリエの隅で、静かにしています。

1時間でも、30分でもいいですから、つてさ。

高校生になったら、ダメだと思うよ。

いまなら、純な女の子として、迎えてくれる。

高校生になると、もう大人に近くなる。顔つきも、体つきも。

そうしたら、制作中のアトリエの空気かわる。いまなら無味無臭。

やがて、何十年もたったとき、

自分は、あの岡本太郎さんが、

あの作品を、描いていた、すぐうしろで観ていた、同じ空気をすつて、

世界でたった一人しかない、経験の持ち主になるんだよ。

だれも持っていない宝物——」。

娘が「ふうーん」と、応えたかどうか、覚えていません。

その年の年末、ある席でコピーライターの糸井重里*さんに、声かけられました。

「おとーさん、お嬢さんにお世話になってまーす」

キョトホーン、とするわたくしに、糸井さんが説明するには、そして、わたくしの想像では、ストーリーはこうなんです。

娘は小中高大、青山学院でした。

中二の時、娘はアリスになって、表参道をパンパンピョンと、くだつていき、明治通りとの四つ辻にあったセントラルアパートへ。

ここには、わたくしがデザインセンターのあと勤めていた、プロダクションをはじめ、広告クリエイティブ関係の、オフィスや写真スタジオなどが集まっていた、一時代をきづいたランドマークでした。

アシスタント一人おいて、糸井事務所もこのアパートにありました。

そこに、初代愛犬トロがいました。近年話題になっていた、老犬ブイヨンではない計算になります。

入り口に立って、アリスはいいました。

「トロちゃん、散歩をお手伝いしたいんですが」

「いいよ」がでて、周辺を小一時間。

もどつてくると、

「ありがとうございます」

と、笑顔で、礼儀正しくおじぎして、トロには手を振って帰っていく。何週間も続いて、飲みものも、いただくようになって。

糸井さんが、「お父さんはなんのお仕事？」と聞いた。

「コピーライター、やっています。鈴木康之といいます」

糸井さんは、アシスタント君と、ロンドゴーン！

NHKで、若者向け番組『YOU』が始まり、糸井さんは、司会に抜擢されて、だれかれなく好かれる、人気者になつていきました。高校一年生になつたアリスは、スタジオ聴取者席の常連になつたようでした。

最初に表参道を足ばやに、糸井事務所向かつていつたとき、娘の頭のなかは、なんにもないボーガー。

なにかに引っぱられて、夢中でかけていった。ただひたすら、ボーガーのパンパンプيون、なのでした。

それにしても、です、わたくしが、たとえば「岡本太郎」の名前でいった、だれももっていない、心の宝物となる大きな対象、娘にとっては「糸井重里」だったのでした。

勉強になりましたね。コピーライターとして、そんなこともわからなかったんかいな。ニユーン。

娘はわたくしにくらべて、これからもつともつと、ピョーンするでしょう。29年差は、もつともつと隔たるんだろなあ、と老父の目になつたりして。

もつとも、89歳と60歳になつたちかごろ、娘は、「わたしたちシニアはね」なんて、同じ傘のなかにいれてくれたりします。



よく「まめにナニナニする」っていいですね。

この「まめ」、辞書をひくと、見出しが漢字で「忠実」。

①精を出すこと。労をいとわずよく動いて働くこと。②健康なこと。すこやか。

と記されてあります。

オヤツ、そうなのかと目が止まるのが、漢字表記の「忠実」なんです。辞書をひくほどでもなく、ながくひらがなですませてきました。

わたくしが、山城先生をおつて、桑沢の階段ピョンピョン、娘が、表参道ピョンピョンは、まさに①の「労をいとわず」。

「まめ」は、ウロウロ、キヨロキヨロ。ツキを呼んだり、ツキに待ちぶされたり。気配を嗅ぎとったり、のちのち実る、なにかの、種まきであつたりします。

「まめ」で敬愛するのが寺田寅彦先生。物理学者にして随筆家、俳人。

「知ることを、怠けてはいけない」と、ご自身にいいきかせていたという、「まめな」知の先生なんです。

『随筆集』*に、くわしく書かれています。

「曙町より」というくくりの二十七篇は、もともと博学で類まれな知の人であるうえに、ご自身の感性と教養で、学者としての知性と知識で、日常生活のなか、さまざまごまごまとした景色を感じとり、観察し、考え、結果としてものごとこのナンタルカを知る、そうした忠実な暮らしをする方。ただただ敬服するばかり。

まめに街へでかけます。角にたつ。デパートに入る。食堂で食事する。その折々の景色に、人々に、もろもろの在りように、キヨロキヨロと目を配り、観察し、疑問を覚え、訳を知り、謎を解き、もの知りが、さらにもの知りになっていく。

賢人の散歩です。知識ばかりではなく、経験、見識、眼力、脚力、人間力で、差がつくのは、ほかならぬこの「忠実」。散歩の流儀なんですね。

パンパンピョンもウロウロキヨロキヨロもツキをツキあう「忠実」なんです。

*	
101	新庄嘉章 1904～1997年 仏文学者 早稲田大学教授 京都大学の伊吹武彦と東西の双璧
102	山城隆一 1920～1997年 本姓は三宅 グラフィックデザイナー 猫の絵でも有名
105	丹下健三 1913～2005年 建築家 都市計画家 広島平和記念公園 東京都庁舎など
105	篠山桃紅 1913～2021年 美術家 大連生まれ 本名満州子 篠田正浩は従弟
106	黒川紀章 1934～2007年 建築家 日本赤十字社 国立新美術館など 若尾文子と結婚
108	澤山重隆 1918～2004年 イラストレーター 街を究明に描いた思想社シリーズなど
110	糸井重里 1948～年 コピーライター おいしい生活など エッセイスト ほぼ日創設
112	『柿の種』寺田寅彦 岩波文庫

話①

ツキを呼びたい人へ

アリスのように
パンパンピヨーン

早稲田は出たけれど、ヘッ、第二文学部、夜問部なんです。

家の空き部屋に、親戚の一浪と二浪の従兄弟が下宿していて、目の下にクマの顔を毎日見ていました。おれはまっぴらごめんだ、と思っていました。二文でもイイヤと。

ま、倍率が二分の一ほどでして、二文のほうにひittaったわけで。

で、なんで、仏文専攻志望なのかというと、そのころのわたくしは、フランス文学といえば、アンドレ・ジイド、ジイドといえば、翻訳の新庄嘉章*さんが、教授をしている早稲田の仏文と。

それがどうしてなのかというと、高校2年時のクラス替えで、いつもうつむき気味で、気もたせ風情の女子が、フフツ、手紙をはさんで手渡してくれたのが、新潮文庫『狭き門』新庄嘉章訳、だったわけ。

読むほどに、その子とわたくしが作中のアリスとジェロームに、なってしまうという、ティーンエイジャーの、安っぽい同一視病ストーリー。

卒業式のころには、熱は冷めて。勉学の道選びも、初恋の幸運も、アタマが空っぽ、イーカゲンこのうえなしの、17歳でした。

古い親は、夜学は貧しいとこの子が、通うところだと思っているから、夕方に家を出るのを、世間体がよくないと不満顔でした。だからといって、朝に出かけて、図書館で勉強という、孝行息子ではありません。

いまやわたくしが「古い親」でして、テヘヘ。

息子にとって、夕方に家を出るのは、じつにあんばいがよかつたんです。私鉄で五反田で乗りかえ、山手線でゆくと、二駅手前の、新宿の町がオイデオイデする。あのハモニカ横丁に、火が灯る制限だったんです。

この横丁で「勉強」ばかりしていたから、成績は下のほう。トーゼン。

もともと、文学部など、入社試験を受けられる会社数はかぎられていて。新聞社はおなじ日に重なっていて、一社しか受けられない。出版社はほぼ同時期に集中していて、二、三社にかぎられる。

もつとも、間違つてどっかにひっかつたとしても、編集者のセンスなどなくて、販売や事務はなおダメで、続かなかつたでしょうから、途中退社、再就職のムダがはぶけて、よかつたのかもで。

物書き志望だときいた、さる世話好きの知人が「コピーはどうか」と。

エヘッ、複写とりの仕事ですか、と思つてあたりまえの時代。

その人がいうには、ニューヨーク・マジソン街の広告代理店では、ヨーロッパのデザイン先行のスタイルから、コピーという、広告メッセージづくりが先行し、そのあとからデザイナーやカメラマンたちが、仕事をしはじめるスタイルになりつつある、と。

だから、デザインの勉強をしてから、広告づくり全体をリードする、コピーライターになつたらどうか、とのご託宣。エヘッ、ツンポンカンペンながら、まあなにやら、誘惑的ではあつて。

よくわからないながらも、そうか、そうなのか、ここでも、ま、イイヤ、と生来のいい加減さ。だつて、にわかに考えたつてわからないんだし、ほかの道を知らないんだから、まあ、イイヤ、イイカ、しかないんです。

美大は試験が、おわつていましたし、探すのは美術系短大で、高校からの朋友が「クワザワつてのがあるよ」と。

桑沢洋子さんが開いた、二年制の、桑沢デザイン研究所のリビング科。願書受付しめきり日の夕方、ギリで間にあいました。



グラフィック・デザイン界の、そうそうたる大御所が、なん人も、年イチで講義に来ていました。

ある日、山城隆一*さんが来ました。昔、大阪の百貨店で、文案を書いていて、絵心もあったのでついでに図案もしていた、という器用人だと、はなしには、聞いていました。ソ、文案、図案といわれていた時代でしたよ。

教室の壁に、自分のポスターを、1点ずつ並べなさい、といわれました。感想をのべるスタイル。講師としては、苦もなくできるラクな講義です。

ポスターは、B全判のケント紙を、重たいベニヤ板のパネルに水貼りして、ポスターカラーで塗っていました。

ほとんどの生徒は、デッサンができるから、イラストがうまい。写真を撮つて、プリントして貼る者もいる。

見た目みんな、カッコいいんです。わたくしは両方ともできません。だから、ふだんから、もっぱらレタリングという、活字描きの練習をしていました。新聞の見出し文字を、スクラップして、自家製の活字見本帳を作り、拡大鏡覗きながら、描きうつす。

日本文字と英文字をバラけさせて、それぞれの形の似たものどうし、たとえば、hの筆記体斜体「h」と、ひらがなの「ん」の字を並べるとか、礼という字の右側のツクリに、英文字のLをはめるとか、「一ロソ」の、4文字の間を、くつつけ豆という字に見立てる、ただそれだけのアイデア。

アイデアなんていうもんじゃない、と思いますけど、そんなポスターでした。それしかできないんだから、マ、イイヤ、と開き直って。

山城先生は、どれもこれも、ヘッタクソ、といわんばかりの顔で巡回。

ようやくわたくしのポスターの前にきて、「コレ、ダレノ」と。

「はい」と手をあげました。先生は「フン」。それだけでしたけれど…。

授業が終わって、先生はエレベータで一階の教員室におりる。

わたくしは、すみやかに重たい作品パネルを片づけて、三階から一階の教員室へ、階段をいつきに、ピョンピョン、駆けおりました。

先生が「フン」と鼻であしらったときの顔つきに、ナーンカ、意味ありを感じて、ワンダーランドへ向かう、アリスになっていました。

アタマに、アリスの「ア」がありました。穴に飛びこんで、白ウサギを追いかけるように、階段を駆けおりたのでした。

「ボク、コピーライターになりたいくて、ここに通っています」

先生は、こんどは「フウーン」という顔つきをしてから、ふいに「キミ、デザインセンターニ、キナサイ」と。偉い先生というのは、口数が少ないんですね。いばっているというか、面倒くさがりというか。

待つてください、デザインセンター？ キョッ、エレーツ、です。

日本デザインセンター、略してNDC。一年前に発足した会社で、亀倉雄策さん、原弘さん、山城さん、三人の大先生に、声かけられて、東西から一堂に会した、綺羅星のごときデザイナーたちが、居ならぶ大集団でした。

四年後の1964年東京オリンピックのポスターやらなんやらの制作を、一括指名発注されていたんです。

その面接試験に來い、ということ、なんだと思いました。

わたくしは、さつそく広告コピーの、作品サンプル作りにかかりました。

わけもわからずに、です。覚えていますが、家の新聞を広げたら、東芝掃除機の、広告が載っていて。一時間ほど考えて、『バクダッドの盗賊の如し』なんていう、キャッチフレーズを一本作りました。

ほかの広告でも、二本、三本とできましたが、こんなで、いいんかどうか、ツンポンカンペン、わかるはずありません。

一週間ほどして、家の電話がなりました。母が、「ヤマシロさんというひとからよ」。受話器の声は、

「きみ、来イへんのん」

と関西なまり。

「見ていただく作品を、作っています」

「そんなもんいらへんよ、履歴書もつて、すぐおいで、きょう」

「きょうですか」

「はよ来イ」

出むくと、即入社なのでした。学校のほうは、山城先生が、桑沢校長に、3月に卒業となるよう、話つけてあるという段どりでした。

即社長室へ。亀倉雄策社長が、肘かけ椅子を半回転させ、いちべつくれて「はい、よろしく」と。

これでアリスは、ワンダーランドへ入ることができたんです。桑沢からNDCに入った第一号。

広告制作業界、高度成長の揺籃期。まあね、こんな、まことにへんなあんばいでした。人集めも、いかげんでした。だから、わたくしごとき、半端もんでも、人気会社へ滑りこめ、ピヨーン、と人生を飛べたわけでした。ヒッヒッヒ、ウッシッシ、ではありましたけれど。

桑沢の三階から、一階の教員室へ、ピヨンピヨンピヨーン。なぜかものにも、理由はありませんでした。なにかが光っていた、わけでもありません。ただもう忘我、ボーガ、ボーガ。スッ空カンでした。

山城さんのポスターに、木・林・森の3文字を山型に密集させた、有名作品があったのですが、「ボク大好きです」と、ベンチャラいうのも、忘れていました。

ずーっとのちのち、デザイナーたちのゴルフ会があり、ただ一人コピーライターで、いっしょに遊ばせてもらいましたつけ。「スズックン、上手いねー」なんて、逆にベンチャラいわれましたつけ。

会社は群雄割拠、たいへん刺激的でした。まだ売れ出すまえの、画家・宇野亜喜良さん、横尾忠則さん、まだ売れない詩人・高橋睦郎さん、山本ナントカさん…。

上司は、みんな師匠です。師匠が一部屋。師匠と弟子数人です。

ボスのデスク拭き、卓上整頓、デザインなら筆洗あらい、用具整頓、コピーライターなら、鉛筆けずり。ボスの好みの芯の太さに。お茶だしは、ほどよい温度に。冷たい飲みものは、デスクを濡らさないために、コースター2枚重ねに。

手伝いを命じられると一心不乱。「マダカ」の上目づかいは、喝も同然です。

みんな、動きにキラキラがありました。

わたくしにも、火がつきました。

会社外の友だちに、声をかけ、5人グループで、秋のデザイン・コンペ、当時最大の、日本宣伝美術展、通称、日宣美に、初出品しようと思いたちました。

デザイン誌で話題になっていた、丹下健三*さんの、都市計画面『東京計画1960』を、一般紙上で6日間連載、とたいそう大見得きつた、架空プロモーションの試作です。

丹下さんに許しを乞うべく、ドキドキしながら東京大学の研究室に電話したものでした。

交換からいきなり御大につながる、まことにおうような時代でした。自己紹介のなかに、わたくしは亀倉雄策、山城隆一の名前を出したはずです。みなさんが、お友だちだと、読んでいましたから。

若造のイキナリの電話を黙って聞いてくれた、丹下さんという方は、優しい紳士で、いらつしやつた。

先生は、研究室ではなく、銀座八丁目三原通りの、銀座日航ホテルの、ロビーで会いましょう、と。

中規模のシティホテルで、丹下さんの設計だったと思います。1階フロアが、路面より半階分高い、お得意のピロティ様式。1階はレセプションとエレベータ。あとは、広く明るいロビー、になっいて。

三原通り側は、大胆にも一面ガラスばりでした。その反対面は、天井から床まで、左右の角から角までが、一枚の襖になっっている。そこに、書道家の枠をこえて世界的に活動する、美術家・篠田桃紅*さんの筆で、わたくしには読めない、万葉集の和歌が、風になびく柳のように吹かれてありました。

ソファアーに腰をおろすなり、丹下さんはその柳にほそめた目をやり、

話①

「あつちの、ガラス窓から入ってくる陽の光で、墨は経年変化で褪色していつて、数年後には見えなくなるんです」

と、悦にいつている。

ペルシャ絨毯は、使っているほどに、繊維のツヤが経年美化して、値うちが出てくるものとか。こちらは経年退化。明らかに文化の違い、ですね。自然まかせの、和の芸術、歳月とともに減衰する自然美、ひとの記憶のなかにとじこめようという、伝統文化があるのでした。

アリスは、この人たちのデザイン構想に、感動のあまり、テーブルの下靴を、バタバタさせたくなるのを、こらえなければなりませんでした。

15分ほどで、丹下さんは、わたくしたちの話にうなずき、励ましてくださいました。このあとは、自分は時間がとれないから、研究室の若い人を、参加させましょう、と。

この短い面接のなかで、丹下さんがふとおっしゃったことが、わたくしの腹に、強くひびきました。

「都市計画とは、建築ではなくて、立ち行かなくなった、あるいは、そうなりそうになっている、都市を、整備する設計なのです」

NDCに入って、にわか勉強でおぼえた、広告とは「乱れはじめている、あるいは、そうなりそうなる暮らしを、そうならないように、働きかける情報設計」と、同じなんだあと、ひとり高揚したものでした。

翌週、わたくしたちの集まりの部屋に来てくださったのは、のちに鬼才と呼ばれたお二人、ナントナント、いまははや泉下の人、黒川紀章*さんと神谷宏治さん、だったのでありますよ。トコロガ、ドッコイ…。

東京の昼間人口が1千万人をこえて、都市機能が不全におちいらんとする、クラシス前夜、という位置づけ。

東京湾に、はしご状の構造物による海上都市を建設し、まわりには、線形都市圏を展開する。そういうセンセーショナルな、大構想でした。

幹線道路は、制限速度の異なる3層から構成され、すべて一方通行の、10車線車道。その両側に垂直に立つコアをつなぐオフィス群が築かれる。そのまわりに、住居ブロックが建つ。

東京湾を選んだのは、投機的妨害がもつとも少ないから。利権に汚れていない海の上に、空間価値を生産してゆくことは新しい希望を沸きたたせる、という予測から、なのでした。

案の先進性や肝の要点を、懇切に解説してくれました。

トコロガです、機関銃のようにカタカナが頻発され、日本語も漢字熟語ばかりで、ツンポンタンペン。丁寧なお人柄なんだとはわかったのですが、話の粘っこさったら、ありません。

フネを漕ぐヤツは、いましたが、イビキが聞こえなかったのが、せめてもの幸いでした。

日宣美展初出品で、わたくしたちのグループは奨励賞をとりました。

社内では、コピー・ルームのスズキがよ、と訝しい目で見られました。

会社の翌年の年賀状が、社内公募になりました。わたくしも、応募しました。ハガキを横向きにして、NDCの横向き五角形の、コープレート・マークをいっぱいにおき、なかに全社員百数十人の、名前をならべるデザイン。これが採用されて、こんどはみんなから白い目で見られて。

褒美に亀倉先生から、翌年のトヨタ自動車の社史の改訂版を担当させられ、「レイアウトも変えてみなさい」といわれ、もう、ウツタンチョー！

先ごろ、新聞に「東京圏の人口 世界3位に後退」という、見出しがありました。2025年の国連の人口調査で、その記事の解説。

首をひねってしまいましたね。

1位は、前回5年前に、2位だったジャカルタで4、191万人。

2位が、前回9位のダッカ。

「3位が、東京3、000万人。前回3、300万人からは、大きくは伸びていない」と、記事にありました。

この記事中の、「後退」にも「大きくは伸びていない」にも、残念ながらというニュアンスが感じられるんです。

ソーナノカイ？ 大きいことはいいいことだの時代は、遠い昔のモノサシなのではないか。マスコミはズレてイナイカイ？



わたくしのような、いい加減ニンゲンにもツキがあるんです。キョロキョロ、ピョンピョンだからです。

わたくしはその後、篠田桃紅さんにはかにお会いできたんです。

いちじ夜や土日、画家の故・澤田重隆*さんのアトリエで、アシスタントをしてい

ました。JALのCAや、サンヨー電機の広告で木暮実千代の、イラストレーションを描いていた人で。写真より綺麗な、美人画でした。

微細なデッサン技術で、ずーつとのち、伊藤若冲展を観たとき、そうか、澤田さんは、こういうの描きたかったんだ、と思い出されました。

澤田さんには児童向け図書の装丁の仕事が、多く来ていました。絵はササツとお手のもですが、原寸デザインの見本づくりは、タイトル文字のレイアウトや着色など、デИБライダー、鳥口、ミゾビキといった、デザイン用具の扱いが面倒だからというので、それをわたくしに手伝わせたくれました。文字を描くのはおまかせで。

小学館から、分厚い『源氏物語図譜』全体の、ブックデザインの仕事が出て、澤田さんの発想で、表紙に篠田桃紅さんによる「源氏」の2文字を配することになりました。

田園調布。和の仕事部屋の空気が、桃紅さんの世界そのものでした。急須からのお茶の注ぎ方など、所作のすべてが柳でした。

このブックデザインは、61年東京アートディレクターズクラブの、銅賞を受賞しました。

澤田さんのお手伝いをしているうちに、編集部の人たちから、デザインは鈴木がやっている、と知れて、イヤハヤ、ご承諾をえて、その後は直接わたくしのほうへオーダーが来るようになり。ハッハッフツツ。

偕成社、河出書房新社、岩崎書店、あかね書房などから、少年少女もののも、文学全集、推理文学、世界名作などなど。

まめに、いままでにないデザインにして応え、編集者から喜ばれました。

全12巻とか、全24巻とか。家の押し入れに詰まってきて、壮観でした。

コピーより、デザインで、名前が出ちゃいました。

／

わたくしが、勤めに出たころつてのは、コピーライターという職業名は、世間から、ほとんどわかってもらえませんでした。

故郷の静岡にひっこんだ母に「どんな仕事してるの」と聞かれて。ま、イロイロタクサンさ、と答えるのも、愛想がないと思い、関係先広告主のなかに、富士銀行がありましたので、それを口にしました。銀行なら、安心してもらえるだろうという、親孝行の気遣いを働かせたのですが、これが短慮でありました。

「富士銀行の、なんの仕事かね」。コピーといっても、通じないと思い、文字を書いている、と答えたんです。コピーは文字ですからね。

親戚筋のある席で、あるおじから「ヤッちゃん、うちの店の、看板もかいてくれんかね」と、いわれました。ヌーン？

母がですね、静岡駅前ですすね、おじに、目のまえの富士銀行のビルの看板を指さして、「これ、ヤスユキが描いたんだとよ」と、得意げに話したことが、あったんだそうであります。ケホーツ。

銀座日航ホテルのロビーは、三年間つとめた日本デザインセンターにも、その後フリーランサーになった、最初の間借り事務所にも、近かったので、しばらくのあいだ、個人的な応接場所として、愛用していました。

いまだきの、バカでかいホテルのように、ロビーがカフェになっていて、なにかオーダーしないと腰もおろせない計算高さもちがって、当時はテーブル使って、なん時間いてもタダ。おもしろい時代でした。

桃紅さんの、消えゆく柳に、見おろされていると、なぜかただそれだけで身も心も和みました。桃紅さんの墨が、万葉歌人だれのなにを詠んだ和歌なのか、まったくわからず、教養の無さに恥いるばかり。いまだったら iPhone におさめて調べらるんですけどね。

この消えゆく柳が、ずっと後、とある早曉、ベッドの中で思いがけない気づきになって現れようとは――。

丹下さんという大きな存在との、わたくしにはもったいない、時間の思い出です。いまも、胸に残る宝物になっています。

こうして振りかえって、いい思い出にひたっている、わたくしだけが持っている宝物です。

昭和のアート分野で、亀倉雄策、丹下健三とくれば、岡本太郎の名前へと飛んでもいいでしょうね。

夏のある夕食時。テレビは岡本太郎さんの特集番組でした。

ダイニングの丸テーブルで、娘がテレビをじっと見ていました。その娘を、わたくしがじっと見ていて、ある考えを思いつきました。

ふと、無為に過ごしていた、自分の中高大学時代を、思い出したものですから。一週間後の食卓にも、わたくしと娘と妻がいました。

「夏休み、何するの」

「ベーツに」

「14歳のいまがチャンス。なにかしたら」

「なにつて、どんな」

「たとえばさ」

と、わたくしは思いつくままに話しました。

「青山の、岡本太郎さんの、アトリエに行くのさ。

呼び鈴を鳴らす。家の人が出てくる。私はコレコレの者です。

先生が、描いておられるところを、拝見していたいんです。

アトリエの隅で、静かにしています。

1時間でも、30分でもいいですから、つてさ。

高校生になったら、ダメだと思うよ。

いまなら、純な女の子として、迎えてくれる。

高校生になると、もう大人に近くなる。顔つきも、体つきも。

そうしたら、制作中のアトリエの空気かわる。いまなら無味無臭。

やがて、何十年もたったとき、

自分は、あの岡本太郎さんが、

あの作品を、描いていた、すぐうしろで観ていた、同じ空気をすつて、

世界でたった一人しかない、経験の持ち主になるんだよ。

だれも持っていない宝物——」。

娘が「ふうーん」と、応えたかどうか、覚えていません。

その年の年末、ある席でコピーライターの糸井重里*さんに、声かけられました。

「おとーさん、お嬢さんにお世話になってまーす」

キョトホーン、とするわたくしに、糸井さんが説明するには、そして、わたくしの想像では、ストーリーはこうなんです。

娘は小中高大、青山学院でした。

中二の時、娘はアリスになって、表参道をパンパンピョンと、くだつていき、明治通りとの四つ辻にあったセントラルアパートへ。

ここには、わたくしがデザインセンターのあと勤めていた、プロダクションをはじめ、広告クリエイティブ関係の、オフィスや写真スタジオなどが集まっっていて、一時代をきづいたランドマークでした。

アシスタント一人おいて、糸井事務所もこのアパートにありました。

そこに、初代愛犬トロがいました。近年話題になっていた、老犬ブイヨンではない計算になります。

入り口に立って、アリスはいいました。

「トロちゃん、散歩をお手伝いしたいんですが」

「いいよ」がでて、周辺を小一時間。

もどつてくると、

「ありがとうございました」

と、笑顔で、礼儀正しくおじきして、トロには手を振って帰っていく。何週間も続いて、飲みものも、いただくようになって。

糸井さんが、「お父さんはなんのお仕事？」と聞いた。

「コピーライター、やっています。鈴木康之といいます」

糸井さんは、アシスタント君と、ロンドゴーン！

NHKで、若者向け番組『YUO』が始まり、糸井さんは、司会に抜擢されて、だれかれなく好かれる、人気者になつていきました。高校一年生になつたアリスは、スタジオ聴取者席の常連になつたようでした。

最初に表参道を足ばやに、糸井事務所向かつていったとき、娘の頭のなかは、なんにもないボーガー。

なにかに引っぱられて、夢中でかけていった。ただひたすら、ボーガーのパンパンプيون、なのでした。

それにしても、です、わたくしが、たとえば「岡本太郎」の名前でいった、だれももっていない、心の宝物となる大きな対象、娘にとっては「糸井重里」だったのでした。

勉強になりましたね。コピーライターとして、そんなこともわからなかったんかいな。ニユーン。

娘はわたくしにくらべて、これからもつともつと、ピョーンするでしょう。29年差は、もつともつと隔たるんだろなあ、と老父の目になつたりして。

もつとも、89歳と60歳になつたちかごろ、娘は、「わたしたちシニアはね」なんて、同じ傘のなかにいれてくれたりします。

へ

よく「まめにナニナニする」っていいですね。

この「まめ」、辞書をひくと、見出しが漢字で「忠実」。

①精を出すこと。労をいとわずよく動いて働くこと。②健康なこと。すこやか。

と記されてあります。

オヤツ、そうなのかと目が止まるのが、漢字表記の「忠実」なんです。辞書をひくほどでもなく、ながくひらがなですませてきました。

わたくしが、山城先生をおつて、桑沢の階段ピョンピョン、娘が、表参道ピョンピョンは、まさに①の「労をいとわず」。

「まめ」は、ウロウロ、キヨロキヨロ。ツキを呼んだり、ツキに待ちぶされたり。気配を嗅ぎとったり、のちのち実る、なにかの、種まきであつたりします。

「まめ」で敬愛するのが寺田寅彦先生。物理学者にして随筆家、俳人。

「知ることを、怠けてはいけない」と、ご自身にいいきかせていたという、「まめな」知の先生なんです。

『随筆集』*に、くわしく書かれています。

「曙町より」というくくりの二十七篇は、もともと博学で類まれな知の人であるうえに、ご自身の感性と教養で、学者としての知性と知識で、日常生活のなか、さまざままごまとした景色を感じとり、観察し、考え、結果としてものごとのナルカを知る、そうした忠実な暮らしをする方。ただただ敬服するばかり。

まめに街へでかけます。角にたつ。デパートに入る。食堂で食事する。その折々の景色に、人々に、もろもろの在りように、キヨロキヨロと目を配り、観察し、疑問を覚え、訳を知り、謎を解き、もの知りが、さらにもの知りになっていく。

賢人の散歩です。知識ばかりではなく、経験、見識、眼力、脚力、人間力で、差がつくのは、ほかならぬこの「忠実」。散歩の流儀なんですね。

パンパンピョンもウロウロキヨロキヨロもツキをツキあう「忠実」なんです。

*

1001	新庄嘉章	1904~1997年	仏文学者 早稲田大学教授 京都大学の伊吹武彦と東西の双璧
1002	山城隆一	1920~1997年	本姓は三宅 グラフィックデザイナー 猫の絵でも有名
1005	丹下健三	1913~2005年	建築家 都市計画家 広島平和記念公園 東京都庁舎など
1005	篠田桃紅	1913~2021年	美術家 大迎生まれ 本名満州子 篠田正浩は従弟
1006	黒川紀章	1934~2007年	建築家 日本赤十字社 国立新美術館など 若尾文子と結婚
1008	澤田重隆	1918~2004年	イラストレーター 街を克明に描いた思想社シリーズなど
1100	糸井重里	1948~年	コピーライター おいしい生活など エッセイスト ほぼ日創設
1112	『柿の種』寺田寅彦	岩波文庫	

話②

ほらセンサーの針が
振れている

ソシたくない人へ

いつかは、夢のバルーンに乗って、ヤッホー、キャッホー、と思つて、宝くじを買つていた時期がありました。

いつもの窓口のおばちゃんに「アタリマスヨウニ」の、声をかけられて、その氣になつて。おばちゃんズルイヤ、あれは「アタラナカッタラ、マタイラッシャイ」だつたんですよね。だつて、当たつたらもうお客じゃなくなるでしょうが。

わたくしは、レレレのひねくれ者になつていましたね。

三つのレ、レレレ。

いつもながらのハズレ。

諦めきれないカスレ。

まわりに知られないように黙るマグレ。

ハズレとカスレは、結果としておなじですが、カスレはどうにもこうにも、しまつが悪い。わたくしのように心貧しい者は、ニンゲン丸だしになります。

カスレを二回、経験したことがあるんです。

いちどは1字違いで、1億5000万円をつかみそこねました。もういちどは1字違いで4億円の札束が、他人の懐に入っちゃいました。

デマカセではない証拠に、1枚3000円の現物をとつておいてあります。書きうつしましょう。

一回目は、平成21年、全国自治第570回オータムジャンボ、
わたくしの番号は63組18、4440 1等1億5000万円
当選番号は 10組15、4440

二回目は、平成28年、全国自治第691回グリーンジャンボ、
わたくしの番号は06組158、336 1等4億円
当選番号は 44組155、336

なんとかならないかと、泣きつきたくなったけれど、おばちゃんに泣きついたって、やさしくニンマリ笑われて、ひとりグズルだけ。

現実には、愛想もなにもありやしない。わたくしは、8を狙うと5に、5を狙うと8に、逃げられるサダメらしい。

ほんとうは全国には1字違いで、グズリたくなる人は毎回なん百人も、いやもっと多く、いるはずなんですネ。

なん百人もの、もっと多いかも知れない人たちは、わたくしと違ってすぐにオトナになって、さつさと来月の列に並んで、平然と日常生活にもどるのですよネ。

気持ちが晴れないでいたのは世間しらすのわたくしだけ。

!!

そうそう、1違いなら、友人、久野良明*さんとのあいだになんとも不思議な1違いのゾロゾロが、ありましたっけ。

某大手エアコンメーカーのキャンペーンで、わたくしの会社が広告宣伝の企画・制作を、久野さんの会社が販売促進の企画・制作を、それぞれ受けもつことになって、知りあいました。どちらもプランナー、コピーライター、デザイナーを擁していて、その点でもチョット違う関係の会社。

1970年代末のことでした。

相性がよかったばかりではなく、これからお話しするとおり顔がエレツ！になるほどの、奇遇がつづいたんです。

仕事での縁は仕事づきあいが過ぎれば、遠くなっちゃうのがふつうのようですが、いまや半世紀以上も続いて長生きしている、同じ年の仲よしです。

都内の高い賃貸マンションから、持ちものになる戸建てに引っ越さないと間尺にあわない、そう思っていたら...

久野家から歩いてすぐ近くに、戸建ての新築物件がありますよ、と奥さんが知らせてくれました。

とんとん拍子で引っ越すことになって、その年末の晩、久野家に家族で食事によばれました。

移転通知をかねた年賀ハガキの印刷があがったばかりだったので、持って伺いました。

久野さんが「あれ、電話番号が1違いだね」。

当家が、045 x x x 1805

久野家が、045 x x x 2805

「これなら数字を覚えるのが恥ずかしいほど悪いわたくしでも、覚えやすくいいねえ」と。

もつともその後、家のつもりでダイヤルをまわしたら「はい、久野でございませう」と、奥さんを電話口まで、なんどもご足労をかけてしまうようなことに、なったのでしたけれども…。

ご馳走をいただきながら、ペチャクチャ。

すると、両家の結婚記念日が、同月の1日違い。

家族の誕生日が、同月の1日違い、とポンポンと見つかりました。

車のプレートナンバーも1字違いだとわかってから、アタマのなが忙しくなりました。車に関しては、同時期に買いかえる予定になつて。またしても、1違いナンバーを期待するクセがついています。ワクワクしても不思議はないでしょう。

車がきました。分類番号に続くひらがなと4桁の指定番号を、見つめる。

まずひらがな。「な」と「ね」でした。わたくしのアタマは「na」と「ne」、ローマ字にすれば1字違いだと見つけだす。

指定番号は「2638」と「4573」。残念だとは思わないんです。目を皿にしてみます。

あるはずだ、ないとはいいいきれない。

上2文字を比べてみると、

「2+6=8」と「4+5=9」

で1違いだ。下2文字どうしは

「3+8=11」と「7+3=10」

で、足し算をすると、けっしてヤラセではなくて、れっきとした1違いだぞ、上々の成果なのでした。

1違いがいくつも見つかった。偶然だよ、偶然が二つ三つ重なることなんて、あつても不思議ではない。二つ三つ重なるなら、四つ五つ重なることも、不思議じゃない。こういう現象を偶然といってすませていいのかどうか、と、こだわらなくなる。

哲学者ならナンダカンダ、アキハバラと、奥へ進むんでしようけれど、空ッポアタマには、ツンボンカンペン。でもナーンカあるんだらうなと信念にも似た思い。

「あるはずだ、ないとはいいいきれない」は、コピーを考える場合でも信念というか、意地みたいなものみたいなものでした。

再考しはじめると、遅くとも夜なかまでには、最悪でも翌朝までには、べつないコピーが見つかることが多かったのです。

朝までつり糸を垂れて、ボウズに終わることがあったとしても、自分のアタマが空っぽなんだと自覚するだけのこと、しょうがないことでした。

久野さんとの話にもどります。ふたりともジャズが好き、落語好き、酒好き、魚好き、ゴルフ好き、同じゴルフ倶楽部の会員でもありましたし。

シーズンはじめにゴルフシューズを買ったらカブッていたり、コンペに行ったらシャツが同ブランドの、色違いだったり…。

わたくしのオフィスが港区外苑前、久野さんが港区六本木でした。引越してからは朝どちらかの車に相乗りしていくことがよくありました。

社員の数似たりよったりなので業界情報の交換など。

近くの東名高速の入り口から首都高の渋谷口までは、渋滞がまいにちのことでしたので、時間はたっぷりありました。

ある朝、ふと、話題が十年ほどさかのぼったのでした。

話①で話したとおりわたくしは以前、大手デザイン会社NDCに。そのチーフデザイナーの片山利弘さんに目をかけられていました。大阪で名をなしていてNDC創設に参加した人でした。

わたくしのグループが、日宣美という大きなデザインコンペに挑戦しました。

その作業途中でも片山さんが見てくれました。さいわいにも初出品で奨励賞のリボンがつけました。

すると、片山さんに呼ばれました。

「きみ、独立しなさい」、いきなりです。エレーツ！

「池袋の百貨店の広告宣伝と販売促進をやるオフィスを、はじめなさい。そのちかくのビルのワンフロアに手をうつてある。相棒は大阪から来る。とてもよくできる男だ」と。

ハンドルを握っていた久野さんの様子がなにやらおかしい。おなかのぐあいがよくないのか、顔を見ると紅潮しています。

「それって、片山さんでしょ！」

大阪からくる男とは、いま隣りにいる久野さんだったのです。わたくしも興奮して、体がカッチンコッチン。

仕事をしてまだ2年ですよ。それもアシスタントとしてたったの2年。嬉しいけれども、わたくしには過ぎたおはなし。ツキといえはツキだったかもしれないけれど、イクナラデンモ、ムチャ。丁重にお断りしたのはいうまでもありません。

久野さんには「東京の男はおりました」と、伝えられたようでした。

「で、久野さんはどうしたの」とは、無粋に思えて訊けませんでした。人生でつまづかせたことにいまごろゴメンしてどうなる、時効だろう、いやいや、大人の久野さんのこと、したたかにいなしたのでしょうか。

この業界のヤワヤワな揺籃期でした。二人にとって大きなチャンスであったのかも知れませんが。

たぶん片山さんはご自身が裏でちゃんと仕事するはずだったのでしょう。そういう副業仕事我当时はよくありました。

その後、スイスの製薬会社ガイギーに招聘されて3年。さらにハーバード大学の教授として招かれ、ボストンに住み、多くの若いアーティストを育てた……などと、風の噂に。

話に乗るべき大きな逸機だったのか、尻ごみしたのがよかったのか、神さまに尋ねても、知らんフリをするに違いありません。

!!

はなしはストーンと飛びます。ある国のおとぎ噺。

昔々その昔、インド洋に浮かぶ美しい島に、三人の王子がおったとき。その島は、セレンディップという名前の島*だったとき。

三人の王子はたいそう仲よしで、それぞれに弟思い兄思い。そして三人とも優秀つけがたいたいそうな頭脳明晰、であつたとき。

王様は、三人の王子をこれからさきぎぎの人生のため、国のために、島から離れたところへ体験旅行にむかわせました。

ときには難局もありましたが、三人はその聡明さでのり越えました。難局もまた旅のうち。探し求めていたもののうちの貴重な体験でした。

旅の道すがらさまざまな風景に出会いました。三人はいつの間にか、それぞれの風景の時間の前後や空間の前後の風景すらも見えるようになりました。聡明さゆえに、見えるようになった体験でした。

たとえばこうです。

ある日、自分たちがゆく道の前方には右目の不自由な口バが進んでいるにちがいない、そう察知しました。

なぜかという、さいぜんから道の左側の草だけが食べられていることに目がいったからです。

一つの体験がもう一つ別な体験、もう一つ別な発見につながる。

こうして、三人の旅は倍にも三倍にもそれ以上にもの、収穫の多い旅になったのでした。

この美しい王国の賢さなるものを伝える寓話がイギリスに伝わって、『セレンディップの三人の王子』という本になっていました。

その本を十八世紀の政治家でもあった小説家ホレス・ウォルポールが、子どものころに読んでふかく感銘をうけ、よく記憶していたのちに友だちに宛てた手紙にこうしたためました。

ねえ君、私の発見は、私にいわせれば、まさに「セレンディップティ」そのもののなのです。これは私の造語ですが、とても表現力に満ちている言葉です。

この手紙から、このウォールポールの造語が世界じゅうの知識人たち、とくになぜか工学、医学など、科学の分野の賢人たちの琴線にふれ、共感をえてみずからの発見・発明の輝きを語るよすがとなっていた、のだとさ。

セレンディップティ。響きも輝きもある、カタカナ8文字はカッコイイ。

日本ではこれのことを3文字で「気づき」と言います。

!!

かなり以前ですが、「気づき」というテーマが、世のなかを席卷したことがあります。元NHKアナの書いた同名の本がミリオンセラーになったりもして。

わたくしはコピーライターになりたての頃から、広告コピーの肝は「気づき」にありと早くから確信していました。

1982年に上梓した『名作コピー読本』*で、そのことを数ページをさいて書きました。コピーにかぎりません。「気づき」は広告のマーケティングからクリエイティブ全般に及ぶ肝です。

マーケティング。市場調査、分析、立案のことですが、数字だけでは成立しないんです。ニンゲン力のある、鋭敏な気づきをもって調査・分析をしなければ、つまり、買いものするときのママやオバサマたちの、計算や気分、胸のうちに、気づかなければ成功する方策はえられません。

その気づきの、気とはなんでしょうか。

気は心、といいますね。でも、気＝心じゃないんですね。「これ、ほんのおすそわけです、気は心と申しますから」なんていうときぐらいにしか使えない、へんな常套文句です。

気と心は、べつものです。その違いを簡単にいつてしまうと、心は体のなかに漬物石ようにデエーンとおさまっているもの。気は頭か胸かにだけあって、いつもプルプルッと震えていて、いまにも飛びたとうとしている巣だち鳥のようなもの。そうであるとうたくしは考えます。

夏目漱石の『道草』に、好例があります。

心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。

ね。気はセンサーのようなもの、と呼んでいいでしょう。

ひとつのセレンディピティに至るまでの劇的な働きをするものを、「聡明さ」と書いてきましたが、べつない方をすれば「気づき」でしょう。

ノーベル賞受賞者たちが自分の研究プロセスのなかで遭遇する、肝心要の決定的な瞬間は、動画だったら、ピッカーッと眩さを放射する演出になるでしょう。そしてサウンドはエコーをかけて「セレン、ディピ、ティーン」。このほうがうんとドラマチックになるでしょう。

でももし、セレンディップ島の寓話がなかったとしたらです、先生方、適切な日本語として「気づき」、とおっしゃったのではないかと思うんですよ。

わたくしは外来語嫌いではないのですが、でもね、「気づき」にかぎつていうと、日本語大好き意識が、モニョリモニョリと、はいだしてくるんです。

!!

美味しいものの、はなしをちよつと。

蓋をあけていつでもチビチビ飲れるように、瓶詰めのだまみを冷蔵庫に並べておきたい……。結婚まえの夢でした。塩辛、松前漬、金山寺味噌などなど、チヨンのツマミです。

わが家の晩酌は、結婚以来まいばん日本酒です。わたくしは某純米酒、夏以外は常温か人肌です。妻は、某純米吟醸で冷蔵です。

ツマミというからには、指でチヨンとつまむか、箸でチヨンとつまむか。クリー ムチーズを角切りにして酒盗のつけ。コレ、三重丸です。

低塩梅干しの果肉をちぎってチヨンもよし。チーズじゃない場合は豆腐でも、はんぺんや焼き海苔の端っこでも、食パンを千切つて炙ったものでも、オツケー。チヨンがいいのです。

マダム・スズキは昔から築地場外の決まった店で、北海道産の板昆布を仕入れて

います。一、二週間おきに鍋に浸たる大きさに切って、ダシをとり、瓶に貯えて、冷蔵保存しています。味噌汁、煮物に使います。

中華でいう、家ごとの、店ごとの上湯、シャントンです。

鍋に残った板昆布、これを舌なめずりしてしまや遅しと待つのがダンナです。

まだいい味があります。細かに短冊切りにし、これを台にしてツマミに。酒盗の瓶に箸を刺し入れて、その箸先をチョンでも。

このチョンツマミを覚えたのは、まだ若かったころ。

オフィスの近くになじみにしていた寿司屋があつて。今夜も深夜作業になるからと、カウンターで腹ごしらえ。鉄火巻き一本と徳利一本。

ふつうはガリをツマミにするのでショーガ、ふと、板さんの下ろし金にくつついているワサビに気がいったんですね。そいつを醤油皿のふちにひとかきくつけてもらった。箸の先にチョンして舌にのせ、酒盃を口にはこんだところ、これがオツなんでゲす。以来、チョンツマミが癖になりました。

チョンツマミは指先でも箸先でもなくて、爪楊枝の先だと、もつとベケンやなんでゲす。

最近、醤油や辣油に点滴式ボトルが登場していますね。これ大正解。よく醤油をさすといいますが、点滴が正しい。

食卓にキノコとベーコンの炒めものが出ている。せっかちなわたくしはさつさとふだんどおり醤油を垂らして一口。マダム・スズキがついと立って、べつな調味料を持ってきてひと垂らし、「このほうが、美味しい」とフムフム顔。

ノロケになるかもしれませんが、妻のこういう味技にはしばしば感心させられます。ほんの僅かな違いなんです。わたくしも、けっこう食いしん坊でけっして貧乏舌ではないはずなんです。妻の敏感な官能基にはかないません。

味覚はほんのわずかな一滴が、人に大きな満足を与えるマジック。しかも人によって気づき方が異なるから、オモロイオモロイ。

うまざの醍醐味は、“Less is More.”* チョットほど豊か。

うま味、これまた気づきの世界の不思議です。

見つけたのは日本人なんです。うまざをもたらす物質の一つがグルタミン酸であることを、ナント、明治時代の東大の碩学、池田菊苗博士が発見してくれました。酸味・甘味・塩味・苦味の加えて、第五の基本味を「うま味」と呼びました。

これらを鋭敏に受けとめるのが、舌のうへの味蕾というツブツブ。ベエーをすると見えるでしょ。

味蕾がとらえるのは生理学的な知覚です。しかし複雑多岐、「うまい」には心理

的な知覚も作用しますから、複層的になってどこまでもオモロイ。

食品でいうと、パッケージの中の中味そのものと、缶や瓶など外側の要素から生まれる外味とがあります。

外味がまた多岐で微妙。パッケージのデザインからテーブルの上、カウンターの、BGM、あたりの顔ぶれ、板さんの立ち居ふるまい、室温、湿度、雰囲気、慣れ、コスパ、女将さんの愛想までが、うまさ度を上げ下げします。

わたくしはこういう食いしん坊ですが、高校時代からの朋友は「どこでもいいけど、だれと飲めるかがだいじだ」と、せつかくの店を探しだして案内したのに、嬉しいようなツレないような。

これらすべての要素と人の「気づき」との掛け算で変わるんですね。じつにイヤハヤ、儂くて、ダイナミックな世界ではありませんか。

もちろん、「気づき」は味蕾だけの官能ではありません。

!!

いまさら反省しても親をうらんでも遅すぎるのですが、わたくし、自然界に耳目や鼻がよく利く、感性豊かな大人に育たなかったことが、悔やまれてなりません。

もつと花鳥風月に敏感な、博識・教養を備えた男でありたかった。

道端の花を見て、「あ、カラスのエンドウだね」とか、ヒーヨの声に呼ばれ、枝を見あげて「おう、ヒヨドリよ」とかね。

こうであれば、精神が弾むじゃありませんか。

森を散策していても、忙しいことになるでしょうね。

落ちたコナラが、風に転がったのであろうか。それとも、カケスが喉袋に含んできて、貯食のつもりで備品だったのだろうか。はたまた、リスのおのこばれなのか。太い根っこ、くぼみに棲みついて、負けじと、もう根が、生え出しているではないか。

ナインテネ、随筆の一編をものすることができるとはならないのに。

話②

自然界は、人間をかたときもタイクツさせない世界です。セレンディピティであれ、気づきであれ、風媒で野山を旅してきたタネと、鳥媒ではるばる海越えて飛んできたタネとが、シンコンサン、イラッシャーイ式に、偶然に出会うドラマに満ちみちています。

地球上には、ほかにも水温や水質による微妙な水媒とか、色彩や匂いに惹かれあう虫媒など、こんなものがこんなところにまでと感嘆する、そんなダイナミックな、トランスファー・システムのネットワークが張りめぐらされているのです。ターツ、ラッター！

久野さんとの、たび重なる1違い、あれはきつと、もつと早く察すべきなにかの信号だったのでしょうか。もつたいない体験だったのかも。

学識をどつきりつめこんでガリ勉でアタマを重たくするのは、いまさらわたくしにはできない芸当。

あとでお話するあの60年安保法案通過の夜明け、デモの渦からはぐれカラスのように、ひとりトボトボ、そう思い知ってアタマ空ッポバンザイ。易しく考えよう、日常を軽くいなそう、川は浅いところを渡ろう、と。

ですから、思考、学究、分析などの書齋よりも、感じ、察し、気づきの庭にいて草花の可愛さ、そよ風の匂い、聞こえてくる人声の喜び…。

わたくしのアタマのなかにさえ、セレンディピティ灯台があるはず。遠近をいちおう休みなく照射しているはず。ペカンペカンペカン、と。

わたくしのは、光波や電波など科学の力でなくて、日本人風、空ッポ人間ならではの、「気」波の灯台ではありますけれど。

*

202 久野良明

205 今日のスリランカ

206 『名作コピーの教え』2015年日本経済新聞出版社版へと続く名作コピー解説のロングシリーズ

208 Less is More 建築、芸術、文学など多くの分野でいれてきた簡素さの良さ

話③

力をぬきたい人へ

ダメでも笑って
いい加減

三十代、四十代は仕事のし過ぎでした。心のほうの病いとお腹の方の病いだが、仕事のまえうしろを併走している、というあんばいで。

知っているのは、妻だけでした。ドキドキ、ドッキン、ムカムカ、ゲーリークーパー、そして、テンポインツ。それでも、やめない酒タバコ。

会社のスタッフにも、取引先にも友だちにも、知られないように努めました。だって、心配かけてはいけませんでしたから。

とにかく、来る仕事来る仕事を、納品日に間にあわせる。それは当然のこと。で、納める仕事のクオリティを、モチョイト高められないかと考え、真夜中にし終えたものを初めから、作り直しをするんですから、体も気持ちも休まらない。

それでも持ったのは、若さという、馬力のせいでしょう。ワカさはバカさ。

朝は定時出社です。取引先の大きい会社の人たちは定時に出てくる。うちのオフィスが、だれも電話に出ないんじゃ、カッコつかないだろうとほざく、古い流儀のボスでした。高度経済成長だとかなんとかで踊らされ、下請け企業は競争競争また競争で。休んだら負け、止まったら、オジャン。

わたくしの最初の上司から、広告マンは労働者ではない、ビジネスマンだ、取引先のみなさんと、同じ格好をしろ、とカタいことを躰けられました。完徹明けでも、朝いったん帰宅、頭洗って髭剃って、ネクタイ締めて、イヤー、ぐっすり寝ましたという顔で、先方の始業前には受付で待つのでした。

広告は、夢を売る仕事、とかいって、でもボスは病氣、スタッフは薄給。常軌を逸した狂気の沙汰でした。

慈恵医大病院の内科に通っていました。十二指腸潰瘍。さほど効き目のない処方が続いていました。

ある日、いつもの内科医が「精神科へまわってみるように」、とコワイことをいい、次週の予約を、とってくれました。いわれてみると十二指腸潰瘍の原因は、ストレスにある、ような気もしていて。俗にいう「ノイローゼ」。

話③

さて、精神科初診の際、これまでの症状を口頭で説明するのは、するほうも、聞

くほうも、タイヘンだと思いました。そう気遣うことそれ自体がそもそも、病気の原因だったんですけどね。

いつごろから息切れ、いつごろには動悸、こんなときには手の慄え……とレポート用紙に書き出して、持っていきました。

診察室に入って、用意のレポート用紙を差し出すと、精神科医師が、ざっと読んだとすれば、十五秒はかかるはずですが、チラ見して、卓上のメモ用紙にチョンチョン、サラサラ。「売店で、この本を買って、読んでみてください。様子見てまたきてください」

帰りの電車でペラペラめくりました。オフィスに戻っても、しばらく目を走らせ続けました。アラ、オヤ、アララ、オヤヤ。

『森田精神療法の実際 あるがままの人間学』*

第1章「神経症と神経質症（ノイローゼ）」に、両者は違うもの、なのである。神経質症とは、神経症を克服したいという意欲を持っている人の症状、なのである、と。フム、フム。

続けて第2章は「症状のいろいろ」と題して、症状例が数多く列挙されていて。

目で追っていくと、エレーツ！、オレダー、オンナジダ……

半分ほど読み進んだところで気がつく、症状は、スーッと、手品のように消えていったような感じ。

わたくしが用意した、きちんとしたレポート用紙持参は、それ自体がわかりやすい「症例」で、わかりやすい「意欲」で。用を果たしたのでありました。

見抜いた医師は、名医。わたくしは、分かりやすい良い患者なのでした。

些細なことに、こだわるということは、そういう性分なのだ。コマゴマと気配りするの、コマゴマと気を配る、能力があるということなのだ。

あるがままに受け入れよ。と、どこかで読んだメッセージ。

だが劣等性と決めたんだ。利点、特性なんじゃないかよ。特技だと思つて有利に活かして。自信に変えよう。

天から、声が聴こえてきました——、これこれ、ヤスよ、それは、お前が選んだコピーライティングという、マーケティング・クリエイティブの、仕事にとつて願つてもない、武器であるのだぞよー。

神経質、いいじゃないか、気づき細やかで。

セツカチ、いいじゃないか、モタモタより。

顔が無愛想、いいじゃないか、笑えば効果的。

コピーライターの先輩、後述の故・土屋耕一さんから「多比羅さんとやつさんはフィジカルの人」と言われたことがあります。多比羅孝さんは同じく追懐するコピーライターの先輩で、すでに泉下の人。

土屋さん夫妻、多比羅さん夫妻とウチ二人と、例年の、香港二月三家六人七食の旅を愉しんだ夜の歓談のなかでした。

多比羅さんもわたくしもよく体のことを、不思議そうに面白がって話していたからです。酔いにまかせて、

「ンじゃ、なんスか、メンタルの人じゃないってこってすか」

と、斜めに反りかえったりしたものでした。

しかし、たとえば、花粉症対策の鼻うがい。口と鼻がつながっている面白さ。

上の入り口から流し込んだものが、下の二つの出口では、大・小仕分けされている不思議。

多比羅孝*さんといえば「プリンちゃん」を飼っている人でした。

痛風の激痛、痛いの痛くないのって、経験者でないとわからない。建てつけの悪い障子戸の、隙間からくる風だけでも、痛い、絶叫、阿鼻叫喚なんです。

食事から摂取されるプリン体で、尿酸値が上昇するわけですが、多比羅さんや、わたくしなど高等人間は、なにを食べても、プリンが増大するタチなんで、どうにもならない。

多比羅さんは、「ご自分の中の痛風の根を「プリンちゃん」と呼んで、ペットとして寵愛していました。

しばらく症状が出ないでいて、季節が変わってとある朝、ピリッが来ると、多比羅さんから電話が来て。

「すすすす、すみませーん、うーっ、きょうの打ち合わせ、うーっ、キャンセルしてもらえ、ハイ、けさから、プリーン少年合唱団があ、ソプラノで、歌っております……」

話③

腰痛が始まったころ、ある脳神経外科医の友人が、「面白いですよ、とすすめてくれたのが、ノーマン・カズンズ『笑いと治癒力』*なる偽薬の本。十年に一度級の、おっきな感銘をうけた医療ドキュメンタリー。

著者ノーマン・カズンズは、アメリカの医療ジャーナリストで、ニューヨーク・ポスト紙の編集長をへて、ロサンゼルス大学に精神医学の教授として迎えられた人だとのこと。

ところが、自らが重篤な膠原病にかかってしまった。施される治療が、はかばかしくなく、焦れる思いを主治医に訴え、ビタミンCの注射による「妙薬」の処方提案しました。

「妙薬」とは、ハンス・セリエなる先達の古典的名著『生命のストレス』に、ヒントを得た「笑い」だったとか。

体と心は一体のもの。生理的な巧まざる相関関係にある。とはわたくしも、以前から聞いていたハナシで。

人間界だけでなく、動・植物の世界でもそうだと。それとこれとは違うかもしれないが、音楽栽培の成功例もよく耳目にしてきました。

花の栽培ハウスに、ボウズのスピーカーをおいているとか、いけ花の名人級の友人がオフィスの大きな活け鉢のために、USENをひいて昼間はもちろん、夜通しクラシック音楽を聴かせているとか…。

カズンズは時間のありあまる入院生活のなかで、喜劇映画鑑賞とユーモア満載本の読書に、時計の針を忘れました。効果はテキメン、10分間腹をかかえて笑うと、2時間は痛みを忘れて、眠ることができました。

そして、かれは治った。完治でした。いったんは医者が匙を投げた膠原病を、克服することができたのです。

処方したのは、ビタミンC、けっこうな量の静脈注射でした。でもそれが効いたのかどうかは怪しい。

医師チームは、試論をおりまぜて結論づけをし、その上での「素人療法のプラシーボ大計画の効験で治った」とする趣旨のメッセージに、カズンズは同意したのだそうです。

プラシーボ。その言葉の語源は、ラテン語の動詞、「placeo」に由来しています。意味は英語の「I please」、つまり「わたしは喜ぶ」です。そこから発展して、その力の根源は「人間の、心の無限の、自己欺瞞力である」と掘りさげられて。いわゆる「偽薬」の意味は、含まれていないのです。

わたくしにはますますもって、興味しんしん。

こんにちの医学・薬学分野では「プラセボ」という、カタカナ書きが多く使われていますが、なんか「ヤラセボ」みたいだから、わたくしは、初体験時の感銘どおり、「プラシーボ」と書いています。

「偽棄」、「ぎやく」。ちよつといじくると、「ギャグ」です。こんなふう
に、アタマのギヤがすぐチェンジする癖があるわたくしは、こんなギャグ一発でも、
きょう一日が「I please」になるわけですよ。

日本橋の、老舗刃物屋さんで聞いた、ブラシーボの嬉しいはなし。

結婚するカップルに、ハサミを贈りものにする人が少なくないそうですね。これ
からの生活に長く重宝する、実用品ですからね。

ですが、「切るものなんて、縁起でもない！」と血相変えて怒るあたまの古い、
親御さんがいる。すると刃物屋のご主人、「ハサミは動刃と静刃一体のもの、その
息が合つての、円満ご夫婦で」と講釈すると、ニツコリ納得なさるそうです。

シャレは、人間生活の、社会生活の、コミュニケーションの、だいたいな便利ツ
ール、そう領かされるハナシです。

—

素人句会の端くれにいます。土屋さんや多比羅さんが立ち上げた、もう半世紀を
超える、20人超の句会です。わたくしは出戻りです。いまは、ネーミングの大御所、
岩永嘉弘*さんがリーダー役。リタイアした地方在住組が少なくないので、ネット活
用です。

わたくしの目的は、ブラシーボ吟句です。

侘び寂びのセンスはもともとなくて、正統派の道はしよせん駄目と自覚して。ダ
メ男にはダメ男なりの、邪道という遊びの道があるわけで。

毎月兼題がでると、まず俳句らしくないへんな発句から始めます。

啓蟄はへの字くの字のストレッチ 八傘

八卦良い低い低いぞ安青蛙 八傘

アブラハムザアカイパウロスターリナイト 八傘

炎天下南無阿弥陀仏蟬聲明 八傘

チンチンも米寿を迎え初湯かな 八傘

お粗末、さまで。

ウチの新聞の、俳壇には、たまーに、イイナアになる句もあるけれど、ほとんどはレベルが高すぎて難解句ばかり。一人合点に思えるもののばかりです。

選評がまたいけません。難しい。呆れかえるばかりの深読み、知ったかぶりのお喋り。こんな難解な俳句欄をよしとしていたら、俳句は廃れるゼエ、と案じます。

左のような句を、詠めたら、嬉しいのですが、道ゼンゼン遠しです。

青蛙おのれもペンキ塗りたてか 龍之介

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ 稔展

噴水の止まりて人の動き出す 飛露

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ 誓子

水枕ガバリと寒い海がある 三鬼

一年ほど前に、AIが参加してきました。

毎月、投句された80句ほどの清書、選句後の天地人五客の集計、配送信、などの作業の手伝いかと思いきや、「英愛」なる俳号をつけてあげて詠句に参加させるんだと、エレーツ！

俳句とはなんぞや、先人たちの作品、兼題季語などの学習はお手のもの。わたくしたちの比ではない。しかも会員たちの選句の傾向と対策の学習も、分析能力も、百パーセントのはずです。お点もダントツで「天」「地」「人」を総なめするはずではありませんか。

そうでない、AI失格でしょう。

ナエますね。しかし、思いついた会員たちが盛り上がっていましたので、わたくしは成りゆき静観ときめこんでいました。

彼、いや彼女かな、それすら不明の、怪しげで、捉えどころのない存在。

半年ほどしてから、お点総ナメ的なことになりました。ざわつきしました。盛りあがっている人たちのこともおもんばかって、とくべつにAI席を新設して、そこに鎮座ましましていただいたら、どうかと囁きましたが、聞く耳なし…。

AIには加齢がない、白髪もぬけ毛もない。腰痛もなけりや、政治への腹立ちもない、ガンの不安も年金不安もない。そういうのと、句会はもちろん酒席を同席するのは、ドーモダナー。

もともと宗匠をいただく会でもなく、特定の流派の分派でもない。是非を、多数決民主主義で決めるような組織ではない。ひとりの「イヤ」「ハンタイ」の人がいたら、その声を尊重するのが仲よし倶楽部というものの、ケンポウなんです。

そうこうしているうちに、ムダに長生きしていない、部落の長みたいな一人が、「しばし休会」という落としどころを出してくれて決着。ヤーレヤレ。

話②の、久野良久さんと出会ったのは、ビーバーエアコンの仕事でした。久野さんの会社が販売促進を、わたくしの会社が広告を担当して、CFもつくりました。

CFはアニメーションものにして、ハリウッドの『原始家族』や『宇宙家族』で有名だったハンナ・バーベラ・プロに発注。

ナレーションの声優には、わたくしの意中の人がいました。D・マーチンの声、ほかS・スタローン、P・ニューマン、A・パチーニなどのあの美声の主で、いまや最古参の声優、羽佐間道夫さんです。

もともと、同じゴルフ倶楽部の所属で遊んだ仲というだけでなく、この人は外せないんですね。以前、日本テレビの番組にUSPGAツアーがあつて、ナレーターをやっていました。

声優はベテランになると、アドリブが腕の見せ、イヤイヤ、喉の聴かせどころなんです。

グリーンをオーバーしたボールが、コロコロコロコロ、斜面の芝生を転がり上がり、膝を折って観戦していた妙齡のレディーの、なんとスカートの下に滑りこんじゃった。しばしヤンキー特有のヤンヤヤンヤがあつたあと、ディーン・マーチンの声が、さも美味しそうな声にしたのです。

さあ、しつかり温められた卵が孵って、チップイン・バーディとなりますか。

このアドリブにはテレビ機数でも、ヤンヤヤンヤとなりました。

わたくしは、駄洒落が、クセになっています。パソコンには思いつきが山とたまっています。わたくしのプラシーボ遊び。

課もなく部下もなく

パーとなるコンピュータ

怠惰ドラマ

ババロアティードリンクカレーライス

横浜中華がいい

といった駄洒落遊びです。

—

さーて、みなさんを故・土屋耕一*さんの、言葉のミュージアムへお誘いいたしましょう。しばし、高級プラシーボのひとつときを。名人コピーライターの、てっぺんに奉られている数人のなかの第一人。わたくしの六つ年上です。
氏のキャッチフレーズの名作、私見のベストファイブでは…。

地球にピースはあるか（日本専売公社）

こんにちは、土曜日くん（伊勢丹）

なぜ年齢をきくの（伊勢丹）

おれ、ゴリラ。おれ、景品。（明治製菓）

君のひとみは一〇〇〇〇ボルト（資生堂）

話③

こんな楽しいコピー創作のかたわら、俳句、回文、武玉川（七七）など、日本古来の短文文芸を楽しんで数多くの作品を残しました。

飄々とした粹人で。お父上が麻布十番の写真館館主、お母上が長唄のお師匠さん、血筋なんでしょう。

丸メガネで、キョトンの目ん玉。顔全体がいつも柔和ながら、好奇心の強い眼差し。ですから、いろんなことば芸のすべてがユーモア風味に仕あがっている。そうじゃないものは、出てこない人でした。

回文の、名人でもありましたよ。今日では土屋さんの独壇場です。

上から読んでも、下から読んでもおなじ。回文は、エヘエツ、アーラ、というおかしさ、しかも、よく見つけたな、と笑いながら感心しちゃって、そして、酔っちゃう。なのにあとを引かないのです。

あたまのお掃除、空洞化、疲労回復、滋養強壮、治癒力増強、活力充満…の、プラシーボとして効能バツグンなんです。

手になじむ、さほど厚くない、文庫本になっています。在庫があるはずですから、探してみてください。

『土屋耕一回文集 軽い機敏な仔猫何匹いるか』*。

ここでは、見本五本。短いものから順々に、読みなれて楽しんでください。一音ずつ目を下げてえ、目を上げてえ。

求む友

キスが好き

散々な難産さ

寝台車あくる朝歩く怪しい男子

シャクの種とボヤク野暮と寝たの口惜し

広告評論家・天野祐吉さんは「土屋耕一さんの言葉は浮力」と評していました。それですね、土屋さんの戒名、

至光院耕董坤柚居士

これがまたまた、なんと回文になっているんですよ。ラターツ！

土屋夫人、郁子さんの特別あつらえで五百羅漢寺の、斎藤晃道住職が坊主頭をひねりにひねって、多分、テルテル坊主のようになって、なん日もかけて仕あげただそうです。ヤリマスナ、ゴ住職モ。

腰痛対策で、はや四十年、メニューはいろいろ変わりましたが、毎朝欠かさずの腰痛体操を続けています。

「気持ちのいいことならおやりなさい」「痛いことはおやめなさい」とすべての先生がおっしゃる。だから続くんでしょうね。

たいていのメソッドには30カウントとありますが、わたくしは40にしています。気持ちがいいからですし、10カウント分トクすると思うからです。

脊柱管狭窄症なんです、経過検査や薬の処方でときどき通っています。

わたくしがそれとなく口にした言葉を、先生方は患者さんたちによく聞かせているそうです。

治すのは医者。

治そうと思うのは本人。

慈恵医大病院からの、処方「ありのまま」を学んだすぐあとに、出会ったのが、俳人、荻原井泉水の、『豆腐哲学』でした。大正から昭和にかけての、自由律俳句のリーダーです。

井泉水の大ファン、精神医学で知られた、斎藤茂太さんのエッセー集、『豆腐のごとく 融通無我のすすめ』*に紹介されていました。

豆腐ほど好く出来た漢（をとこ）はあるまい。彼は一見、佛頂面をしてゐるけれども決してカンカン頭の本念人ではなく、軟らかさの點は申し分がない。しかも、身を崩さぬだけのしまりはもつてゐる。煮ても焼いても食へぬ奴と云う言葉とは反對に、煮てもよろしく、焼いてもよろしく、汁にしても、あんをかけても、又は沸きたぎる油で揚げても、寒天の空に凍らしても、それぞれの味を出すのだから面白い。又、豆腐ほど相手を嫌はぬ者はない。

として、豆腐は、鍋の鯛と寄りあい、すき鍋の鶏と仲よくなり、汁もの大根や芋と、旧友のようになり、と話をひろげ、

凡てに順応する。偏執的な小我を持たずして、いはば無我の境地。

と、たいそうな惚れこみよう。自然にして自由。もうベタホメです。

茂太先生は、「豆腐のつきあいのよさ、だれとでもオツケー、豆腐には「ねばらぬ」のシバリがない。

このいい加減さ、おおらかさこそ、鬱病から身を守る、最大の武器なのだ。

と、書いておられます。

人間、カンのペキじゃなくて、いいじゃないですか。カンのペキじゃ人が寄つてこないでしょう。世の中、いい加減だといいますね。潤滑油がたつぷりの、社会になるはずです。豆腐のようにありなさい、とは素晴らしい教え。

わが家は今宵も豆腐です。

慈恵医大病院でつぎの薬をいただけず、本を一冊買わされて帰ったあのころ、わたくしは、自分の神経質なところは、せっかくだからそれはそれとして、長所として、そのままあるがままに、しておくことにしました。

生来の怠け者、すぐ疲れる。疲れたら、飽きたら、さっさとヤンペにして「いい加減」ギアに入れ替える。

朝までかけてツメツメに書いていた、模範的作法を捨てて、力抜いて、句読点もいい加減に、サラッと書いてみる。

身も心も軽くなり、頭も空っぽに。ハッピーになりました。出来上がりは、さほど悪くない。イーッヒッヒッヒ。

*

- 302 『森田精神療法の実際 あるがままの人間学』高良武久 白揚社
- 303 多比羅孝 1930～2023年 コピーライター『メモ式気のきいた文章の書き方』は共著
- 303 『笑いと治癒力』ノーマン・カズンズ (1915～1990) 松田鉄沢 岩波現代文庫
- 308 岩永嘉弘 1938～年 コピーライター 日本ネーミング協会会長 Bunka Dura など
- 308 土屋耕一 1930～2009年 コピーライター なぜ年齢を聞くの など
- 309 『土屋耕一図文集 軽い機敏な仔猫何匹いるか』土屋耕一 角川文庫
- 310 『豆腐の如く 融通無我のすすめ』斎藤茂太 ちくま文庫

話④

分かってもらいたい人へ

心細い人ア
幸せだ

世田谷区へ越してきて、妻が35年間通っていた教会まで、歩きと電車で片道一時間半かかるようになりました。

体力は年々落ちてゆく。近くで探すことになりました。さいわい目と鼻の先、マシオンからふたかど先にあったのが、小体ながら落ちつきのある、バプテスト教会。妻はここに転会。

そろそろリタイアするわたくし、妻の礼拝の日、家においてけぼりなる。そこで濡れ落ち葉することになりました。

その牧師・富田愛世*さんが、ま、とても気持ちのいい人で。人柄に惹かれ、一年後にわたくしも受洗する羽目になりました。

という言い方をすると、

「羽目になったとは、なんということ、おっしゃるの」

と教会員のおばさま方に、にらまれる羽目になりました、

「神さまのお取りはからいのよ」

と、いさめられたのでありました。すると、ほかのおじさまがほほ笑んで「アーメン！」おっしゃる。ヌーン？

「アーメン」とは、ヘブライ語に由来する「まことにそうです」の意味のキリスト教用語なのだそうでした。牧師がナニナニと祈禱の言葉をのべると、どこからタイミングよく、「アーメン！」とかけ声がとんできます。

教会には教会用語が多いです。ビギナーのためのガイドンスがない。ガイドンスがないなんていまどきのパブリック社会では通りません。分かっている者だけが集う場という構えなんですね。

宣教、布教という言葉があるのですから、ほんととは外向けの姿勢が基本でなければなりません。それにしては分かっている者同士の意識が強くて、内向きだなあ、と思えてならないことが、多々気がかりでした。

礼拝のなかの祈禱と宣教は牧師によるのでしょうか、愛世牧師は平易に日常のしなしをおりこんで、基本外向きでした。

讃美歌は、古臭い文語体の歌詞がほとんどで解説がなくては、意味がわからない。心から唱えない。

曲数の比率、時間配分だけでなく、歌詞の意味を補足説明などもっと平易な気持ち歌う構えがほしいなあ。それを聴いてこそ、聖書がいわんとするスピリットがわかり、喉からの歌ではなく、体からの祈りになるのではないだろうか。

で、愛世牧師と二人で、会堂を使ってゴスペル・コンサートをやったことがあります。忘れられない思い出です。

“Just A Closer Walk With Thee”

『汝のおそばを歩ませてください』聴き比べコンサート

ゴスペルの定番中の定番です。古来、米国の教会合唱隊、デキシードバンド、ホンキートンク・バンド、ジャズのボーカルカルテット、フルバンド、ニューオーリンズのストリートバンドなどが、心からの定番にしています。

日ごろ、パソコンのユーチューブから20ほどのサンプルを集めていました。これを13サンプルに厳選。80分のアルバムに編集したい。

まずは歌詞が日本語訳でわかるもの。

素朴な曲ですが、アーティストによってこんなに違うのかとバラエティ豊か。

ウィントン・マルサリスのフルバンドに、人気者エリック・プラクトンが客演する12分半のもの。

途中でお愛嬌に、エルビス・プレスリーが自宅で遊びで歌うもの。

シメは近年ニューオーリンズの路上ミュージシャン一番人気、女性クラリネットのドリーン・ケッチェンが、ルイジアナ交響楽団のステージに招かれて、テレながらも熱演した9分余りのもの。

大シメは、1970年ニューポート・ジャズ・フェスティバル、フルバンドをバックにルイ・アームストロング生誕70年記念企画、マヘリア・ジャクソンとのアドリブで絶唱する13分ものにした。

富田牧師の手なれた技で、スマートな編集に仕上がりました。

初夏の平日、教会員たちのほか、近くのカソリック教会からも6、7人、わたしのゴルフ仲間6、7人が集ってくれました。濃い音楽に、みなさんも汗ばみ気味だったようでした。

終わって、愛世牧師が手みじかに祈祷。

いちばん楽しんだのは、握手した牧師とわたくしだったかも。

ベテラン女性教会員の一人が、その日の会堂にはいつもの礼拝時とは違う空気が漂っていたのを、感じとっていました。

「鈴木さんの、お友だちってみんな、気さくでオシャレねえ」

「みんなゴルフアードから、ですかね」

身だしなみへのお褒めかとかと思っていたら、

「はってくるとき、おじやましますって、目を合わせて挨拶なさって」

このことを二次会の居酒屋で伝えると、

「かたつくるしい教会って感じが、ぜんぜんなかったよ」

さて、はやいもので、わたくしのバプテスマから、かれこれ20年以上。

愛世牧師は「忠さん」の愛称で親しまれた、ゴスペルシンガー兼牧師、故・小坂忠さんの、お仲間のような人で。いわゆる聖職たることの構え方からもクリスチャンらしさからも、みずからを解き放ちたい、そうお考えになっている人でした。

わたくしはその姿勢がころよくて、近所づきあい、酒を呑む仲にもなつて。

礼拝にはそれなりの牧師の服を着用していましたが、宣教で声を高ぶらせたり、震わせたりする、いかにも聖職者らしいパフォーマンスを、なさることはあまりなく、ふつうにひらく語っていました。

まあ、宣教のまとめのだんになつては目を瞑り「お祈りしましょう」といいながら双手をあげ、型どおりの祈りを捧げる、そのていどでした。

そのくだりはテレがあるように、わたくしの目には映りました。

不幸なことに、なぜか、愛世牧師はベテラン教会員たちに牧師館から追われることになりました。

臨時総会などでのベテラン教会員たちの話の進め方は、聞くほどに見るほどに、わたくしにはどうにも怪訝、首を傾げたくなることばかり。

みなさん日ごろはやさしい人ばかりなのに、それとこれとは違うらしく、どうも解せなかったのですが、わたくしは自分の不勉強のせいだろうと、シンマイなりに寡黙をおしました。

聖書には、憤り、怒り、喚きは、いつさいの悪意といっしょに捨てなさい、と書いてあるのにと、ひとり首ひねって。

話④

わたくしは毎週、教会員がアレンジする活け花を写真にとって修正加工し、説教のテキストを編集し、主日礼拝の夕刻までには、教会のフェイスブックに投稿する

役目をかつて出ていました。

ですがなぜか、フェースブックは危ないメディアだ、やめましょう、と役員たちが頷きあい、わたくしは奉仕活動から身をひくことになりました。

せめてもと、愛世牧師がやっていた敷地内と周辺道路の掃き掃除を、日曜日と水曜日の週二回、朝食前にかつて出ました。

大きな樹木が三本あり、その落葉が周辺のお宅の玄関にまでおよびます。箒の音を気づかって静かに。落ち葉は40ℓサイズのポリ袋二つにいつぱいになる。腰の痛みを加減しながら、休みやすみやりました。

教会側にゴミの収集場所があり、ネットの繕いをしたり、フェンスとのとりつけ補修など、仕事もふえました。教会員には知られませんでした。愛世牧師のかわりだと思えば楽しい仕事でした。

彼は隣の教会にまわりました。ついていった教会員もなんん人かいて。新しい町では、多くの教会員に慕われ、礼拝参加者の数もふえていく。さすがでした。

足腰不自由なわたくしは、そちらまで毎週かようには、いささか元気が足りません。一回だけ礼拝に、そして一度お茶をしに行きました。

お互いのフェースブックに「いいね」をポチするおつきあいです。

一年間ほどの無牧がつづいてから、新しい牧師夫妻が牧師館に入りました。

新しい牧師は、前任者とは正反対。声を張りあげて震わせる、いかにも聖職者らしきパンパンのタイプでした。

数年でお辞めになり、教会はなん度目でしょうか、また無牧に。

わたくしは腰痛がひどくなり、手術入院したのを機に、人間関係で苦手な人とはどうしても苦手、わたくしの不器用をよく知る妻が許してくれて、「病氣」ということにして礼拝を休むようになりました。

と

胸はって、自分がクリスチャンである、とはいえませんが。

信仰歴も、信仰の深さも、ぜんぜん足りません。素養もないし、教養も低いし、キリスト教に関して、ましてやバプテスト教会とはなんなのか話せなくて、知らないことばかりの空っぽアタマです。

でももし、人から神はいるのか、とつめよられたら、「はい、わたくしのなかにはいます」と答えます。

妻の濡れ落ち葉するまえからそう思っていましたね。さかのぼれば、卒論で苦勞していたところから、つまり、サルトルではなくて、カミユのほうに立っていたこ

ろから、なーんともなくですが、そう思いました。

洗礼を受けて「わたくしのなかにはいる」の意識が強くなりましたし、信仰のいいじをいつそう強く思うようになりました。

「いない、とは言いきれないじゃないか」なんです。

わたくしのなかの神は、わたくしになにかを強いるような存在ではありません。束縛もしません。自由です。

わたくしもほかの人に「神を信じなさい」なんてなことをいう気は、サラサラありません。そんなことは、大きなお世話。人それぞれの、自由領域のことです。

自分のなかにいる、ただそれだけで、十分な存在です。

ただですね、神がいるとしたら、むごい方ですね。

戦争を仕掛ける人がいても、止めさせない。罰しない。神ならできるはずなのに、できないフリを、し通そうとしている。人を試そうとしている。人の力を試しつづけようとしている。

神は、できないフリをする。

人は、できるフリをする。

これが、人と神との、マッチレースなんでしょうか。

信じてよかった、信じたおかげで助かった、そう実感したことはありませんね。

「これこれ、ヤスよ、おまえが日々長らえているのは、わたしのアガペーのおかげなのだよ」と、わたくしのなかの神は、そんな恩着せがましいことをおっしゃる、お方ではありますまい。

わたくしだって、神に言つてあげたいことがあります。

「あなたは、なんでこうも人を悲しい目に合わせたり、人に嘘をつかせたり、殺しあいをさせたりするんですか。いつまで、できないフリをする、おつもりですか。困ったもんですよ、あなたは」

敬虔な信者たちからすると、わたくしというヤツはとんでもなく話にならない不敬なヤツなんだ。あなたはクリスチャンではない、と言われたら、はい、そうかもしれない、あなたがわたくしをそう断じるのは、なぜですか、とお返しします。

ああ、スミマセン、こういうはなしは、嫌ですね。酔っ払いみたいです。

以下は、もつと平易な聖書のあり方について、元コピーライターのアタマに以前からピン留めされている、三つの覚え書きです。

一つ目のピン留めは、言葉とはなんなのか、です。

わたくしの仕事は、ソレを知らない人にソレを知ってもらって活かしてもらうための仕事でした。新商品とか、新しいサービスとか、企業の考えとか。

たとえば、全自動洗濯機の広告。いままでの電気洗濯機でも便利だけでも、新発売の全自動洗濯機ならば、もつと簡単、便利、洗濯、すすぎ、絞りまでが、一度のスイッチポンでオッケー。

そういう簡易性だけでなく、空いた時間に編みものができますよ、お買いものにかけられますよ、お子さまとお話ができますよ。そんな生活者としての夢。新時代の生活設計を提案していました。

たとえば、バイオテクノロジーの例。新聞記事中のその言葉が「きょうのことば」なんていうコラムで解説される時代、つまり、まだよく一般には知られていない時代に始めた、バイオ一筋の企業の研究事例紹介キャンペーン。

一例として組織培養なんていう小難しい話でしたが、神奈川の県花山ユリが、土地の開発で野原から消えていることに、研究所が試した実例を話しました。

「山ユリの球根一個を、817個に刻んでバイオで育てたら、一年後に817個の球根になりました」。多くの企業の研究者だけでなく、高校生や大学生からも資料請求がありました。

このバイオの説明広告シリーズに注目してしてくれた、日本IBMから同社の、最新のコンピュータ・システムを紹介する広告シリーズを依頼されました。

いわく、システム・ネットワーク・アーキテクチャーとか、トークン・リング・ネットワークとか。IBMのシステムならではの汎用性やスケールメリットとか。アハーツ、ツンポンカンペン！

ワカラナイ感とネムタイ感との戦いのすえ、わたくしの空っぽアタマに、ピカッときたのが、そのころ開通した東京の電車です。

私鉄小田急とメトロの千代田線とJR常磐線の、相互乗り入れでした。車輪のシャフトとレール、走行システムが同じなら「どんどんつながる」のでした。

コンテナ・ボックスが同じなら、陸送・海運・空輸がつながる、とか。

平和の理念を共有できれば、五色の五輪がつながる、とか。

などの、身近なたとえ話で、シリーズにできました。

二つ目のピン留めは、ヤジロウのはなしです。

日本で最初のクリスチャン、池端弥次郎*のことです。

16世紀、大航海時代、鹿児島に漂着したイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルとともにやって来た男。もともとが、鹿児島出身の漁民。数少ない伝記につきのような記述*があります。要所を抜粋します。

元武士だった彼は誤って人を殺し、故郷の、鹿児島を離れ、マカオ経由でアジアを転々。マラッカにたどり着き、丘の上の教会でザビエルと出会いました。この運命の出会いが、2年後日本にキリスト教を伝える、きっかけになったのです。ザビエルはイエズス会本部の指導者に語っています。「ヤジロウは、私の知る東洋人と違い、勤勉で礼儀正しくポルトガル語を理解している。彼の生まれ育った日本へ布教の旅に出たい」

鹿児島で、人を殺めて逃亡したのに、その地に戻ったのは不可解ですが、それはあくとして、長崎・平戸で通訳として布教に同行したのはこのヤジロウです。

ザビエルとヤジロウは教理の書を、日本語に翻訳しています。

この書で、なんにも知らない日本人たちにキリスト教をどんなふうに話を聞かせたのか知りたいです。

と

三つ目のピン留めは、気仙語聖書のはなしです。

岩手県大船渡の医師・山浦玄嗣*さんが、新約聖書の四福音書をケセン語訳*にしています。このことを知ったときの衝撃といったら、エレレレーッ！

山浦さんは、邦訳聖書には首を傾げる箇所が多く、歯がゆさに耐えられず、ご自身でギリシャ語聖書の日本語訳に挑みました。

それでも、日本語の標準語では、俗にいう「愛する」は気仙語で暮らす人びとには、真意が通じないと悟りました。

取り組んだのがケセン文字です。

「す」でも「し」でも「せ」でもない音は、「す」の字の右側の横棒を削ったかな文字にしました。

「ぐ」でも「んぐ」でもなく、鼻に抜ける音は、「ぐ」に傍点をつける。

「人達」には「ひだち」、「懐」には「ふとごろ」とルビをふる。

日本語の訳も変えました。「愛する」なんてこの土地の漁師や百姓は使わない。欧米文化の甘味調味料にならされた都会人だけの言葉です。気仙では「だいじにす

る」、発音は「デエアズニスル」です。

「主」は「旦那様」。「パン屑」は「御飯粒」。

「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい、見つかる。」は「願って、願って、ねげア続ける。そうすれば、めつかる」と。

「はつきり言っておく。」は、「其方等さ、ギッチどこの俺ア、語っておくべア。」となつて、「ワガダア」となるワケです。ロローン！

山浦さんは、こう思つたんですね、

エルサレムの人も、やつぱり、ガラリヤ人のことばの訛りを、ひどく軽蔑していた。ガラリヤなどというろくな者など出るはずがない、と小馬鹿にしている。（中略）ガラリヤ人は聖書を朗読するな、聖歌も歌うな、と言われたものだそうだ。つまり、ズーズー弁だつたのさ。

大船渡のカトリック教会の献堂25周年の式典に招かれたとき、山浦さんは壇にたつて、聖書の一節、山上の垂訓をケセン語で読みあげました。会場から奇妙な、笑い混じりのどよめきがおこりました。

空のカラスウ、見なれ。種まぎも、すねアす、秋仕舞アもすねア。んだどもそなだアどア、天のおどつぎまア、これアどオ、養つてけやんでアな…

自分たちが恥ずかしいと思つているズーズー弁で、聖書が読まれている。人びとは静まった。会場全体を、感動がつつみこんだのです。

祝宴がおわったとき、生粋の気仙衆のサクノさんが、山浦さんに走りよつてきて、涙で光る目をむけ、手を握つてこういつたそうです。

「ハルツグさん、いがつたよ。おらね、何十年も、こうすて教会にありつてつともね、今日のぐれえ、アイエスさまの気持ちア、わがつたごどア、ながつたよ…」

話が伝わるということとは、こういうことなんです。言葉がつうじ、意味が分かつてもらえて、話は目的をはたすんです。

聖書があればいいんじゃないですね。書いた人、訳した人、宣教する人から、遠く離れたところにいる人の耳に入つて、頭に届いて、胸に沁みて、目が輝いてこそ宣教の具として、有用なものとなるのです。

人と人の間は気が抜けないほど遠かったりします。わかりあえば握手の距離。体温まで伝わります。

キリスト教信者数は100万人余りで、人口に占める割合はわずか1・1%でしかありません。

教会員、神父・牧師の高齢化、少子化による礼拝者数の減少、献金の先細り、会堂の老朽化、と迫りくる難題。とりわけ、小中規模教会の、運営の先行きは、明るくありません。

全国にあるミッション・スクールの卒業生数を一つ思うだけでも、どうも計算が合いませんね。

時代はスピーディにダイナミックに変わっていく。教会が内向きの小さなコミュニティからこつこつと脱却してゆく、マーケティング活動が待たれているのではないだろうか。

教会のハードがなにか地域社会のリベラル・アーツ拠点として、活用されるような時代が、来るといいですね。

*

〇〇 富田愛世 1962年 市川大野キリスト教会牧師

〇〇 『フランシスコザビエルさんの水先案内人』セント・フランシス・ザビエル教会

〇〇 『日本初のクリスチャン』池端弥次郎(ヤジロー)『Note.com』

〇〇 山浦玄嗣 1940年 医師 言語学者 カトリック大船渡教会員 ローマ教皇庁に著書献上

〇〇 『イエスの言葉 ケセン語訳』山浦玄嗣 文春新書

話⑤

こだわりたい人へ

桃紅さんの
消えゆく柳

タイヘトンボ返りで行ったことがあります。

隣接する寺院から聞こえてくる聲明と、たいそうな器楽とを楽しみながらの珍妙なゴルフをする幸運に恵まれました。

ゴルフ雑誌の連載のなかで、タイ王室ゴルフ場を紹介する話が持ちあがって。1999年、避暑地ホアヒンでした。

二つ返事でうけたものの、成田から飛んで機中一泊二日1ラウンドという強行軍でした。貸しクラブでもよかったのですが、日ごろの相棒ゴルフバックを、南国の風に触れさせてあげようと連れていきました。

同行のカメラマンは撮影に専念。わたくしは資料をもらってあるから、仕事は見て確認するだけ。と、ひとりキョロキョロしていたら、スターターが寄ってきて、あそこにいる、英国人夫妻といつしよに回るのはいかがかと。ノープロブレムよ。

旦那のほうかわたくしのバックを指さし、「行ったことあるのか」と目をまるくする。イエース。スコットランドの端っこ、マクリハニッシュ・ゴルフ倶楽部で、買って帰った自慢のシロモノです。

わたくしを見下ろす長身の目が、友好的になって。ビールパイントを賭けて、マッチプレーやることになりました。

チャールス&アン・ソーントン夫妻。以来すっかり仲よしになって、四半世紀。ロンドン郊外の家を三度、世田谷のわがマンションに一度。クルーズで来たときは、長崎までいってランチする仲に。

樹木多種多様な、自然林。柘植の木を、刈り込んだ虎、象、鶏、ガチョウ、犬。英国庭園にもよくみられるオブジェです。

日英マッチプレー・ゴルフは一進一退。

13番ホールに近づいていくと、キラキラ陽を浴びる尖塔が見えてきました。山からの風のせいで読経の声が大きくなりました。夫妻についていた、タイ人の女性キャディが、地元の名家の大きな葬儀だ、と教えてくれました。

遅からず早からずの心地よいテンポ。14番ティに立つと、寺院は樹林のすぐ向こ

うの近さでした。

聲明が終わり、打楽器の合奏に変わりました。

カランジャラーン、ジャランカラーン…。

金属楽器の乾いた合奏。チャールスはアイリッシュの膝はね踊りを真似たりして。そこからナイスショットの連発。仏教音楽にノリノリなんですね。反対にわたくしはミスショット連発になりました。乗れないんじゃないやなくて、聴き惚れちゃったんです。聴いているとゴルフより面白い。

音楽好きのわたくしには、その日が忘れられない思い出の日になりました。チャールスたちとの遭遇の日にもなりましたし。

なんか、ジャワ島とかバリ島とかの、ガムラン音楽のように聴こえました。あのカランジャラーン、ジャランカラーンは、キャデイのいうとおり大きな葬儀で、鉄琴、太鼓、銅鑼など、伝統的な金属楽器の、たいそうな数の編成の大合奏だったのでしょう。

～

高校時代からつづく無二の友人、荒木重雄*さんは、わたくしとは大違いで本物の宗教人、なんと僧侶です。

互いにジャズが好きでした。高校に誕生したばかりのブラスバンド。指揮者が元佐世保の軍楽隊長と、かまえば立派でしたが、部員は5人いたかたいなかったか。レパートリーは校歌と「君が代」だけ。

わたくしはまるで下手なドラムを、荒木さんもまるで下手なトランペットを、やっていました。クラリネットの某の口聞きで、ある晩、五反田のキャバレーでプロのバンドの休憩時間に演奏しました。にわか仕込みの「トゥーヤング」と「テネシーワルツ」。あまりにお粗末なので一晩でお払い箱になりました。

神保町のレコード喫茶によくたむろしていました。お堅い大人たちからすると、たとえばうちの両親たちの頭からすると、それは「不良している」といわれる時代でした。

アルゼンチン・タンゴ専門のミロンガ、いまは場所が変わってミロンガヌオーバとなっています。シャンソン専門の店ラドリオ、中南米音楽専門の店ジャマイカ、同じく、いまでも昼時には行列のできる店さばうる…。

そのころNHKの夕方に『夕べの音楽』という日替わりで分野がことなる帯番組があつて、それぞれのディスクジョッキーを担当していた音楽評論家たち、高山正彦さん、蘆原英了さん、高橋忠彦さん、牧芳雄さん、いソノてルヲさん、と言った

面々がきてレコードの解説していました。

ああ、ラジオのあの声の人がこの人なんだと、コーヒーを啜りながらうっとり聴いていたものです。軽音楽ラジオの全盛期です。

荒木さんとはいまもミロンガヌオーバでおちあい、月イチ昼呑みハシゴ。長寿を愛でています。

荒木さんは親のもとを離れ、いまの神谷町あたり、当時、我善坊町という珍しい名前のところに住んで、高校に通っていました。丘陵地の脇によくある谷あい、下町の住宅や町工場が建てこんでいて、そのうちの一軒、急な外梯子を上がった屋根裏部屋に下宿してまいした。

当時、それはすごい自立なものでした。

まっすぐ立つと頭がゴツン。中腰で入ってすぐにアグラをかいて、おしゃべりをするのでした。コンビニも自販機もない時代、小遣いも乏しいので飲み物なんかありません。

わたくしは親父の勤務先の社宅で、空き部屋もあるゆつたりした住まいのおぼっちゃま暮らしでした。

そんなわたくしには、この屋根裏部屋は狭さが物珍しいだけでなく、なぜか居心地のいい生活空間に思えました。いわゆる「基地」ですかね。

数年ののち、アルベール・カミュの新作『転落』*に出会います。このなかに中世のころの「苦難部屋」なるものが登場しました。「マルコンフォール」とルビがうつてありました。

たやすくイメージできるものではありませんでした。わたくしには我善坊町のこの部屋が大いに想像の助けになりました。なぜなら、あの屋根裏部屋は荒木青年の、哲学する部屋であり、苦悩する部屋であつたに違いありませんから。

場所はいま超最先端タウン、麻布台ヒルズです。ナンチューカ、ヘンチューカ！ 時代の変遷は人の追懷を無粋にぶち壊してくれます。

ともに早稲田へ。といっても、荒木さんは第一文学部の美術専攻へ、わたくしは、夜の第二文学部の仏文学専攻へ、と進んで。

卒業して、彼はみごとに日本放送協会NHKに入りました。人生将棋で黒番劣勢の人生が始まったわけです。

NHKでは早々にティレクターとなつて、朝の人気番組『自然のアルバム』を作っていました。季節の気温変化とともにはいだす啓蟄の光景を映しつづけたり、巣だち鳥たちの勇ましきを見せてくれたり、自然の営みのをとらえる、根気のいる仕事

だったと思います。いま全5巻のアルバムになっていますね。

あの荒木さんが地べたにうづくまり、寒気、暑気をこらえ、自然界の摂理を捉えようと励み、人生のひとつきを生きているなあと、うらやましく見ていました。

NHKを退いてからは、ミッシェンスクールの桜美林大学に招かれ、常勤教授になって。南アジア地域を訪ね歩き、多様な歴史とそれぞれに発展した文化・芸術・政治などを専門とし、その学識でいまでいうリベラル・アーツを講義していたようです。

そのころわたくしはというと、不況の荒波にもまれてオフィスの運営が難航。その不愉快もあって、サイドワークとしてのゴルフの勉強に時間をさいていましたので、彼とは無沙汰していました。

その間に、彼はインド、ネパール、南アジア各地を深く潜行。

そして、聞いてロロン、知ってラターツ、古希を直前にして、高野山へピョーン、していったんです。

ふつうは、高野山専修学院という修行道場にはいり、剃髪して出家、実習科目である、常用經典、聲明、法式、布教といった、講義を受けて、基礎を身につけ、100日間、授戒、四度加行、灌頂、という修行を積むのです。

ある僧侶に相談したところ、個人的に塔中の真言密教の寺への道を用意されて、修行の道へ。

一年足らずで僧籍をとり、法名「観宙」をいただいた。漢字「宙」は、彼の希望だったそうです。アーラ、ナント、「空」ですね。

がしかし、今日の寺の在り方には大いに疑義がある。住まう地、東京・稲城市で仏教を学ぶ講座を始めました。はや四半世紀をこえ、毎月数十名の会員と例会を続けてきました。

高校時代からの友人が、かように見上げた宗教人になっていることは嬉しいというよりも誇らしい。

けれども、わたくしとの中身の丈の差は増すばかり。ニューン。

と

荒木さんに敬意を表して、般若心経をチラ見してみましようか。

わずか262文字に仏教の智慧が凝縮されている、これでも短いほうのお経なんだそうです。

般若心経は、全文ふりがな付きの本も数多く出ていますし、多くのウェブサイトで

にもなっています。

いちばん知られているのが、つぎの漢字8文字ですね。

色即是空　しきそくぜくう
空即是色　くうそくぜしき

なんとなく韻を踏んでいるから覚えやすいんですが、さて意味はとなると、わたくしは正直、覚束ない。

ではではと、てつとりばやくわたくしがいつも手もとに置いて頼りにしている『漢検漢字辞典』*を開いてみると。

五十音順ですから、先に「空」の字の項の熟語として「空即是色」があります。

〈仏〉万物の真の姿は実体がなく空であるが、それがそのままこの世に実在するものの姿でもあること。固定した実体がなく空であるからこそ、現象界の万物も成り立つと言うこと。「空」は固定した実体がないこと。「色」はこの世の物質的存在。

「実体がなく、空である」、この謎めいた言葉がストンと胃の腑に落ちる人は、すでに意味を知っていて、かつ、よく咀嚼できている人でしょうね。あるいは、咀嚼できているつもりの人というか。

と、与太を飛ばしてもふらつくばかり。まともなはなしを聞きましょう。

荒木さんは講座でこんなふうに話しています。

大乘仏教には「般若経」と総称される「経典群」があります。「空」の思想を説く経典群でして、「空」とは何かといいますと、これはなかなか難しいのですが、ごくごく簡単に言いますと、お釈迦さまが説いた仏教の原点である「縁起」の理の、大乘仏教版、「すべての存在は、他のものとの関係において変幻自在に生じたり滅したり変化するのであって、『固定的・永続的な実体』はない。ゆえに、個々のものごとに執着しても、詮無いこと、意味のないことである」ということでして、

ハイハイ、ナルホド。

そう悟って執着を絶てば「涅槃」に至る、仏の境地に至ることができる。

というんですね。そうした「空」の思想を中心に編まれた「般若経」と総称されるジャンルの経典がたくさんありまして、中から、核心となる部分を取り出して、300字足らずの簡潔な文章に凝縮した「般若経の精髓」とされるのが「般若心経」なのですね。

荒木さん、ありがとう。

仏教の話ってそもそもが観念論だと思うんですね、だから具体的な話で喩え話で分かってもらおうとします。

色即是空を、YouTubeで見よう、いやいや、勉強させていただこうと入っていくと、お話になる先生方が皆さんそうなのです。

わたくしは捻くれ者なので、小首傾げながら拝聴することになります。すると、分かり易いんだけど、突つくとガシャンと壊れちゃう喩え話が多い。

その点、お坊さんたちの喩え話は象徴的で寓話的で、分かった気にはなるんだけど、別な喩えでとなると応用が効かないんじゃないかなあ、と。

じつは昨日までは荒木観宙和尚に「なんかいい喩え話、教えてよ」と、電話しようと思っていました。

ところがですね、けさベッドの中で見つかったんです。しかも、本書をお読みくださっている読者各位には、すでにご存知の話が。アッタゼ！

で、早朝に起きちゃいました。

話①の、篠田桃紅さんの柳を思い出していただけますか。

桃紅さんの万葉和歌の墨象は、墨汁をそのまま用い、褪色防止の処理を施さないままでした。対面の大窓からの陽差しに、なされるがままに身をさらし、端から褪せていくように、移ろいゆくように設えてありました。

昨日まで眺めたのと同じように見えていても、一夜過ぎれば変化している。違うものなのです

これすなわち、そこにあるのは実体ではない。日々刻々と移り変わっている。刻々と見えなくなっている存在。だから、固定物としての美術品ではなく、執着するに足るものではないんですね。

わたくしたち人間もそう。日々細胞が入れ替わる。日々思いも考えも変わる。現在の自分にそんなにこだわる必要はないのさ、と。

あの時、目を和ませていた丹下健三さんに「色即是空ですねえ」と、お礼の言葉を口にできなかったこと、まことに、ニユンニユン、の至りであります。

夕べからけさにかけて、わたくしのなかにセレンディピティが起こっていたんですよ。嬉しい心波現象…。

桃紅さんは著書*で、

詩が言葉のエッセンスであるように、線がかたちのエッセンスでありたい。

捨ててもいいと思われるものを省いていった残りが、ともかくも今の私の線だと思っている。

と話しています。

そこまで研ぎすまし、純素に設えた線でありながら、やはり残らない。いや、残そうとしない。百七歳までも長寿でおられたけれど、あの瘦身はそうであったのかと、姿を偲びます。

桃紅さんの柳を思い出して桃紅さんご自身までもも偲んでいたら、アララ、聖書のなかの、お気に入り入りのページまでもがそよいできたではありませんか。

旧約聖書「コレヘトの言葉」*、その第3章です。

「何事にも時があり」で始まります

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

求める時、失う時

保つ時、放つ時

裂く時、縫う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

戦国時代ならではの、いささか腑におちない言葉もあります。

そしてこう続ける。

神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思ふ心を人に与えられる。

すべては神のお計らいという前提がありますが、効率社会、通俗社会のいまいうと「いつですか、いまでしょ」ですかね。そうだとすると、いまにおいても納得できる世を生きるマコトかも。

コレヘトの真意はなんなのでしょう。

同じ第3章に、

すべては塵から成った。

すべては塵に返る。

死後どうなるかを、誰が見せてくれよう。

とあり、第5章の、

人は、裸で母の胎を出たように、裸で帰る。

来た時の姿で、行くのだ。

に続くように読めます。すなわち、グズグズこだわっているな、という話ですね。

色即是空に通じる話ではありませんか。

「コレヘトの言葉」の第1章には、

なんという空しさ、すべては空しい。

ヘブライ語の聖書には「Hevelヘベル」が、繰りかえし出てくるそうです。日本語聖書では「空しい」と訳されています。これじゃ、コレヘトはニヒリストってことになっちゃうんです。

そんなわけない。モヤーツ。

そう思っていたら、NHKの番組で神学博士の小友聡先生*が、こうおっしゃったのです。

私はヘベルを、「束の間」、と訳しました。

すると「コレヘトの言葉」は

なんという束の間、すべては束の間。

なるほど、これならわたくしの空ッポアタマにもストーンとはまります。言葉一つで、こうもわかりやすく、胸に染みいつてくるものなんです。

篠田桃紅さんの墨象は、大窓からの日差しを浴びて褪色してゆき、20年か30年後には見えなくなる。

現実はあるホテルは壊されました。その際にあの襖がどうされ、20年30年という歳月をかけた、丹下健三さんと篠田さんの試みが、果たしてどうなったか、寡聞にして知りません。

でもですね、このあとの話⑥の土壤学者たちの地球誌スケールで計ると、20年30年は、流れ星より短い瞬き、束の間、計測不可なほどの小数点以下何十桁もの、シミすら残らない時間なのです。

と

般若心経に戻ります。大事なひとことを言い忘れていきます。

観自在菩薩

かんじざいぼさつ

行深般若波羅蜜多時

ぎょうじんはんにはらはらみったじ

照見五蘊皆空

しょうけんごうんかいこう

度一切苦厄

どいつさいくやく

舍利子

しゃりし

色不異空

しきふいくう

空不異色

くうふいしき

色即是空

しきそくぜくう

空即是色

くうそくぜしき

となり、先へ先へと進みます。

話⑤

読み進もうとしますが、読めない。

1行目からわからない。調べると「観音菩薩が悟りを求めて、修行される中で」だということ。

「五蘊」がわからない。調べてみると「五蘊」とは「色Ⅱ肉体、受Ⅱ感覚、想Ⅱ想像、行Ⅱ意志、識Ⅱ判断」。「これみな空である」と。

こんな塩梅では、お寺の夕べの鐘が鳴ってしまいます。

わずか262文字しかない短文と言われる「般若心経」にして、これですからね。これ、わかるには友人のように寺に籠らなければならないんでしょうか。

仏教もまた言葉が難しい。内向きなんです。ケセン語聖書のような大先生が現れてくだらないと。俗人には理解に至らない。

ただね、『源氏』や『平家』など古典文学の現代語訳については、贅沢なイチヤモンをつける評論家が出て、原著の深みが薄れたとか原著者の意図が歪められているとか。言わせておけばいい。

現代語訳、口語訳は、わたしたちリテラシーの低い者にはありがたいお助け様なのです。

分かってもらえて経典、分かってもらえて聖書、にあつてはなおさらです。弟子のために著された書物であつても、一般人に分かってもらえることはもつとない。信仰のための書物なんですから。

江戸時代には文字の読めない人のために「図絵般若心経」があつて広く親しまれていたそうです。

イエスキリストは救世主として現れました。ですから話し、教えることが役目でした。

それに比べて釈迦は、おのれうちの苦しみをなんとかしたいと修行し、菩提樹のもとで瞑想に入り、七日七夜ののち悟りに至り、そのことを喜びました。執着することから自分を解放した。それは自分だけの満足でした。

それを知った梵天に「あなたの悟りをみんなに話してくれれば、みんなが救われる」と布教をすすめられたんだとか。

執着という病いからの解放。「空になる」ことでしたね。荒木重雄さんの勉強会の副読本*で、佐々木閑さんが端的に話してくれています。

「仏教は病院である」

広告づくりの現役時代、30年近く協和発酵工業の企業広告をやらせてもらっていました。現キリン協和。

当時の会長は創業者の加藤辯三郎さん。ストレプトマイシンやグルタミン酸などの製造に成功した工学博士です。

昭和57年初冬のこと。広報部長から電話がかかってきました。「会長が来年正月元旦の新聞広告のアイデアを出された」と。

辯三郎さんが鹿児島県・徳之島に、当時の世界最長寿者・泉重千代さんを訪ねる。重千代さんは百十七歳。辯三郎さん八十三歳。足すと二人で二百歳。二人とも大の焼酎好きだ。

重千代さんという人はあさ目を覚ますと、毎日、長寿の世界記録を更新する人です。こんなにめでたいことはありません。

はなしを聞いてアタマが下がりました。長寿を寿ぐこんなにめでたい正月広告はない。医薬品メーカーとしてこんなに願ってもない広告はないと、辯三郎翁のアイデアにマイッタマイッタ。

徳之島への空の旅と船旅とを、ごいっしょさせてもらい、焼酎を酌み交わしました。忘れられない思い出です。

昭和58年の正月元旦、長寿お二人が焼酎を注いだ黒チョガを手に笑う広告が、全国紙各紙に全ページで載りました。

二人で二百歳。

二人とも焼酎党、

でございます。

というタイトルで。

辨三郎さんの祖父は出雲の酒造り。父は村役場の書記役。京都帝国大学、こんにちはの京大工学部に進んでバイオの世界へ。

青年のころ、宗教は科学を知らない野蛮な人間の信じるもので。

と、だいたんなことを書いておられました。

私は、青年のころ、宗教は科学を知らない、野蛮な人間の信じるもので」

と、だいたんなことまで書いておられました。

文明が開化し、科学隆盛の時代には、なんの役にも立たないものだと思つていた。宗教を信じないからといって、罰があたるわけでもないし、宗教などなくても、人生をエンジョイすることはできると。浅はかな考えであつた。

世に、こう考える人は、少なくないですね。

辨三郎さんは親鸞聖人の教えを知り、とくに『歎異抄』に出会つて人間の愚かさ気づき、その洞察にとりつかれて、ご自身の生活と会社経営の、バックボーンになさつた、とも語っておられました。

同社の各地の研究所の敷地内には、小さな生きものたちの命を祀る石塔がありました。小さな生きものたちとは、研究に寄与してくれたラットやマウスたち、それに発酵生産の主役・微生物たちです。

バイオサイエンスとテクノロジーの進歩を通して、企業活動を発展させるとともに、科学技術の振興をはかり、社会の発展と人類の福祉に貢献する。これが同社の経営理念になりました。

米国を中心にした巨大な経営資本により、急激に発展しはじめた遺伝子組換えという、革命的な科学技術の進歩に対応する、そのための新しい研究所を立ちあげようとしたが、辨三郎さんは、完成目前に急逝してしまわれました。

加藤記念バイオサイエンス研究所、と命名され、故人の遺志は引き継がれることになりましたが…。

大手町本社内に、一般社団法人在家仏教協会、の部屋をお持ちでした。毎週末に仏教講話会を開き、一時は全国展開もされていた。

在家仏教。初めて聞いたとき恥ずかしながら、ナンデスカソレ、でした。

もちろん当時から、空ッポアタマのわたくしなりに、にわかに学習しました。

徳之島への旅の途、わたくしは出発前のにわか学習をバツサリと、修正することになりました。

親鸞聖人が20年間の比叡山修行ののち、師の法然上人に教えられたのが、在家の仏道だということ。

朋友・荒木重雄さんの体験と重なったりする。

その浄土真宗は日本でもっとも信者数の多い宗派だそうです。大乘仏教の緩やかさが、信者の間口を広げたのです。

家族と別れて出家、つまり頭を剃って山に籠らなくても、世俗いつさいの執着をすべて絶たなくてよい。家にいて、会社で仕事をし、南無阿弥陀仏を、唱えていればよい。そういう緩やかな仏道だと知りました。

徳之島へは夜行便の短時間の船旅でしたが、濃密なおはなしを聞かせていただき、その時の、たとえば、

いい時はね、これぜんぶおかげさまで。わるい時は、これぜんぶ自分の責任、至らなさのためです。

これは、以後そっくりわたくしの考えにも、させてもらってます。

加藤さんの在家仏教教会は、特定の宗派、浄土真宗の枠すらはずした親睦団体にしていました。

宗教の集いは、垣根なし、扉なし。そうでないと。

と加藤さんはおっしゃった。広いお方だと感嘆したものでした。

この在り方を、わたくしは思いますのです。

仏教であろうと、キリスト教であろうと、「垣根なし、扉なし」。

外向けであるべき活動なんですよ。

*

- 502 荒木重雄 1937年 元桜美林大学名誉教授 高野山真言宗僧侶 アジア文化を学ぶ会主宰
- 503 『転落』アルベール・カミュ 佐藤明訳 新潮社
- 505 『漢検 漢字辞典』日本漢字教育振興会編 初版 日本漢字能力検定協会
- 507 『畢いろ』篠田桃紅 PHP研究所
- 507 『旧約聖書』「コレヘトの言葉」
- 507 『すべてには時がある 旧約「コレヘトの言葉」をめぐる対話』 若松英輔 小友聡 NHK出版
- 510 『NHK「1000分de名著」ブック ブッダ真理のことば』 佐々木閑

話⑥

変わりたい人へ

木きつていいかあ

いいぞお

南極大陸からはなれて漂流していたA23a。東京都の2倍もある世界最大の氷山が溶け続け、まもなく融解、との外電が伝えられたのが26年2月。これは記事だけの情報でしたが。

半年もたっていない朝、ヒマラヤ氷河のほんの一部が溶けた大規模土石流がダムを、橋を、街を押し流す映像が、茶の間に飛びこんできました。五千人以上、もつと多いかもという人命をも押し流したという未確認情報もまじえて。

ことし国内外は、洪水、渇水、山林火災、ヒートドーム、スーパージェルニーニョなどなど天災が猛威をふるっています。ネたパールの悲劇がハイライトかと思いきや、これがオーブニングらしいという恐怖の展開予測ではないですか。

原因はいわずと知れたチキキューオンダンカ。リーダーたる者たちの身勝手、先進国国民みんなの、気のゆるみです。

さつそくネパールの外務大臣が怒った*。「我々は自らが引き起こしたわけではない」といい、CO₂排出国、一位中国、二位アメリカ、三位インドの名をあげ「ネパールのような脆弱な国々に補償を行う歴史的責任を負っている」と。

ドローン飛ばして瓦礫の山と死体の山を積み上げていいんでしょうか。

月ロケット飛ばしのお遊びにうつつを抜かしていいんでしょうか。

大空へ宇宙ゴミを放ったらしにし、宇宙は広いんだからこのぐらいいはチリにもならない、と嘯いていていいんですか。こうした身勝手なうつつが、地球温暖化へ道だったはずなのに。

大將は、戦地に立たず、命令するだけの楽仕事。

まったくもう、です。

CO₂を減らす努力をしてもとへ戻せる転換点を、ティッピングポイントといいますが、ポイントはもうギリギリの目前、もはや手前で寸止めするのは無理だろうというのが世の流れです。

わたくしは元コピーライター。くりかえしますが、言葉ひとつの適不適で、仕事のよしあしを問われ、首すげかえられるかもという職業でした。

ラッキーにも数々の広告賞をいただくことができ、コピー殿堂入りの顕彰にも恵まれました。

このことだけを思っていればラッキーですが、思いを、世界や時代にむけてみると、わたくしひとりの幸運なんぞ、プッシュューッ！、としぼんでしまう。

口惜しいんです、「地球温暖化」というまちがった日本語表現に苛立ち、流されてしまったわたくしの敗戦記――。

地球温暖化なる五文字が、マスコミに顔をだした当初からわたくしの貧乏ゆすりが始まりました。日本中のジャーナリストが、学者が、政治家が、企業経営者が、そろいもそろってよくもこんな軽率な日本語に乗っかって、仕事をするもんだと。

洞爺湖サミットの計画が始まったころ。ここがチャンスとパソコンに向かいました。時の流れははやいものです、もう20年もまえになるんですね。

まずはおこがましくも議長国たる日本国の総理府へ。ついでに、当時よく見ていたテレビ朝日とTBSテレビの朝のワイドショー番組へ。さらに朝日新聞と日本経済新聞の編集局へ、書簡を送りました。

当時の米国副大統領アル・ゴアさんは、もともと環境問題の論客として知られ、環境問題の重鎮として2007年にはノーベル平和賞を受賞している人です。

彼はその緊急提言のキャンペーン・フレーズを

Global Warming

とし、これに、語呂合わせのサブフレーズを併記しました。

――A Global Warning

mをnにしましたが、いかにも米国人らしいウィットです。が、ゴアさんの真意は西部劇映画の犯人さがし“Wanted”のように指さす鋭さでせまりたい「警告」の叫びだったのです。

ここが、アクションの肝である、わたくしはそう読みとっていました。

この肝にだれ一人として気づかず「温暖化」という訳語が流布してしまった。確かにWarningは日本語に訳せば「温暖化」です。

しかし、日本という四季のある美しい国で、母国語を身につけた者の語感からすると、「温」も「暖」も好ましい言葉です。心地よいふくらみ、柔らかみをもった漢字です。「温暖」となればなお快適。ポカポカ、ヌクヌク。

ですから日本語訳として「温暖化」としたのは、キャンペーン・フレーズとしては不適切。あきらかに誤訳なんです。「温暖化」ではコワイゾ！の、日本語になっていないのです。

洞爺湖サミットの議長、時の福田赳夫総理は、総理の座につくなり、まことに無神経なお役所言葉である「後期高齢者医療制度」の不適切さに気づき、せめてもの改善策として、通称「長寿医療制度」と改めさせました。

その敏感さに期待したのですがダメでした。側近にしかるべくアタマの利く者がいなかったのでしょうか。

わたくしの指摘は、総理府にも前述の新聞にもモンダイ好きなテレビ局にも、ことごとく無視されました。取り上げるはずはありませんでした。彼らをアホ呼ばわりしたんですから。わたくしのほうがアホでした。

ジャーナリストでただひとり、当時の月刊『広告批評』誌の編集長・天野祐吉さんが、膝を打って、巻頭ページ*でとりあつかってくれました。

コピーライターの鈴木さんは怒る。その言葉からは切実な危機感が生まれてこない、というわけだ。ではなんと言えがいいか。たとえば「加熱化」だ、と鈴木さんは言う。なるほど「加熱化」なら「熱い！」という感じがする。「危ない！」という思いがわく。「なんとか熱を下げなきゃ！」と感じる。「温暖化」という言葉がここまで行きわたってしまったら、もう手遅れかもしれない。でも、ぼくは「加熱化」と言うことにする。できるかぎり言いふらそうと思う。

話⑥

天野さんはそのたった五年後、病いであっけなく旅立たれました。ずっと人気コラムニストとして世にニラミをきかせ続けておられたら、苛烈な好々爺になっていた

て、「温暖山」対「過熱岳」のとつ組みをどう解説していたことでしょう。最近になって国連のお偉いさんが、「もはや沸騰化」だと演説していましたが、オソイ、オソイ、十年オソインダー！

25年は全国で観測史上、最高温度記録が更新また更新の夏でした。

気象庁は、最高気温25℃以上の日を「夏日」と呼び、30℃以上の日を「真夏日」、35℃以上を「猛暑日」、40℃超えを「酷暑日」と決めました。45℃以上になったら、なんと呼ぶことにするのでしょうか。「古米」「古古米」「古古古米」「テンテ古米」式の、やつつけネーミングになるのでしょうか。

「スーパー暑日」か、「メツチャ暑日」？「煮釜日」？「フライパンデー」？

長年、自動車、家電製品、旅行、百貨店…などの、広告コピーを書いてきたわたくし。CO₂を排出する製品の普及にまぎれもなく加担したことでもあります。自身の生活でも、大量にCO₂を排出してきました。

いまごろ懺悔してもどうにもならないでしょう。わたくし一人がCO₂を排出しない生活なんてできるわけでもありませんが。

わたくしの好きな寺田寅彦さんの句を添えてご勘弁を。

哲学も化学も寒き噓哉 寅彦*

5

わたくしはフェイスブックをやっています。その日その時々感じたことを書くうとすると、不愉快な話題が多くなっちゃいます。そんなネガティブなことをことさら友だちに読んでもらって不愉快の輪を広げたくありません。

以前はテレレントたちの「チョーウマイ」が耳ざわりでしたが、六、七年ほど前から「無茶苦茶ウマイ」。

強調語の「無茶苦茶」は、ほんらい肯定的な言葉には使わないはずなのに、はやりだし、きのうきょうは、「メチャウマ」になって蔓延し、いまや、NHKのアナウンサーの口からも漏れます。訳知り顔の女優コメンテーターが「新幹線のダイヤはメツチャクチャ正確」だなんて。

古いわたくしはそのつどイラだつけれど、こんな話題をフェイスブックに書い

たつて世の潮流にはへでもない。で、なん年かまえから投稿を「ハッピーです。」のマクラで書き出すことに決めました。するとポジの話題しか書けない。いわば自主規制です。

わたくしたちは、地球に生き残ってきた民族「ホモ・サピエンス」。ラテン語で「知恵ある人」なる称号をいただいているんです。空っぽアタマのわたくしでさえ、こんなていどの自主規制なら思いつきます。

たいそうにいえば、倫理観、とカッコつけたっていいです。ソレやめてみようか、と抑制する崇高な知恵でもあります。

こういう話、どつかにあつたよなー、と探したら、アー、アソコ。

朋友・荒木重雄さんが、東京・稲城市で続けている研究会の副読本。

梅原猛さんの本です。梅原さんは哲学者ですが、平たい言葉で易しく語るのひろく親しまれた篤学者でした。

京都での講演が一冊の手軽な本*に、なっていて――。

こんには紀元前五世紀ごろと似ているんだそうです。孔子、釈迦、ソクラテス、それにイエス・キリストの先駆者といわれる第二イザヤを加えた、世界の四聖。この四人がともに期せずして紀元前五世紀ごろに現れた。

紀元前五世紀ごろという時代は高度に発達した文明社会だったのだそうで、そんな時代だからこそ、人間いかに生くべきか、その精神的な原理となったのが、この四人が唱えた哲学・宗教だったのだそうです。

梅原さんは、こう話しています。

文明が発展して豊かになると、人はどのように生きていいか分からないという悩みを抱えます。高度に発展した文明の中でどうして人間が生きたらいいかという精神的な原理を人類が見いだしたのが紀元前五世紀。この時代が軸になって（中略）その後の文明は展開されたと言っています。（中略）生活は豊かになったが、現代もまたどう生きたらいいかという倫理や道徳が確立されていない時代です。（四聖が出て）こんな文明を続けていたら人類は滅びるぞと予言した。

しつかりとした倫理観や道徳心をとまなう思い方、考え方、生き方のだいじ、を

説いているんですね。

あらためてたいそうな説教を聞きにいったり、経典に取り組んだりしなくても、わたくしたち日本人には、温かい和みの血が流れているじゃありませんか。

日本武道のすべてに通じるどっしりとした蹲踞の姿勢。あるいは、坐禅という瞑想や呼吸や心の持ちようです。

今日の便利生活でつつい緩みがちになっている姿勢、歪みがちになっている頭の働き、乱れがちになっている正しい呼吸、物思い、瞑想、睡眠…。

こうした、見過ごしがちな足元を見直すだけでも、丁寧な暮らし方、細々とした内省や利他の順序づけやらが、あらたな顔つきで、コンニチハ！してくるのではないでしょうかねえ。

）

1973年の交通安全年間スローガンに「せまい日本 そんなに急いで どこへ行く」という傑作がありました。

覚えやすいえにユーモアも効いていて、こんなにちでもスピード運転をたしなめるときに使われる、息の長い警句です。

このころ、世の中がゆつくりしたフォークソングを歌いました。「ゆーっくり行こーよ、どこーまーでーも」と。

世の中全体が後戻りしたのでした。べつな道を探したのでした。いまがまた、そういう時代なのです。自動車に限らないことですが、アクセルから足をはなし、しばしサイドブレーキを引いて、いまこそ、適切速度をさぐるとき。

文明の発展には、そもそも文明の開発とはなにか。走るとは、いったいどういうことなのか。そんなソモソモ論に、その倫理観に、頭を使うことが必要なんだと、21世紀の寡黙な賢人たちも気づきはじめているんじゃないでしょうか。

開発、それはそれとして、備えは万全か、どんなにちっちゃくても危険はないか。安全とは率100パーセントのことではなければなりません。99・99を、100とみなしてはいないか。それでは安心できません。

人の命より、家族の幸せより、街の明日より、経済が先、といわんばかりの政治家たち、経営者たちが、ウジャマンという。大将たちが兵隊たちにハッパをかけてい

る。かつてのわたくしのようにです。グスン。

いまからじゃ、もう遅いか。人間には弱者の悟りがあり、躊躇するという見識があり、制御し、思いとどまる用心があり、他人に対しての遠慮があります。

ふつうのホモ・サピエンスならばです。

）

先ごろの、ノーベル賞化学賞・北川進さんと、生理学賞医学賞・坂口志文さんの、ダブル受賞は吉報でした。

といつてもわたくしは、それまでの研究、業績を、ぜんぜん存じ上げない両先生でしたけれど、嬉しかったのは、受賞後のスピーチなんです。

お二人の研究には「なにを足しあわせるか、ではなく、なにを引くか」という新しい発想「無用の用」。紀元前の賢人の知恵が励ましになったそうです。

足し算の築き方に比べて、引き算の詰め方は、無くする、失う、穴が開くという、ネガティブな試練のように誤まりがちなんです、ソージャナイ！

無くしたあとには空気が生まれる。それは自由な空き地で新しいものが芽生え、新しい有用が入りこんでくる。

人間にはそれを見つける明晰なセンサー、聡明な智力の備わりが求められます。明晰なセンサー、聡明な智力とは、話②で話したセレンディップ島の王子たちが持っていた技ですね。

「無用の用」は、中国・老荘時代の、タオの知恵でしたね。

馬車の車輪には、中心にむかつて輻（や）がたくさん集まっていて、ここ轂（こしき）という中心部は空洞です。ここは空ツポの穴で、いつけん、無用の空きスペースですが、ここに軸を通すことで馬車は動くんだ、という教えです。

いい空きスペースがあつて、いい部屋になる。

いい空き地があつてこそ、街が豊かになる。

いい空き地があつてこそ、いい施設が生まれる。

いい間を置いてこそ、名人の語り口になる。

いい幕間をとつてこそ、余韻の深いミュージカル。

人間組織にもいえます。部長席が空いたことで、下で働いていた課長が昇格、前任者を超える名部長に育つ。

スポーツでいえばベテランの怪我で空きができた。新人が穴埋めを果たすどころか、新しいスタープレーヤーの誕生、となったりする。

ゴルフ場には、こんな事例もあります。ご神木だからとおそれて、代々伐採しなかったコース内の大樹を、新しい運営組織が伐採したら、その周辺の水脈・日照が改善され、周辺の芝生や灌木の生育が、素晴らしくなった、など、名門倶楽部ではよく耳にする快事です。

）

目先のことにとらわれがちな今日ごろですが。わたくしは二人の研究者から「46億年視野」というものごとを考えるときの、心の構え方というとてもないプレゼントをいただきました。

お二人とも「土の研究者」。その専門世界で46億年は定説のようなのです。

まず、藤井一至*さん。

極北の永久凍土へ、インドネシアの熱帯雨林へと、スコップ片手の土集め旅行。ですから、空港では荷物検査で怪しまれることも二度や三度ではなく、僻地へ飛んで、穴を掘る世界の土のコレクターです。

「土壌学者」と呼ばれるのを嫌い、「土の研究者」と自称しています。そのわけを「土を教える研究者」ではなく「土に教わる研究者」だからだとおっしゃる、このあたりの姿勢に高い人気のほどがあります。

「ためらいこそ知性」

「知らない」じゃなくて「分からない」

46億年という地球誌視点の視野を前にした人ならでこその、どしつとした躊躇、呼吸の深い心の持ちようが感じられます。

厚さ10センチの岩石層が風化して柔らかくなって、微生物などさまざまな生命が生を営む30センチの土の層になるのには、数千年を要するのだそうです。

この速度のことを「自然」というのだという見識です。いいかえればこの速度を

間違えれば「不自然」となります。そこに生を営む微生物やミミズやナメクジや彼らのウンコにとっては「不都合」な場になります。

自然は強靱で頑丈なもの、とわたくしたちは思いがちですが、繊細で、神経質なものの、オットオ、ものじゃなくて、生きものですね。

ですから自然主体。人工的な農法、化学農薬などには、もちろん慎重姿勢です。「他から力を借りてきて、何とかしようとする施策」は不自然ですから原則バツ、というわかりやすいはなしで。

藤井さんは、土の中の生きものたちが、つぎの営みに進む自然速度をだいにする、農業生産者たちへの「協力者」でなければならぬ、そういう自制心を抱いています。

そして、地球上100億人の食事のための「奉仕者」だという責任感。

藤井さんのような方は希少な学者なのかと思いきや、全国の農業事業者には共感し、共同しあう人が少なくなっていて、その実践例がなん本ものユーチューブになって公開されています。

わたくしが心打たれたのは、そこに登場する人々のはなしには「ただそれだけの話なんですよ」とか「土を可愛がってやることです」のような、とてもシンプルで普段着的で、こころ優しい言葉が多いんです。ムベナルカナです。

わたくしはバイオの会社、協和発酵に関わっていました。同社では全社員が、つね日ごろスプーンとビニール袋を持っていて、出張先や家族とのドライブ先で土をすくって持ち帰り、中央研究所へ届ける、という全社運動をやっていました。

もの忘れのすごいわたくしなんですが、藤井さんのプロジェクトの中の微生物、菌根菌、バクテリアなどは、かつて長くおつきあいした生きものたちなので、ヤーオヒサシブリ、の思いで読みすすむことができました。

土の先生、二人目は中村桂子*先生です。

24年の夏、書店で新書判の『人類はどこで間違えたのか 土とヒトの生命誌』*を手にとって、ペラペラ、興味しんしんのキーワードたちに目が踊りました。

46億年 生命誌絵巻

中から日線

中村さんの話は、46億年前からの「私たち」なんです。宇宙史140億年、それから轟々と激動し、46億前に地球が誕生、地球史が始まった。そこを「私たち生きもの」を考える始点とし、これからの道を見つけようという考察です。

空っぽアタマのわたくしでも、勇気づけられるかもしれないと、中村さんの道探しの旅に便乗させてもらいたくなりました。

同書の「はじめに」にこう書いておられます。

中村さんは、紬織（つむぎおり）の人間国宝・志村ふくみさんの100歳記念出版『野の果て』*のなかに「別の道」があり、そして、米国人女性の水産生物学者、レイチエル・カールソンさんの著書のなかにも「べつの道」という同じ提言があつて、その世界観に強い共感をえた、と。

いま人類が岐路にあつて遅かりしの感否めないけれども、いや、であるからこそ、別な道へ、日々の歩調をととのえなおし、生きゆく方向を改める……と。

中村さんは生きものから生きものへの農耕という話を、順々につづっています。その提言の切り口は、たえず「私たちの中の私たち」なんです。

日常の中の人間も、ただ一人で存在することはなく、常に「私たち」の中にあるものです。

人間がいちばん偉い、という態度を捨て去るべき。

人間は犬歯が小さくて喧嘩に弱い。だから果物など森の恵みを頼りにしました。強い犬歯を持つ動物たちにいる森のなかは避け、端のほうや草原に集まった。そして弱い者同士家族となり、弱い動物たちと群れとなり、共同社会を作った——とはお馴染みの人類ストーリーです。

二足歩行という知恵によって、家族と仲間たちの食事のために働きにでる。人間は大きな脳のために、十分な栄養を摂取しなければなりませんからね。

二足歩行になってからも、猿人、原人、旧人、そして、賢くなったはずなのに、弱い現代人、強いフリをするばかりの現代人……

地球が危ういとか、生きものたちが滅びる、と言われることがあります、危ういのは人間なのです。地球が太陽の終焉と共に、終わりを迎えることはあっても、人間の力で滅びることはありません。太陽は今後50億年は続くとされますので、地球の心配はしなくてよいでしょう。

イワシのような小魚たちは群れをなして大海のなかを移動します。集合体全体で大きな姿に見せ、しかも、捉えどころのないように全体を変容させながら。

美しいけれども健気でじつは必死な生き様。弱小だからおおぜい一緒になって、大きく見せて喰われないようにという生き様なんですね。

小さいからこそ連帯する賢い知恵のはずなんです、現代のホモサピエンスたちは、勘ちがいして、薄っぺらな知識を先にしがちです。

魚へんに弱と書く漢字が「イワシ」。で「僕」や「俺」のようににんべんに「弱」と書く「ニンゲン」と読めたりして。

中村さんは「私たちの中の私たち」の存続、共存の道として「別な」道を、提言します。その道は「ただ別の道ではなく、本来の道」だとおっしゃっています。

そうそう、わたくしの卒業論文のテーマ。当時ジャン・ポール・サルトルと、人氣を二分していた実存主義文学者、アルベール・カミュの言葉*でした。

Solitaire ou Solidaire (ソリテール・ウ・ソリデール)

孤独か連帯か

学生のころから、語呂あわせにピンピンするクセがあつたんです。

読むたび、涙が出そうになるはなしが、宮澤賢治の童話集*にあります。

『狼森と策森、盗森』です。

百姓たちが農作業をし、家族といっしょに住まうために、森に囲われた小さな野原をみつけました。百姓たちは、声を揃えて森に呼びかけます。

「ここへ畑起こしてもいいかあ。」

「いいぞお。」森が一斉にこたえました。

みんなはまた叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森はいつぺんにこたえました。

みんなはまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ。」

「いいぞお。」森はいつぺんにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木貰ってもいいかあ。」

「ようし。」森は一斉にこたえました。

どうですか。わたくしたちが、自然環境のなかにいて忘れてきた、共同生活者としての挨拶。引越してきた、新規参入者の礼儀ですね。

許諾。お願いするだけでなく、オーケーをもらってこそ、挨拶は成立します。

これが本来なのだよ。この童話は、思い出させてくれます。

自然だって、いつかは怒ります。わたくしが加筆。

「もう怒ってるぞお」

「これ以上怒らせるなあ」

*

601 ネパール外相カナルのメッセージ 2026年9月3日テレビ朝日「ワイド!スクランブル」

603 「広告批評」誌 200年8月号 天野祐吉編集長

604 寺田寅彦氏の俳句

605 「梅原猛の授業 仏になろう」梅原猛 朝日文庫

608 「土と生命の46億年史―土と進化の謎に迫る―」藤井一至 ブルーバックス

608 「上 地球最後のナゾ」藤井一至 光文社文庫

609 「人類はどこで間違えたのか 土とヒトの生命誌」中村桂子 中公新書ラクレ

610 「野の果て」志村ふくみ 岩波書店

611 「追放と王国」アルペール・カミュ 窪田啓作訳 新潮文庫

611 「注文の多い料理店」宮沢賢治 角川文

話⑦

自由にゴルフしたい人へ

少ないことは多いこと

ゴルフ学校

わたくしは仕事のためにゴルフを始めました。モーレツビジネスのまつ盛りのなか、仕事先の担当者、上層部の人たちが、ゴルフをやる人だったからです。

もともとは、ゴルフというより、ゴルフする人が苦手でした。

月曜朝の定例会議は部長を待つ間、週末のゴルフ談義。来れば部長も混ざって、課長係長がゴマすって。しかし、こんな人種とゴルフなんかしたくない、という選択肢はなくて、仕事もらえるならこの人種とでもゴルフをしよう、なのでした。

オレはちゃんとかっこよく遊んでやろう、上手にプレーしてやろう、と練習に励みました。数年でシングルのプレーヤーになりました。

勉強もしました。ゴルフ学の勉強です。

教科書は、まず、公式ゴルフ規則書*。コレしたら1ペナルティ、アレした2ペナルティと、ややこしいことはなほだし。

しかし、ボールはあるがままにプレーが大原則。これが性に合いました。

“Play the ball as it lies.”

なのだけれども、あっちこっちへ飛んでままならない。転がって止まったライが、斜面だったり、穴ボコだったり。ままならないから、ズルしたりする人がいる。

やがて、本場リンクスランドの地を踏むようになって、ままならないから面白いのホントの意味が、わかかわかっちゃいました。

>

話⑦

テレビで見る、デカイこと好き、派手好きの米国ゴルフ、とりわけ、メジャー・トーナメントの盛り上がり方は、かくべつの見栄えでした。

ただわたくしの心は、そのあり様に見惚れながらも、チガウナア、でした。

最初の海外は、拙著『ピーターたちのゴルフマナー』*が、1990年ゴルフダイジェスト読者大賞を受賞しまして、副賞として、ロサンゼルス往復航空券をいただきましたので、ペブルビーチ・ゴルフ・リンクス、スパイグラスヒルなど、モンテレーのコースの周遊でした。

ペブルビーチはなるほど名にし負う名リンクスで、もの覚えの悪いわたくしでさえ、一度で18ホールズを覚えられるコースでした。

米国では、その後、パームスプリング一带をまわる機会がありました。このときのガツカリ感といったら…。一大ゴルフ天国と言われる一帯、PGAウエストなどプレーした4コースはどれも同じでした。

砂漠の丘陵地帯に、古代エジプト人もビックリの大規模灌漑で、水を引きこんできて、土を盛り、芝を張り、花木を移植、人工ゴルフコースを設え、数十コースをつなげ、コース周辺にセカンドハウスを建て、一大不動産ビジネスの世界に。

自然界ありのままを生かした風景ではなく、資本主義大国、米国の工業パワーによって造成された人造世界。ま、デイズニーランドと変わらんね、でした。

ムリを承知で、惹かれるままにゴルフ発祥の地、スコットランド、そしてイングランド、アイルランドのリンクスランドと呼ばれる一帯に向かいました。

漁業の海と、酪農の丘陵、二つの「生産地帯」のあいだをつなぐ、一帯だからリンクスランド。本来は不毛の砂地なのです。

風雨急変するここで、初めはウサギが猛風を除けるために掘った穴ぼに、そこいらにある石ころを、そこいらにある棒つきれで、打ち転がして遊ぶ農民たちや漁民たち。酒を呑むほかに、とりたててこれという娯楽がない土地柄です。思うようにいかないこの素朴な遊びが、彼らの気性にはまった。

どうなつてもあるがまま。あるがままっていうのが難しくって、ドーシテドーシテ、これがめつぼう面白い。心の動きが面白い。困難をリカバーできるとなお面白い。まるで人生のように面白いじゃないか。

北国の人々の内向的なところと肌があつたんですね。不毛の地リンクスランドが、気持ち昂るプレイランドになりました。

そして、遊び方を考えました。仲間内の決めごと、ルールです。

あるがまま。これが規則第一条。

適当でエエベ、こつから打つことにスッペ、あつちの穴をねらうべや。

より少ない回数で、穴に入れたモンが勝ち。

二人いれば、二人で遊ぶマッチ。三人なら一人対二人。四人なら二人対二人のペアマッチ。住まう方向で東西戦、要するにチーム戦の始まりです。

疲れたらおしまい。呑みながらだから酔っ払っちゃったらおしまい。

夏場は日の暮れがながい北国のこと、勝負がつかなくてもう1ホール、もう1ホールと時を忘れて遊ぶ男たち。大声太つちよの女房どのから子供たちのように叱られたりしたことでしょう。

ボールが風でどっちへ流されようと、傾斜でどっちへ跳ねて転がろうと、止まつたところがつぎのライ。文句たれずに、ハイハイ、サッサ、と規則第一条、あるがままにプレー進行。

昨日まで小さな穴ぼこだつたのが一夜の強風で大きなバンカーになったりする。

ブッシュの奥やクリークのなかなど、どうに打てないところに止まっていたら、そこはそこ、遊び好きスピリットの出番です。ギブアップしておしまにする、のではなくて、「アンプレイアブル」宣言で1罰打か、スキットルのスコッチ1口でドーダンベ、か。

一点にわか黒雲がビュービュー、ザーザーを連れてくる。ジャンパーにくるまつて、待つもよし、子どもになつて遊び続けるもよし。

自分で担ぐクラブは少ないほど軽くてよし。むしろ少ない道具をいろいろ工夫して、使いこなすからおもしろい。

少ないほど豊か。

“Less is More.”

貧しい不毛の地に広まつたマッチプレー・ゴルフ。サアサア、サッサの遊びです。

この伝統を、頑なに面白がり、便利がつて、尊守するのが英国式ゴルフです。

わたくしは米国では本土で6コース、ハワイで10数コース、英国圏では、リンクスコース中心に、40コース超を巡つてラウンドしました。

どうしてもトラッドな遊び場のほうが性にあうのです。人のいい田舎のおじさん

たちとのほうが気が和むのです。

ゴルフからあれこれ多くを学んだのも、粗にして野、素にしてありのままの、田舎ゴルフのほうからです。

>

著書は12冊になりました。コピー関連のものより数冊多いんです。

『ピーターたちのゴルフマナー』に、出版のゴースサインがゴルフダイジェスト社、当時の編集局長、中村信隆さんから出たときは、喜びを胸においておけず、ブックデザインの副田高行さんに路上から、大声で電話したものでした。

1999年のことでした。出版界に、ゴルフマナーの本は売れない、という定説がありました。マナーのいいゴルフファーには必要ない。マナーのよくないゴルフファーは本なんか読まない。マーケティング的に成立しない企画なのでした。

中村さんはそんな俗説を吹っ飛ばすようなハイブローな線を狙っていて。たとえばゴルフの総本山R&Aが出したもののように見せよう、などとトンデいしました。

広告デザインでも特異の発想の人、副田さんは副田さんで、たとえば、英米のホテルのタンスに入ってる聖書、ハードなデザインで金箔文字のアレみたいな、とひとり酔っている。

それが中村さんのハイブロー戦略にハマって。ソリヤソーデス、副田イメージは総本山R&Aをはるか超えて、ローマの総本山、教皇庁の高みだったんですから。

現在の「令和版」までで、通算18刷のロングセラー。幸せです。

「ピーターたち」の冠にはいろんな思い入れがあるんです。副田さんやわたくしたちの仲間が、渡り鳥ゴルフファー、ピーター・テラベイネンのファンクラブでした。本の章扉に引用した名言の主たちは、ピーター・テラベイネンの他にピーター・ヘイ、ピーター・アリスなど。スコットランドにはピーター名の人が多いこと。

もちろん「ピーターズクラブの」に思わせたい魂胆もありました。

ピーターズクラブは、友が友を呼び、最盛時の名簿は総勢1000名を越えました。月例会は10組が埋まりました。

もう一冊、大判ムック本『痛快！ゴルフ学』*が、出来あがったときのヤッタゼ感も格別でしたね。練りに練ったすえのものではなく、駄洒落好きに火がついた、まったくの思いつきでしたからなおのこと。

ゴルフの勉強が広がつていくなかで、書棚を愛でながら焼酎片手の某夜、ふと、セレンディップ一閃、この棚を一冊にしてみようと、含み笑い、フッシッシ。

早速あるパーティの賑わいのなかで、某出版社のボスに立ち話をしたところ、破顔一笑、即決でした。

翌日から、本気で、目次を書き出しました。

- 第1章 入学式 ゴルフ大脳生理学 どこからゴルフに入るべきか。
- 第2章 ゴルフ起源説 球はじきから始まった
- 第3章 ゴルフ歴史学 ゴルフ100年史のVIPたち
- 第4章 ゴルフ法律学 ゴルフ規則はプレーヤーの味方
- 第5章 ゴルフ倫理学 ゴルフは性善説か性悪説か
- 第6章 ゴルフ社会学 江戸の町に学ぶゴルフ場社会
- 第7章 ゴルフ教育学 叱責の達人たち
- 第8章 ゴルフ犯罪学 スコアの嘘つき
- 第9章 ゴルフ運動原理学 正しい呼吸、正しいスイング
- 第10章 ゴルフ心理学 イップスのある人、ない人
- 第11章 ゴルフ物理学 「飛ぶ」と「だれでも飛ぶ」の違い
- 第12章 ゴルフ言語学 ゴルフ用語はゴルフの母国語で
- 第13章 ゴルフ造園学 ゴルフコースはダマシの造園
- 第14章 ゴルフ建設学 自分たちのコースをつくる方法
- 第15章 ゴルフ植物学 日本のゴルフ場はオーガスタを超える
- 第16章 ゴルフ気象学 雷というゴルフの外敵
- 第17章 ゴルフ情報学 ゴルフ雑誌は教え魔か
- 第18章 ゴルフ人間関係工学 キャデイといい仲になろう
- 第19章 ゴルフ経済学 ゴルフ料金はもつと安くなる
- 第20章 ゴルフ医学 ゴルフで安楽死する方法
- 第21章 ゴルフ考古学 消えた名コース
- 第22章 ゴルフ演出学 ベットの効用

- 第23章 ゴルフ女流学 強き者、汝の名はレデイス
- 第24章 ゴルフ服飾学 ウエアにおける輪と和
- 第25章 ゴルフ文学 文士たちはゴルフがお下手？
- 第26章 ゴルフ資料学 日本史と世界史
- 第27章 卒業式 ゴルフ宗教学 7つの感謝

新橋の名舗だった「独楽」の常連、故・杉山通敬さん、故・藤岡三樹臣さんに声かけて分担を決めました。コース設計家の故・川田太三さん、ゴルフ医師の小暮堅三さん、友だちの坊城浩さんにも、一本ずつお願いして。
かくして、A4版344ページの分厚い「ゴルフ学の書」？が、日本のゴルフ史に誕生したのであります。

>

パブリックの古河ゴルフリンクスとの出会いがラッキーでした。

スコットランド巡りを始めてからというもの、ふだん行っていたホームコースに、なんだか足が向かなくなりました。

しかし気候も三寒四温、啓蟄も近づいていて、体がムズムズ。ある日、聞いたことのある古河ゴルフリンクスに電話してみました。

「明日は愛のカップル・コンペです。○時○分なら、お二人どうぞ」。

クラブハウスのビル、3階からの眺望は、お!! まさにリンクス。

故・金田武明*さんが、セントアンドリュースの、あれこれを模した、という風景が、そこかしこに見られました。コースは長くて、トリッキー。グリーンは、大きくてポテトチップス。アプローチ・レンジは、150ヤード以上もある。

会名を、ゴルフクラブとしないで、ただクラブとしたのは、ゴルフに限らない、仲間にしたい、という思いからです。じつさい、そういう集まりになりました。

日本に、こういうコースが、あつたのかと、魅せられて。

市の公民館の3、4階をクラブハウスに。食堂は地味、浴室は簡素。

1階ホールには社交ダンスの肩も露わなおばさまたちが出てきたり、どこかからはロックバンドの音が、ベェンベンベン聞こえてきたり。なんか開けっぴろげ、雑居

1階ホールには社交ダンスの肩も露わなおばさまたちが出てきたり、どこかからはロックバンドの音が、ベェンベンベン聞こえてきたり。なんか開けっぴろげ、雑居のパブリックです。

その日、春一番までもがスコットランド帰りのうちの夫婦を歓迎してくれて。二人とも花粉症でしたので、コースに舞う砂塵でヒドい顔になりました。

ここがピーターズクラブ*のホームコースとして申し分ありませんでした。

ホームページで電子クラブハウスを立ちあげました。行事告知、月例会への参加・キャンセル、個人的なメッセージ、友人紹介、などなど。

冒頭で、“We Love Links”四つの基本を、宣言しました。

①「本来のゴルフ」。前述したとおり、ゲーム競技相手の、顔が見える、マッチプレー。無駄がなく、手ぎわがいい。

②「質素なゴルフ」。コースと相談、プレーフィーを愛好会と同額にしてもらい、19番の飲食はできるかぎり低廉メニューに。そのかわり普段もここを利用するようにしよう。風呂なし食堂なしの休業日料金日には、ここで火曜例会。

③「セルフでゴルフ」。ホームコースなのだからキャディはいらない。自立したゴルフの学びの場です。目土、バンカーならし、ゴミ拾いも忙しくやる。

④「心温まるゴルフ」。利他のゴルフ。マッチの相手、同伴する別マッチの二人はもちろん、コースで行き交う、すべての人と「どうぞ」「どうも」。

古河でプレーするより、もっと低廉なコース、探せばあります。

面々はある意味でテングです。春夏秋冬、刺激があつて飽きない、たとえ絶好のゴルフ日和であってもテングの鼻をへし折つてくれる、容易ならざるフィールドであつてほしい。安かろう、易かろうでは、いけないんです。

金田武明さんという泰斗の原案設計に賭けた、甲斐がありました。18ホールズの長さ、ランの妙味、グリーンのアンジュレーション、アプローチ・レンジのバラエティ、申し分ありませんでした。

よく名門倶楽部の会員が、楽しむホール・バイ・ホールの、愛称も考えました。

1番ホールの前方には、渡良瀬遊水地の大きな水門の上半分が見えます、春霞や砂埃の季節、スコットランドで見た城に見えるので「古城」。

3番ホールは、グリーン前方の新三国橋を渡る小ささまざまなトラックが渋滞しています。こちらが球打ちにうつつをぬかしいているのに、やあ労働者諸君！で

す。名台詞で讀みたいではありませんか。「寅さん」と名づけました。

16番グリーンは、可の字型で、口の字あたりがもじやもじやのグラスバンカー。加減するとダルマ落とし。振るとグリーン・オーバー。名づけて「魔女の脇毛」。

>

ゴルフにはいろいろと決まりごとがありますが、もつと自由に、遊べばいいのと思います。いろいろできるんですから。

古来、このゲームの決まりの数字は、いい加減なんです。18ホールズ、パー72、クラブは14本、カップの直径は108ミリ…。ある根拠にもとづいた根拠はないんです。

ゴルフア—というのは人づきあいのいい人種なんです。だれかがこれでいいかという、そうしようとそうしようとなつて、ニツコリ笑つて握手して始めただけの話なんです。スコットランドの田舎からこうして始まったのはうなづけますが、計算だかい米国へ伝わつてからも、この伝統を守っているところが、なんとも不思議ではあります。

もつと自由ということでは、毎年2回パター1本と好きなクラブ5本で「イチゴカップ」をやります。勝つたサイドが、冬はイチゴを、秋はブドウを1箱ずつ土産に持ち帰る。クラブ本数を減らしてもスコアが変わりませんね。

アメリカでも少本数ゴルフへ「進化」すればよかったのに、そうすると道具ビジネスの経済が発展しなくなる、そんなところなんでしょうね。

ロイヤル・バークデールGCでの話。

英国マ—ジーサイドの厳格な倶楽部です。友人のチャールスとセクレタリーのイックと回つていた日。

10番ティからマイクが最古参メンバーだと紹介するビルが加わりました。われわれと同じ手引きカートですが、ビルのそれはバッテリー付きで、「エレクトリック・ステッキ」と自慢顔でした。

三人が白ティからショットを済ませると、前方のブッシュに身を隠していたビルが出てきて、赤ティに立ちカッコ悪く体をまわし、チョ—ンと飛ばしてサッサと。

グリーンに乗るとスタート前に断りがあつたとおり、三人よりさきに続けてパッ

ティング。タツプイン済ませて次のティへ。ビルに待たされる時間は一度もなし。

チャールスはマイクとおしゃべり。わたくしはビルにつく。「手術したことがあるか」「ありますよ」「なん度」「二度」「わしはね、この3年間に5か所切って縫った。腹はジッパーだらけさ」。

14番グリーンはクラブハウスに近い。パッティングを済ませると、ビルは「サンキュー、バイ」と、一人ずつ三人と握手。

「退院直後はパッティングだけだったが、最近はラウンドできるようになった。10番から14番までが、ビルのロイヤル・バークデールさ」とマイクが。

自由なゴルフを微笑む、女神がいました。

コース外周が犬連れの散歩道になっているスコットランドでは、家に近いところから自由に入入りして、子や孫と夕飯前に数ホール、クラブ一本とパターで、という羨ましい風景をよく見かけました。

メンバーの年会費にちよつとプラスするだけでいいという決まりなのでした。自由なゴルフ環境を羨ましく思いました。

妻とわたくしはなるべくキャデイをつけませんでした。節約です。難しそうなコースではつけました。ほとんどのコースはメンバーがキャデイとしてつきました。そのフィを貯めておいて年会費に充てるのです。

日本でいちど千葉のコースで、男性メンバーのキャデイを経験しました。でも、これをやると、契約キャデイさんたちの仕事を奪うことになるから難しい、と。融通の効かなさったら、ありやしませんね。

>

昔、日本のいわゆる名門倶楽部には小冊子がありました。いまもあるかどうかは知りません。

英国の倶楽部のヤーデージ・ブックの真似です。ホール内のヤーデージ案内と、ページの下にマナーが書いてあるので、マナーブックとも呼んでいます。

日本最古の神戸ゴルフ倶楽部にはありませんでした。

お山の上の難コース。キャデイは近隣の大学生のアルバイトです。1人10本制限で専用の筒型キャディバッグに入れる。これを4人分を担いでつぎのティへ小走りに運ぶ。これが仕事でコース案内はしません。

同伴メンバーはいろいろ曲げるから別ルートになっちゃう、という難コース。

で、神戸もマナー・ブックを用意しようという話になり、2009年に、イラストレーターのご・嶋口信義*さんとわたくしのコンビに依頼がきました。

神戸にはとくべつ思いいれのあるわたくし。ピッカーッと閃きました。

最初の打ちあわせには当時の高畑宗一理事長をはじめ全理事勢ぞろい。こちらは手ぶらです。

わたくしが理事長に向けての説明役。嶋ちゃんがみんなの様子見役。理事さんたちの顔が緩んだり、頷いたりしたら嶋ちゃんが、それとなくコーヒーカップの縁をスプーンで一つならすこと。

えー、ご趣旨をお聞きして、こちらにかくべつ深い敬意の念を抱く者といったしまして、首を傾げました。神戸ゴルフ倶楽にエチケット・ブックがあるなんて、恥ずかしいことじゃないか、と。ゲストにマナー不足があつたとして、責任は招いた会員にあるのでして、あらかじめよく言いきかせておくのが会員の務めでしょう。ここはやっていいこと、恥ずかしいことは承知のうえの大人の遊び場。大人なら考えれば分かる。もしエチケットが分からなかったら聞けばいい。教えてもらって笑えばいい。

コーヒーカップが鳴りました。

そういう、神戸のプリンスホテルを創設者アーサー・グループさんに話してもらったかどうか。ヤーデージ・ブックに関しては、数字で分かっても、どうにもままならないのが神戸の面白さなのでして。

堪えられなくなつて、わたくしは顔をあげ、皆さんの満足げな表情を楽しみました。かくして神戸の冊子『グループからの伝言』*が生まれました。

この話はわたくしのフェースブック「ウイラブリックス」*に収めてあります。ところで、「大人なら考えればわかる」はわたくしの原点なんです。ゴルフをやる気になったとき、喜んでくれたて、教えてくれたのが河合仁四郎さん。

河合さんは、松下電器・宣伝事業部の制作課長から独立、いずみたくさんと話①の沢田さんとわたくしとでCF制作会社を設立しました。

風貌がヒッチコック似。ゴルフは大好きでしたがいつもダボペースで「除夜の鐘」と自称、108で上がれば上機嫌の人でした。

ホームコースに連れていってくれました。そこでいちいち叱られました。マナーを覚えたくてけんめいなわたくしは、「なぜいけないんですか」と聞き返すんですが、即、呆れたように返ってくるんです。

「考えたら、わかるでしょ」

考えてもわからない。いい歳して「考えたら」をいわれるのは悔しいです。考えがタラン、というわけで、恥ずかしい。その先を訊けなくなつてプレー続行。

帰りの車中でそれとなく訊いてもヒッチコック氏はダンマリ。家でノートに記して、考え続けたり人に聞いたりして…。

なるほど考えるとうかるようになるのでした。考える癖をつけると、ゴルフマナーなどは9割がたなぜそうなのかがわかるのでした。

打ち方はなんにも教えてくれませんでしたでしたが、名「師匠」でした。

>

ある日、開いていた聖書のページから胸にとまつた言葉がありました。新約聖書のパウロの手紙コリントIIです。

「わたしは弱いときにこそ強い」

「喜んで自分の弱さを誇りましょう」

逆説的なレトリックなので、教会の礼拝では「エッ!?」と聞く人たちの関心呼び起こして効果的です。で、啓示が凝縮されています。

「神さま、どうぞあなたの力をお恵みください」と祈りが生まれ、「キリストの力がわたしに宿りますように。大いに喜んで自分の弱さを誇ろう」と続く。

でもこれでは、話④でつづいたとおり教会の内向きの話し方でして、初めての人や、まだ聖書に馴れ親しんでいない人の、「エッ!」に応えたことになりません。

逆説的なんだから、ここは逆に読んでみたらどうでしょう。

「強いとき、こそ弱い」と。裸の王様です。「強い」と思うと、みつともない、見苦しい、醜さが顔に出ています。

ニンゲン、分からないことばかり、知らないことばかり。もともと弱い存在。なん十年生きた者でも、ふんぞりかえるほどのものじゃない。

なんでも知ってるような顔がいたら、こっちのほうが勝ち、強いんです。

分からない、知らない、気づかない。だから、分かりたいと思う、知りたいと思う、気づきたいと思う。そう思うことが、ホモ・サピエンスとしてのそれ相應の、あり方なのでしょう。

自称「除夜の鐘」、ゴルフの道師、河合さんにはそうした「空」ッポ意識があつて「考えたらわかるでしょ」とのたまわれたのです。

- *
701 『ゴルフ規則』（公財）日本ゴルフ協会
702 『ビーターたちのゴルフマナー』鈴木康之 ゴルフダイジェスト社
705 『痛快！ゴルフ学』鈴木康之・杉山通敬・藤岡三樹臣 集英社インターナショナル
706 金田武明 1931～2006年 ゴルフコース設計者協会2代会長 多くの執筆活動も
707 ビーターズクラブ 赤羽GCで産声、2000年古河GLで正式発足
710 嶋口信義 1942～2012年 オールドマンバー・カレンダー
710 『グリーンからの伝言』神戸ゴルフ倶楽部
710 フェースブック「ようこそウィラプリングスへ」

話⑧

シンプルがいい人へ

ラーバツハツハ！

素のゴルフ

米櫃も底をついてきたようだし。リンクス巡りはそろそろシメかなあ、と頭をめぐらせたのは、2004年でした。

これまでに、六度リンクスランド巡りをしていながら、まだボールを転がしていないコースが一つある。

幻の6ホール、アウフナフリーです。やつぱり第一目的は、そこです。伝説の師、ジョン・スタークに会いたい、そして、その地に立つて風を聞こう。

ついでに妻を案内したい、ドーナツにも、クルーベンデイにも、ベック夫妻の石の家にも、とあれこれ欲ばった、ルートを描きました。

名著『スコットランドへ』*が邦訳されて、わたくしたちゴルフ通が、垂涎のゴルフ旅にふれ、夢みて、啓発され、振りかえれば、そうかあ、ちょうど10年、はや10年になるのです。

米国メディアの記者・マイクル・バンバーガーが、休暇をとって欧州へ。前半は、欧州ツアーのプロに帯同するツアー。その後半で、リンクスランドの、伝説のプロを訪ねて、ゴルフ修行。

ところが、ついたプロというのが、一徹な米国人プレーヤーで、我流に頑ななピーター・テラバイネン。欧州はずれの小国、チェコ・オープンで、やつと一勝はしたものの、あとはまともに稼がない。ということは、キャディについても、懐が温まらないだろう。

もう一つ、ところが、なのです。このプロ、自称、渡り鳥。とつじよ、大阪・茨木に舞いおりたかと思うと、わが国最大のイベント、第61回日本オープンで、アレヨアレヨの優勝。前述の本で、にわかファンになっていた、わたくしたち、ピーター・テラバイネン・ファンを仰天させました。

そして、ピーターズ・クラブの誕生と、拙著『ピーターたちのゴルフマナー』上梓に至ったのです。

話⑨

マイクル・バンバーガーの旅、後半のハイライトが、ハイランドの奥地、アウフナフリーという6ホール、そこに棲んでいるといわれる伝説的な、ティーチング・プ

ロ、ジョン・スタークを訪ね、ゴルフ発祥の地の、遊びの奥義にみちびかれた、ドキュメンタリーです。

だけど、わたくしなどが、とりあつてもらえるのだろうか。

当時、ジョン・スタークへの、アポイントのアテはありました。アテにはならないけれど。

セントアンドリュースの、リンクス・ゴルフ社が、毎年ゴルフウィーク・イベントを組んでいて、春になると、プロモーション・メールが、なぜかわたくしのパソコンに舞い込んでいて、そのティーチング・プロ3人に、ジョン・スタークの名前がありました。

担当者、クリスティーヌ・シートン女史に、わたくしの旅程と、ジョン・スタークに会いたい旨を、メールしてみました。

親切な女史から、すぐに返信がありました。

ここからは紆余曲折、はしょって書きますと、彼は、わたくしの五つ歳上。40年間、クリーフ・ゴルフクラブに所属していたが退職して、フリーに。

電子機器も、携帯電話も持たない、超アナログ人種、かつ、Wanderer、風来坊。長く所属していた、クリーフGCに電話を、入れておけば、一週間後ぐらいに電話が来る、ひと月後になるかもしれないけれど、と。

「したがいまして、電話があつたとき、ミスター・スズキのご趣旨と日程をお伝えしてみます、あしからず」

⌘

わたくしの文章からして、英会話がペーラペラのように思われるかもしれませんが。ゼーゼンなんです。せいぜい中学卒業ていどであります。

ま、メールならなんとか、翻訳アプリで、用件は済ませられます。それでも文章全体は、ベリー・ヘンテコリン、なのでしょうけれど。

会話のほうは、いまなら、翻訳会話機があるけれど、わたくしが旅をしていたころ、あるのかどうか知りませんでした。

会話は度胸です。度胸と慣れです。東京で外国人に「ハロー、アー、ドッチ、イーキ、エキ、アー、トキヨイキ、ドコ、デースカ」なんて聞かれることがあります。このムチャクチャが嬉しいですね。

あちらがそうなら、こちらもおじけることなんか、あるものか。

渋谷でこう訊かれたら、嬉しくて該当するホームまで同行。笑顔のジャパニーズ

になっちゃいます。

もつともですね、あのワースト・デザインの渋谷ステーションの、インサイドをカンバセーションでなんて説明できるもんじゃない。歩いて案内したほうが、早いんですから。コツチ、コツチ、とジャパニーズ・スマイルで。

英米に滞在中なら、慣れ以上に、彼ら彼女らのウエルカムの表情に、甘えてけっこう舌が度胸よくなります。初日より二日目、三日目より四日目。日を追って、単語やフレーズが流れるように、とはいいいませんが、チェーンの壊れかかった自転車ぐらいには進みます。

ロンドン郊外の、チャールス・ソーントン夫妻のところには、なん度も泊まりました。ある晩、食後に近くのパブへ連れて行かれ、チャールスのポン友のブライアンたちと飲みました。連中とにかくよく喋る、よく笑う。

わたくしのムチャクチャ英語に、火が付きました。なにか笑ってもらえる話でお返しを、と。

当時の日本の総理大臣が米国の大統領と交わした会話を知ってるかと聞くと、みんな首を振る。ヨオーシツ。

総理大臣は、先方に会ったらなにはともあれ、「ハワ・ユー」で挨拶し、相手になにかいうから、「ミー・トウ」で返す、挨拶の定型を覚えていきました。

さて、大統領閣下の前に出て、あがつちやった総理大臣「ハワ・ユー」というところ緊張のあまり、「フリー・アー・ユー」といつてしまった。

ここで笑いが一つとれました。ヨシヨシです。大統領オドロイタ。が、相手に恥をかかせるお方ではない。「アイム・ヒラリーズ・ハズバンド」と、さすがの応対、ではありませんか。

これで二つ目の笑い。わが総理大臣、大統領が挨拶の定型どおり「アイム・ベリー・ファイン・サンキュー。アンジュー？」といったものと思ひ込み、覚えていったとおりいつちやった、「ミー・トウ」。

ブライアンたちの嬌声が、パブの天井にまで放たれました。

これは絶好のチャンスと、総理大臣とわたくしは同世代で、学校の英語教育はリーディングとグラマーだけで、カンバセーションはなかったのだ、と日本を代表して釈明したのでした。

⌘

わたくしと妻は成田を発ちました。

エジンバラから、北へあっちこっち。

北のドーノックGCでは、米国サウスカロライナ州から来たという屈強な青年、ポール・クルーガーと出会いました。

なんとこいつも、『スコットランドへ』を読んで来たというではありませんか。一念発起、当地にきて働いていて、いずれ伝説のプロについて修行するんだと。「グッドラック」と握手しました。

その後、インバネスの美女と結婚、三児の父。いまもたまーに、互いのフェースブックを覗きあつて「いいね！」する友だちです。

翌日は南下、スコッチの蔵の多い村、スペイサイドの、ボート・オブ・ガルテンGC。1番ティで第1打を打ったときでした。マスターが駆けてきて、呼び止められました。

「いま、ジョン・スタークから電話で、伝言です。きょうの17時に、クリーフGCで会おうとのこと。わかるね」

わかるとも！ わたくしのメールを開いて、けさならどこそでなん時にティオフと調べて、クリステイヌが電話をくれたわけです。

あたりにいた数名の耳に「ジョン・スターク」の名前が、はいつたのでしょうか。ざわつきました。2000年度、スコットランドでもっとも傑出した倶楽部所属のティーチング・プロとして、顕彰された人です。

わたくしは熱が出ました。もうダフるは、ヒツカケるは、コスるは。妻は「よかつたわね」と笑っています。

きのうのポール・クルーガーといい、この伝言電話といい、幸先のいいお膳立てができました。

興奮したまま、クリーフ目指して、A9ドライブは素晴らしいものでした。18世紀の武將ロブロイが俊馬で駆けめぐったハイランド山間の150キロ。

突然、クリーフ・ゴルフクラブの、小振りな看板が目まえに。そう、彼の地では、どこぞの国のように、道々に看板をデカデカとは立てないのです。

プロショップを覗くと、濃紺のセーターに黒いパンツ、巨軀のスコッツが、若者のスイングをチェックしていました。が、入り口のちっこい二人のジャパニーズを見るなり「カムイーン！」の野太い声と「ラーバツハツハ！」。

まず妻に、そしてわたくしに丁寧な挨拶をしてくれます。

狭い部屋へ、招き入れてくれました。マイクルも書いていた「雑然とものがあふれている、彼のオフィス」。スツールは二つ、わたくしと妻のぶんです。巨きな彼は立って屈む姿勢で。

スコツツはお喋りで人をもてなします。この人も紛れなくしゃべりっぱなしです。その中に二度も「far away」が聞きとれました。「遠路はるばるようこそ」です。ありがとうございます。

いったん部屋を出たと思ったら、すぐに戻ってきて「ついておいで」。
わたくしの手に一目でそれとわかるクラシック・クラブを。ヒッリー・シャフトで、ヘッドは小さなパーシモン、1915とある。彼が愛用してきたものでしょう。見せてくれたのだと思って、覚えてきた修辭語「スーパード」！というのと、「打つてみる」。エヘッ。「ヤスが打つんだ」とおっしゃるのですよ。

エントランスを出てすぐの1番ティに立たされました。布を巻いたグリップはコチコチでツルツル。手袋はない。足は革靴。手も足も滑りそうじゃないですか。

プロが下げてきたビニール袋から、ボールを1個ティアップしてくれましたが、見るからに、日焼けしたロストボール。イエイエ、文句はありません。

しつかりグリップ。1打目はヘッドアップして地を這いました。が、「グッ・フォー・ヘッドウインド!」、「向かい風用だ」と。ホメ上手なんですね。

2打目は少しありましたがフック。でも「マーベラス!」。3打目でも「マーベラス!」。アシスタントに同意を求め、大笑いがおまけのようにつくのです。

こんどはプロが振りました。「マーベラス!」のお返しです。するとプロはフィニッシュの姿勢のままで「写真を撮れ」とおっしゃる。焦って小型カメラを出す。

プロの意図が一瞬後にわかりました。わたくしのヘッドアップ気味への、レッスンなのでした。前傾姿勢を保って「キープ・アングル!」と、諭すように、アドバイスのひとことを、つけてくれました。

部屋に戻りました。『スコットランドへ』を取りし、「ジョン・スターク」の小見出しのあるページをひろげ、サインを。

ファイルに用意してきたアウフナフリー周辺の地図を出して「ここへ、わたくしが行くことは、できませんか」。

プロはきつい顔になって即答「ノー!」。「数年前からアメリカのメディアが、現地取材のオフアーをよこしたが、いつも「ノー!」だと答えてきた。

あそこは友人のプライベート・コースで、「特別の場合しか入らない、という約束になっているんだ」と。

「特別な場所なんだ」を繰り返してました。

だめなのならせめてもの土産にと思い、地図をそのままにしてボールペンを差し出し、この中に、どのように6ホールがあるのか、書いてくださいと、とおねだりしてみました。

プロの手が動かない。平面図となると描きにくいのだろうか。見上げるとマイクル・バンバーガーが書いていたように、哲学者の風貌がそこにあり、なにかを考えている時間が流れていました。

わたくしは、邪魔しないように、黙っていました。

急にプロはかがみ込み、手にしたボールペンで卓上の電話のボタンを押し始めた。そらで覚えている番号なんでしょう。先方が出たらしい。訛りの強い英語なのでほとんどわからない。しかし「ジャパニーズ・フレンド…」と聞こえました。

電話を切つてから、プロは、明日のエンジンバラの出発時刻を尋ねた。「16時40分です」と答えると、「オーケー、朝9時にニュートン橋のパーキングスペースに来なさい」というではありませんか。

それから、わたくしの目を凝視して、「いいかい、約束してほしい。君は日本のメディアにだれでもが行けるように書いてはいけない。君が書いたものを読んだ人がきても、わたくしは困る。断りつづける。君たちは、特別なケースなんだ」

そしてまた「君たちは、*far away*、はるばる」。

わたくしたちは、田舎道をニュートン橋へ下見に。場所と所要時間の確認。間違えたりしたら一生の不覚ですから。



翌朝15分早く着いたのに、ジョン・スターク的大型車はすでにありました。ラジオの音量を上げてクラシックの混声合唱。

プロはロストボールのビニール袋と5番アイアン1本を手にし、身をかがめて、わたくしの車の助手席へ。

着いた牧場のゲートに「私道アウフナフリーへ」の木札がありました。

アーモンド川沿いの道は、轍によつて中央が峰のようになっていて。トラクターのような車種しか通っていないことが瞭然。峰に片側のタイヤが乗るような、ルートを通るしかありません。

途中に作業小屋があり、道をふさぐ羊の群れが見えました。プロのお喋りの中に、なんだか「グッド・グリーンキーパー」。

その意味は、あとでわかりました。

つぎのゲートがの先に、赤いピンフラッグが見えました。

「君は5番ウッドと5番アイアンと、ピッチングウェッジを持ちなさい」と。パートナーは要らないと。意味はもとでわかりました。

妻には「あなたは、カメラマンでいいかね」と微笑んで。

ティマークは大きな石です。1番ティの脇には、その三、四倍もの石が置いてあり、親友だった羊飼いの、ジョン・ポロックが、川の水の多い日、溺れかけた羊を救おうとして、不慮の死を遂げた、と碑文が赤ペンキで。

プロは妻に説明していました。わたくしは本で読んでいました。

左右に小高いマウンド、というか丘というか。左右の間が150ヤードほどのフェアウェイがつづいているという見立て。あとは空間です。

昔よく行っていた秦野の山岳コースで、山間を眺めるのが好きでした。「大きな空気が見えたからです。アウフナフリーはまさしくそれ、「大きな空ツポ」。

前方に羊が群れています。躊躇していると「大丈夫だ」という。キープ・アングルに努めて、アウフナフリーでの記念すべき第1打。

ボールより「マーベラス！ ラーバツハツハ！」のほうが宙に飛びました。心から「サンキュー」を返しました。もうどつぷりとプロの心にはまりました。

2打目は、ピッチングでハーフショット。乗りました。さほど転がらず、旗に寄りました。「グリーンキーパーたちが、いい仕事をしているだろう」。なるほどそうなんです。

5番アイアンでタップ・イン。カップは本物でした。しかし雨水が溜まったままでした。プロが5番アイアンでボールをすくいあげて。

遠くから白い石ころに見えたものは、グリーンキーパーたちのウンコなのでした。ボールにくつつくと、プロが5番アイアンで器用に芝にこすりつけてとる。

2番ボールはフラットな100ヤードほど。日本ではテンプラというショット。それでも「マーベラス！ ラーバツハツハ！」です。芝の深いところに潜ったボールはヘッドをひらいてもぐらせ、すぐ近くのグリーンキーパーたちがよく食んだあたりへポンと。

プロの5番アイアンはステッキでもあり、キャディ必須の道具でもあるのです。あとのホールで、ベンチャラを思いつきました、「あなたはアイアン使いの名手として、有名だったんですね」。

ボギーですが「マーベラス！ ラーバツハツハ！」。

プロがわたくしと正対しました。「君が打つ。ボールが飛ぶ。ボールが転がる。」

カップに寄る。楽しいじゃないか。楽しくないかい」。

わたくしが大きく頷いたのを確かめて頷き、「これがゴルフだよ。スコットランドにこれ以外のゴルフはない」。

3番ホールを過ぎ、4番ホールへ。

前をゆくジョン・スタークの背中を、尊敬や憧憬やらが、熱く混じった日で見つめながらついて行きました。

我を忘れてたもうシンプルに、ただもう楽しんで、空になつて陶醉している自分がいました。

物書きの性癖、自分を客観視しようとしている観察者もいました。が、いまは邪魔なので、追い出しました。空っぽでした。

複雑なことを洗って洗って、これがなければゴルフじゃない、そこまで洗って、必要なもののだけの素のゴルフ。

このフィールドとあのターゲットと、このボールとこのクラブと、あとはひとつ、ラーバーハッハの心――。

5番ホールで、プロが、「急ごう、エンジンバラへ行くために」と、時計を見ました。打ち上げのホール。

その間にプロがポイントを五つ。一つは、インパクトで「Keep left knee straight」。二つめ、「Rotat as is そのまま回転」。三つめ、昨日の「Keep angle」。四つめ、「Listen your ball」。五つめ「Balance, Balance, Balance」。「ウーズナムはこんなふうに速い。カプルスはこんなふうにゆっくりだ、でも、バランスは同じさ」。

6番でホールアウト。トランクのバッグをととのえていると、プロはウンコのついた5番アイアンを「持って帰りなさい」。

Jack White, Gullane。シャフトは錆びて茶色くマダラに。

ニュートン橋に戻るとプロはかなり疲れた足どりで自車へ。

「ここからは、私の車についてきなさい」。エンジンバラへの道はきのう確認済みですが、べつな早道でした。

満ち足りすぎて、妻と二人、胸いっぱいでした。ひたすら前の車の人へ思いを飛ばしながら。

約40分も先導してくれました。グレンイーグルスへの高架橋で、先導車が停まりました。

降りて行くと左を指さして「ここから入りなさい」と。

わたくしは言葉が、どうにも出なくなっていました。潤んだ目でアイコンタクト。思いあまつて、濃紺の分厚い胸板に、両腕をまわしました。まるで女の子。

ジョン・スタークは妻にまた丁寧に挨拶。

前の車が出ない。右腕が窓から伸びて、先に行けのアクション。

とおり越すとき、妻が左の窓を開けて手を振った。

ハイウエイへ。「優しく笑っていたわ」。

はてさて、これでよかったのか。

レッスンは。と気になったけれど「特別な」というプロの言葉を金科玉条にして「よかったのだ」と、ひとり合点することにしました。

「マーベラス！ ラーバツハツハ！」が、エンジンバラを飛び立ったNH機の中でも耳から離れませんでした。ヒースローからの長い夜間飛行でも、帰ってきてもう20年以上経ついまでも、耳のなかで響いています。

ジョン・スタークがリンクスランドに生まれ育って、ゴルフから学んだ、素朴ながら、痛快なこと。マイクル・バンバーガーが、ジョン・スタークを訪ねて教えられたこと。リンクスゴルフから知ったこと。わたくしがジョン・スタークから、かけられた魔法…。

アウフナフリーは、アレがある、アレもある、という世界ではありませんでした。しかし、アレが見えました。アレを考えさせられました。空ツポの山間に、「Less is More」が確かにありました。

だから「ラーバツハツハ！」がこだましていたんです。



話⑧を書くにあたり、記憶の風化で間違いがないか、確認しようと思いました。マイクル・バンバーガーの本は2冊買ってあったのですが、1冊はピーターズクラブのパーティで景品にし、だいたいサイン入りのほうもさるところへ寄贈してしまいましたので、手もとにありません。

著者の旅の年月、邦訳諸般の年月、マイクル・バンバーガーの消息と、ジョン・スタークの天国昇天の年などを、Yahoo!で検索したら、ナントナントナント、どれも出てこないではありませんか。エヘーッ、ヘーッ。

小さなゴップ記事、だったのならともかく、ゴルフの情報、こんなに早く流れ去り、消し去られてしまうのか。

腹立たしいほど、寂しい。

書斎の棚は、すでに空なのです。

半世紀以上かけた、わたくしの書棚には、ゴルフ関連図書、写真集、絵本、ゴルフ倶楽部の年史・資料、雑誌・新聞のスクラップブック、国内外の地図などなど。

そしてハービー・ペニツク、ボビー・ジョーンズ、マイケル・マーフィーなど、わたくしが執筆原稿中によく引用し、わたくしの訳文とするために丸善で買い集めた原著も10数冊。

もしわたくしがオサラバしたとき、困るのは家族です。業者にトラックで積み出してもらおうゴミになります。

そこで、譲渡、寄贈、押し付けを、始めてきました。中身とご縁のあるゴルフ倶楽部、ご理解のあるゴルフ倶楽部、ゴルフ学校、ゴルフ学芸員、インテリ・ゴルフアー、ピーターズクラブの風流亭などへ、ダンボールに収めての搬出作業を重ねてきました。

運良くというか、皮肉にもというか、腰痛も進行してきていました。喜寿を過ぎた頃には、めでたく、あんがい未練もなく、「ゴルフ学校卒業」に、ほっと着地したのでした。

イヤー、ゴルフのおかげで、人一倍いやなん倍もの思いがけない思い出ができました。多くの人々と親しくなれましたし、各地のコースで遊べましたし、生き方、暮らし方、マナー、エチケット、ほんとのこと、自然、愛、自由、平和、多くのことを教えてもらえました。

感謝感謝です。ニユーン…。

*

801 『リンクスランドへ ゴルフの魂を探して』 マイクル・パンバーガー 管啓次郎訳 朝日出版社

話⑨

A Iと距離をおきたい人へ

ボオオオオと鳴り
オオオオと消える

夕闇のマンハッタンをぶらついていたら、ヴィブラフォンが聴こえてきました。もしやと思って、引きよせられていくと、ドア開けっぴろげのライブハウスで、ヤッパリネ、ライオネル・ハンプトンでした。入り口でビールを買い、手に持って入りました。

1964年のことです。東京オリンピックのさなか。広告クリエイティブのメッカ、マジソン街視察のための会社からの出張でした。

当時でも、いまでも1フレーズ聴けばそれがハンプトンのものか否か、聴きわけられるわたくしでした。

あれから、ステージで跳ねる御大を、マレットからくり出されるマジック・プレーを何百回聴いたことでしょうか。

LP盤『スターダスト』の1枚目は針の傷だらけになり、2枚目も危うかったけれど、CDになって助かりました。

なぜこんなに、ハンプトンが好きになったんでしょう。

♪

15年ほどさかのぼって、中学生時代。

銀座一丁目に、テアトル東京という映画館がありました。題名は『これがシネマらだ』だったはずです。そのIとそのIIがあつて、IIのほうだったと思います。

蒲田の映画館街で、美空ひばり、シミキン、阪妻なんかをよく観ていましたね。そういう映画に馴れていたわたくしにとって、シネラマ映画はいやもう、ドガーンでした。

シネマスコープのスクリーンを、さらにステージの左右いっぱいに加え、ダイナミックに彎曲させた超ワイド映像で、そのうえ、館内なん箇所かのスピーカーから、観衆の耳を八方責めする立体サウンド。

映像は、ニューオーリンズの街、伝統のジャズ葬でした。

町はずれの共同墓地のシーンから始まりました。デキシールランドバンドの演奏が

聴こえてくる。トロンボーンがうめき声のように、クラリネットが悲鳴のように泣きむせぶ。それはそれは哀れにふるえて。

やがて、林立する墓碑をかすめながら黒い葬列が見えてきます。深く掘られた穴のまえに到着する。

埋葬の儀式。うちひしがれる喪服たち。泣く女たち。

神父の祈りがすみ埋葬が終わり、一行は町へひきかえす。

悲しみに疲れきって、もう勘弁してくれよ、と吐息はふかく、いまにもそこに、崩れてしまいそうな重い足どり。

ジャズ葬ではこのあたりまでを、ファースト・ラインと呼びます。

バンドの合奏はゆるりゆるり。

するとどうでしょう、カメラが目を覚ましたようです。葬列の男たちの長い脚の運びの、微妙な変化を、女たちのでっぴりと重たそうな腰の、揺れに微かにあらわれる変化を、アップで捉えます。

そして、なにかを告げるようにドラムロールが始まる。

カーン、カン、カンカンカンカンと、スネアドラムのエッジが叩かれ、合奏はいつきにアップテンポのナンバーへ。

ここからが、セカンド・ラインです。

手拍子打ち、靴を踏みならし、キュツと突きでた男たちの尻が突きあがり、長い腕がふられ、女たちの大きな尻がゆさつゆさつゆさつと揺れます。

スクリーンに、字幕があらわれます。

アフリカから、奴隸として、海を渡って来た。

さんざん、辛さを味わった。

もうこれ以上は、いらぬ。悲しいこと、はいらぬ。

聖者と一緒に、街に帰って、みんなで踊ろうぜ。

——これがジャズなんだ。

このストーリーが、有名な黒人葬送曲で、

“When the Saints Go Marching In”

『聖者が街にやってくる』

なのです。“Marching In”の『街に』の、語呂あわせはジャズ史上の「名訳」といわ

れていて。

この曲は、ジャズコンサートのエンディングで、ホール中が立ちあがり、手拍子で体を揺すって、陽気にスイングするスタンダードナンバー。

なんですが、ほんとうはただ浮かれるだけのジャズ楽曲ではないんです。悲しみを乗りこえて忍耐し、忘れたいことは忘れて、歌いたいだけ歌い、踊りたいだけ踊りまわろうぜ、という舞曲。

セカンド・ライン・パレードでの演奏の明るさには、魂が解放されて天国への旅だちを祝福する、そういう意味がこめられているのです。

ジャズは、黒人たちがアフリカ大陸から背負ってきた、「宿命」という重たい荷物なんですね。

♪

中学校は東京・鵜の木、多摩川べりにあった私立東京中学校。すごい校名でしよ、いまは、高等部だった東京高等学校だけが残っています。

創立は明治初期。上野清という数学者の塾が始まりです。四角形を二つ45度かたむけて重ねた校章で、どんどん重ねていくと円形になるぞ、そういう、幾何数学の教えでした。

住まいは隣り駅の下丸子。キャノン本社の壁ぞいの一本道をテクテクテク往復する毎日でした。

下丸子に多摩川のがス橋がありました。いま、新幹線が通っているところです。ガス橋を渡って川崎側の土手をのぼっていくと新丸子。

その町に小野病院があり、2年生時、その息子が同級生でした。

「蓄音機を、聴きに来ないか」と誘われて行きました。

お父さんのものでした。ゼンマイを手でまわす、まだ竹針の時代でした。

なにやら、分からない名前の、円盤をかけてくれました。

シーシーシーパチ、シーシーシーパチ…。

こすれ音にまじって、ハスキーな女性歌手が歌いだしました。さまざまな楽器の伴奏が聴こえました。

「男なんだよ」と小野君がいったので、驚きました。

そして円盤のラベルを読んできました。

「ライオネル・ハンプトン オン・ザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート、
明るい表通りで」

ガーンと、麻薬注射をうたれたかのように、うったことはありませんが、頭のなかにせつかく詰めこんだ「ゼイ、ゼア、ゼム」やら「聖徳太子ゴ・ナ・ヨン」やらの、無駄が消えうせて、ポツカーンと、空洞ができた感じ。

急性放心症状に雇ったわたくしを、お医者の子息は察したらしく、円盤をもう一度まわしてくれました。

家に帰ってから症状はなおりません。真空管ラジオをつけても、そう簡単にハンプトンが聴こえてくるわけもなく。待ちぼうけの日々。

半年ぐらいして、NHKの「夕べの音楽」や「ダンスアルバム」を聴いていて、やっと『サニー・サイド』が流れてきたときは、地球の反対側からの電波に耳かたむけているような、緊張と興奮でした。

わたくしが生まれた年1937年のビクター録音。各パートに名手をそろえた、シックステットの息のあう名盤でした。

やがて、パサディナ・ホールでの、あの歴史的な名盤『スターダスト』に出会います。のちのちいろいろ聴きましたが、最初の出会いがほかのジャズであったとしたら、ハンプトン病のこんな長患いには、ならなかっただろうことが分かりました。

月刊誌「スイングジャーナル」を購読、翌月号が出るまでなん度もなん度も、ページをなめつくし、国内外のプレーヤーの名前を片っぱしから覚える。ハンプトンの記事も名前も出ていない月は昼のうえに放り出す。

こんな日々でしたからね、学校の予習・復習の時間は、なかったと思います。

家にステレオが入り、名盤『スターダスト』を手に入れました。

“Star Dust” Lionel Hampton All Stars,

1947 at the Civic Auditorium, Pasadena, California

“Just Jazz” Concert, Gene Norman Presents

1947年夏の公演です。ゆるいテンポでヴァイブから始まり、そうそうたる名手たちのアドリブが星くずの舞いを競いあう。

テナーのコーキー・コーラン、

ペットのチャーリー・シェーバース、

アルトのウィリー・スミス、

アンサンブルを挟んで、ピアノのトミー・トッド、

ギターのバニー・ケッセル、

そして5分におよぶ御大のヴァイブ、バックにアンサンブルが加わり、エンディングまでなんと15分30秒。

ファンのノリだと思うんですが、ハンプトンのソロがバックとともにどんどんハイになっていく時間、どういうわけかわたくしの頭のなかで、『G線上のアリア』の旋律が、別な夜空からの響きのようにダブって流れてきたんですね。重奏になって、これがなんとマリアーージュ！

音楽って、自在、深い、尽きないんですね。

尽きる尽きないといえば、当時、ハンプトンは燃え尽きて、このあと帰ってしまった、だからレコードには、後の曲がない、と記したライナーノーツがありました。べつに、当日ダブルブッキングしていたからだ、という説のもありました。どっちもハテナです。

歴史的な名演ゆえの、尾緒だったのでしょうか。

2000年ごろのある日曜日、NHKFMが、終日ジャズのリクエスト特集という、粋で大胆な計らいをしたことがありました。

朝から晩まで歴史的な名盤が、つぎからつぎへ再現されました。夜も更けてその日のリクエストのベストテンが発表されました。

その第1位がこの名盤中の名盤でした。アナウンスを聴いてわたくしは思わず、オヒョーッ！。

時間が空いていればこれを聴きました。友人のオフィスを仕事で訪ねるときも、これを提げていつて聴かせました。聴かせたる、じゃなくてわたくしが仕事中也聴きたかったからです。

あれやこれやで10数年間に、なん回聴いたことになるか。いちど数えてみたことがあります。1年間のおよその回数に年数を掛けてみたら、300回を超えました。狂の字をつけて呼ばれたら名誉なことです。

よく「最後の晚餐」なんていうタイトルで、人生最後に食いたいご馳走を披露する企画がありますよね。

「最後の一曲」といったタイトルのシリーズがあるとしたら、わたくしは迷うことなくハンプトンの『スターダスト』です。これを聴きながらなら、安らかな顔をして成仏できますね。

先日テレビで「いまでにいちばん数多く聴いたレコードのベスト5は？」とたずねられた出演者のタモリが、第1位にハンプトンの『スターダスト』をあげていま

したね、ソーダロ、ソーダロ。

ハンプトンは5回来日公演しています。もちろんすべていきました。

81年、新宿の厚生年金ホールでは日本人マルタを、コンサート・マスターに抜擢したフルバンドでした。

その翌年が最後の日本公演で、御大は74歳。

カルテットで青山ブルーノートに来ました。妻とわたくしのテーブルはラッキーにも、ステージに向かって左角の最前列でした。左角の奥が楽屋です。

アンコールのラストは定番の“Hamp's Boogie”。

終わってもバックの4人はブギをやめない。客も総立ちで、手拍子をやめない。

御大は、顔を汗でテカらせ、ステップを続けたままステージを前おりて、奥の楽屋へのコースをとり掛かりました。

つまりわたくしのテーブルの前に来た。目があった。1メートル足らずの顔と顔。ボクは目いっぱい笑い、手を打ち鳴らしました。そのときを再現してみると、およそ30秒間。それはそれは長い時間でした。

観た、聴いたというより、「会った」という実感。

わたくしの生涯中のライオネル・ハンプトン・ストーリーは、下丸子の竹針で聴いた女のような歌声ではじまり、マンハッタンの汗が飛び散るステージ下に引き寄せられ、青山ブルーノートの夜のハグすればできる、至近で幕となりました。

ハンプトンの水準の音楽を聴けば、AIには真似すらできない「音」があることは、だれの耳にも明らかです。

♪

本稿執筆途中、この話⑨のタイトルは、

音楽はすべて美しい

そしてすべて哀しい

としていました。ストレートで空っぽくなく、不満でした。

ある早朝の床の中で、ごらんいただいたとおりの、音ものらしい字ヅラが浮かんできました。起きてパソコンを開きました。

⑨話
遠くから聴こえる大型汽船の出港時の汽笛音。船会社のはなしでは「ボオオオ」は「ごうきげくんよ」の意味なんだそうです。

タイトルは直しましたが、はなしの旨は同じです。わたくしには「音楽は、すべて美しく、哀しく」そう聴こえるんです。

哀悼歌だとか港町の演歌だとかが哀しく侘しく聴こえるのは、ま、あたりまえでしょう。わたくしの耳には軍歌も哀しい。そういうものでしょう。出征からずっと軍隊生活はしんそこツライでしょう。

『君が代』にも、わたくしは鼻がグスツときます。

追分やおけさなどはもちろんです。民謡にはその土地土地の歴史、民族風習の哀惜が通底しています。

校歌や応援歌は大声で歌う、そのこと自体が私にはせつないです。はるか山のむこうと響きあおうとしている、青春の一途さのようなものが聴こえるからです。

出会いの歌『愛の讃歌』とか『嫁に來ないか』でさえ、切々とした思いが底に聴こえます。別れの歌は『ショパンの別れの曲』、『長崎は今日も雨だった』とか、わたくしの例は、どれもフルーイ！と野次られそうですけど、当然、哀しい。

『G線上のアリア』が哀しいのはいわずもなな。

わたくしがもはや、なにかにつけ涙もろくなる年寄りだからではないんです。

聴力の衰えでも、ないんです。わたくしからすると、耳と頭が健常ならこそ、音楽はすべて哀しく聴こえるはずなんです。なんですか。

地球上ありとあらゆる民族の音楽を、そしてはるかいにしえからの音楽をすべて、聴いたわけではありません。

だから、わたくしが生涯で聴いたすべての音楽は、と正しましょう。それにしてもです――。

出会いの歌と別れの歌とどっちが多いか、さるカラオケ通に投げかけてみたところ、別れの歌のほうが多いだろう、との回答でした。

野暮な質問でした。じつさいの人生のなかでは、出会いの喜びは嬉しくて、惜別の悲しみはできることならパスしたいですね。なのに歌では別れの歌のほうが好き。ナンデカ。チコちゃんも、わたくしも、知っています。

歌は他人事なんです。他人事だと幸せ事よりつらいことのほうに、興味があるんです。人間心底では意地がわるい。もめごと大好き。シェイクスピアの大古典から韓流ドラマ人気、その好例。

もう一つ、わたくしの空感的推察からすると、そもそも出会いの歌ははなから別れの歌を孕んでいるとみるのが、時系列的にも、ものの順じゃないでしょうか。

出合いはスタート台の上なんでした。いずれは下り坂、そこから先は大波小波、多事多難、離別に至る酷の細道。

逆に、別れのほうはというといつときの傷心をこらえれば、あとは自由、いい日旅立ち、新たな出会いと、こっちのほうがイッヒッヒのボーナスが支給されるかも、そんな欲まで湧いてくる。

歌は歌うにしても聴くにしても、感情の文感です。感情上の仮想の娯楽、別れの歌を好む人が多いのは、当然でありまして、フニフニ。

悲しい音楽を聴くと快い感情をおぼえる、という研究さえあるんです。

わたくしの私見、空見ではありません、ので信じてください。かの理化学研究所と、東京藝術大学の、共同研究*です。

悲しい音楽や悲劇は、鑑賞者に悲しみをもたらすという、既成観念があります。それに対して、ホントハドーナノサ、の実験調査でした。

悲しい音楽とされる、既存曲の一部を抜粋して、短調のままに構成した、30秒程度に編集したものを、実験参加者、男女44人に聴かせました。

「悲しい」「愛おしい」など、62種類の、感情を表す用語一覧から、該当する用語を、選択してもらったところ、なんと、「悲しい」を感じた人はいなくて、ロマンチックな情緒の、「愛おしい」など「快」の感情を感じる人が、多かった。

「悲しさを、テーマにしてつくられた音楽が、ロマンチックという感情をもたらす」という結果が出ました。

「代理感情」という、新しい概念が、見つかったのだそうです。

その代理感情のせいでしょうか、美しい音楽の、受けとられ方は、とてもさまざまなんです。眠りへ誘うつもり作曲なのに、人によつては、どこか、いつかの、体験のせいで、スリラーっぽい感じで、受けとられたりするんです。

世代によつても、違うでしょう。ネットで、若い世代の、「悲しい曲」のベストテンを聴いてみましたが、「爺線上のアリア」の耳には、どれもこれもただけなくて、ほとんどが、やかましい歌唱に聴こえるのでした。

毎日曜朝、楽しませてもらっている、今野真二さんの『日本語日記』*で、先日は「音像」なる言葉を教えてもらいました。

音を聴いて、音源の位置、大きさ、形などを感覚的にとらえることができる、それを「音像」というのだそうです。さらに「音像」は技術によって捉えられる一方で、聴いた人の想像力によっても作りだすことができるのかもしれない、と今野さんは推察しています。

わたくしにとつて、タイミングのいい、願ってもない有効なサジェスションになりました。

音はすべて美しく、すべて哀しく聴こえるという私見は、ふつうの正常な人々には、大いなる偏見と思われることでしょう。

「音像」の説明になぞらえて、書きますと音は音源の位置、大きさ、形などを、感情的にも捉えることができ、聴いた人の情感によつて作りだせるものだ、ということができると思えます。

これを「音情」と呼びたいと思います。この造語を使っている人はまだいないようです。登録しちゃいたいです。

今野先生、ドーでしょうか。

音楽の起源には諸説ありますが、その中でわたくしの好きなのは、自然界の音の模写説*です。

音楽制作の、最初のモチベーションとなったのは、鳥の鳴き声、小川のせせらぎ音、雷の音などの、模写であつたらしいという説です。

洞窟の壁面にのこる、絵画の起源は、動物などの生態や、人間とのかかわりの記録でした。しかも、わたくしたちが見てきたものは、絵画的な記録でした。せせらぎの音とか、雷の轟音とかを、絵にすることは、図示、図式や、漫画なら表現でき、伝達できたかもしれない、と思えるのですが、古代にそのたぐいの技法は、なかったのでしょうか。

音なら、音楽でなら、上手い下手は別として、表現できたでしょう。

音の発生源は、個体、気体、液体なんですね。

音は、音波の姿をとります。音波は、固体、気体、液体の中を伝わります。

ただし、この波は、真空中では、伝わらないのだそうです。

そして、この波が人の耳にある、鼓膜を振動させ、その振動によつて発生した信号を、脳が「音」とであると感知する。同時にその音の質を、本能的に、経験的に、

なんの音か、どんな音か、わからない音、などに聴きわけて、知覚するのだそうですよ。

音は時空のもの、ということが出来ます。なにかとなにかの、出あいによつて発生する「波」が、広がっていく、時間と空間あつてこそものなんですね。たとえ鳴るのが、「チーン」でも、「チン」でも、瞬間の「チツ」であつても、瞬間という時間をなしていて、「音像」によつて知られる、空間があるんでしょうね。

聴力検査、を思い出してください。「聴こえます」から始めて、聴こえなくなるまでのアレです。「えー、聴こ、え、ません」のアレ。
で、わたくしは安っぽい詩人になつたりして。

音は生きもの。

鳴るから美しい。

美しいけれど、

消えてゆくもの。

咲く花、光る月、と、音は、同じ生きものなんですね。

すみません、これ、わたくしでも知っている、本居宣長の「もののあわれ」です。

思わず「ああ」と漏れる感動が、生まれるんですが、それは刻一刻消える時へ向かつて、移ろつてゆく。いつまでも愛でていることは、かなわぬ願い。同じ生きものであるから、人間はそれを感じ、「ああ」という声が、「あは」と吐息になる。せつないですね。

譜面の最終小節にある、終わりの1音、このオタマジャクシを、イメージしてください。曲の終わりを告げるために、出番を待っているだいじな1匹です。

ピアノストが、消音ペダルを、踏んでいようがいまいが、時空に抗つて長らえようとうします。

聴こうとする者の、耳には、別れを惜しんで、いつまでも消えてほしくないと願う音。その気持ちかわかるから、深いのでしょうか。

おっと、美しい音があります。警報音や非常音です。彼らは、喧しく鳴つて、気になる音でなければならぬ。好かれなくて可哀想だけれど、鳴つて、じゃましなければなりません。そういう使命の音なのです

サグラダ・ファミリア、スペイン・バルセロナの街に聳える、カトリック教会です。建築家、アントニ・ガウディの未完成作品が、いよいよ建築工程の終章にある、と、ニュースが届きましたね。

ついに、イエス・キリストの塔の頂部に、高さ17メートルの、白い十字架が設置された。これで最終的な高さ172・5メートルに到達し、名実ともに、世界一高い教会になりました。

イエス・キリスト、聖母マリア、養父ヨセフに、捧げる教会として、1882年着工しました。明確な設計図を、残さぬまま、ガウディ没し、100年目です。

あとは聖堂につながる、巨大階段の完成予定が、2030年代になる見込みだそうです。

この先、再びコロナ禍のような災難、あるいは、聖家族贖罪教会ゆえの、資金調達が、信者からの喜捨しだいにあるため、資金不足の至難、などなど、あつてはほしくないけれど、ときの流れは見通せません。

あとなん年かを残すだけです。そこに至る日まで、ほんのわずか。生命誌においてみたら、ほんのちよつとの間です。

未完作品としての世界遺跡から、完成作品としての世界遺跡へ。新しい時代の、鐘の第1音をわたくしは、聴けるだろうか。

ガウディは、大聖堂全体を、一つの楽器に見立てて、デザインしており、鐘楼には、消音装置を、さまざまに組み合わせているとか。楽しみです。

ガオガアオンゴアグアングアグアオン
ガアングア
ン

*

908 『共同研究』2013年5月24日プレスリリース (独法) 理化学研究所国立大学東京藝術大学

908 『日本語日記』今野真一 日本経済新聞2026年3月1日

909 『音楽の起源』音楽はどこから始まった? 人類と音の歴史』@RAIN

ベッドにもぐって

登山成功

高校から、早稲田までの7年間は、ナンモナイ、ショモナイ日々でした。

早稲田に進んでからも同じ。勉強しない、青春らしいことをなんにもしないで、ただダラダラダラ過ごしました。

早稲田の初日、仏文専修の教室で、隣りあわせたマツモトという演劇青年の落ちこぼれが、「新宿いらないか、火の車へ行きたいんだ」と、誘ってきました。

それは詩人・草野心平さんが開いた居酒屋でした。

間口一間か一間半の店が、口を揃えていたたので、だれが名付けたのか、ハモニカ横丁。コワイ筋の旧和田組とやらが、とりしきっていた区画にありました。

マツモトについていくと、「火の車」と大書した赤提灯があつて。

おずおずと、入ったはいいけれど、オーダーがままならない。「ビール」とは言えたのですが「オデンは？」と返されてそれに返せない。鍋を見つめても、ウウーシと口籠るだけ。

心平さんの奥さん、だったはずのママさん、口のキツイ人でした。とり皿に茹で卵を一個ずつのせて「あんたたち、これ食べて、小茶へお行き、うちは高いから」とあしらわれて。

ひとすじ隣りのハモニカに、「小茶」はありました。話をしたらこつちのママは笑ってとりあってくれました。お通しは、茹で豆3個。オデンはないから、気がラクでした。

このママは、往年の大手出版社・春陽堂の専務夫人だとか。姓は栗田さんとかおいおい知りました。

常連客は編集者かその連れで。作家の小沼丹さんが、早稲田の英文科教授時代から、芥川賞作家になつてからも、見えていました。

鍵型に三人と四人がかける席でした。たまに目を合わせることはあつても、交わす言葉は「ども」「はい」ぐらいなもの。ママのとりなしで、早稲田の仏文ということは覚えてもらえました。

学費と飲み代かせぎに代々木の文化服装学院で、分厚い月刊誌「装苑」を、全国の教室に、20冊30冊と油紙にくるんで荷をつくり、発送するアルバイトにありついて

いました。毎月末に四日四晩泊まり込み。

紙の山に挟まっていると冬でも温かいんです。人を増やすと分け前が減るから三人で頑張り通す。チンタラの普通のアルバイト一ヶ月分を、四日で稼げました。

終わると早速に「小茶」へむかう。夏どきは開店前からいきました。

ちよつと忘れられない経験が、二、三度。

ママが着物の肩口に孫の手を差し込んでいる。「ママ、掻いてあげよか」。いま思えば、私にはめずらしくアリスだったんでしょうか。

手を滑り込ませて掻いてあげましたっけ。「泉田さん、ありがとう」。

泉田とはわたくしのペンネームでした。これで通せるところでは、通していました。まだなんにも書いていないのに、ナーマイギ。

わたくしにとっては「おかあさん」と呼んでもいいような感じでしたけれども、いま計算してみると推定四十歳代。いまでいったら、れっきとした若い熟女。

汗ばみ気味の背中に素手をすべりこませていたわけですよ。まあ、ポツチャリ熟女と大学生、穏やかなことではなくて、わたくしがひとえに奥手であつて、生涯最初の見逃し空振りだったのかも。

あるとき「向かいのママがさ、泉田さんのこと、若いツバメかっていつてたわよ」と。ツヤつぽく笑っていたことがありましたっけ。人の目には、そう見えて不思議じゃなかったんでしょうね。

「泉田康生」は、高校時代から、使っていたペンネームです。

石原慎太郎、大江健三郎とほぼ同世代とくくれる、若い作家たちのデビューがいくつかだったので、ヒョットシタラオレモ、の熱病に罹りやすかつたんです。

早稲田の仏文教室の4、5人が中心になって、同人雑誌を作ろうと。名前はだれかが、『早稲田作家』がいいと野心的でした。

当時、大学公認の文学クラブには『第三次早稲田文学』があり、学生会館内の部屋と活動予算を与えられていました。

アイツらは「官」、おれたちは「民」なんて。

『早稲田作家』は、石川達三さんたちが使っていた誌名だと聞いたので、新宿の、早稲田派の溜まり場の飲み屋へ出向き、正座して、カクカクシカジカと挨拶し、使用を許諾してもらいました。

二階の座敷には二十人ほどが集っていました。あちらのほうにベレー帽の井伏鱒二さん。いま、歳読みしてみたら、井伏さんが58歳、石川さんが49歳。もつとずーっと年寄りに見えた。いまのその歳の顔と比べると、風格がゼーンゼン。

雑誌の印刷は、甲府刑務所の更生施設でした。どこから聞いたんでしょう。用

紙代ぐらいの費用でまかなえました。郵送と汽車とで用件を済ませて。

誌名はメジャーっぽいし、百数十ページの厚みがあり、周辺の喫茶店や蕎麦屋だけでなく、出版社の広告も載せましたから、けっこう文学誌らしくなってる。

毎号、大隈銅像わきの大きな柵の下に机を出して売りました。けっこう売れました。それに新入会員の入会金が集まり、編集会議や合評会の場所代に使っても、お釣りがくるほどでした。

合評会も大人数で。泉田康生の創作は2作。モーヘッタクツソ。

5号まで出して卒業となり、一学年下の連中に譲りましたが、続きませんでした。連中には気概がなかったもの。

△

就活ははかどらず。文学という個人作業から、広告づくりという集団創造へ。

あれよあれよと流されて、アリスになったわけです。

その流転に、ズドンと、終止符を打ってくれたのは、60年安保闘争デモという眼の前の現実でした。

桑沢の教師たち、生徒たちが属する美術家グループは、高齢者や女性が多くて。わたくしは大学でデモ行進の経験があったから、右翼の街宣車がいたら、列の先頭へ最後尾へと走って、その旨の警戒を知らせる伝令係。

60年6月某夜、ジクザクジクザクと、デモっているうちに体力のない美術家グループは、人波のなかで列を保てず、チリヂリバラバラ、霧散状態。

国会正門前でデモ隊と機動隊が狂ったようにクラッシュ。時計の針が零時をさし、法案は通過。

不条理への怒り、強者デモ隊への憎しみ、いかんともし難い敗北感、あたかも男の射精後の虚しさ。

そんなんが渦巻くなか、女子学生が圧死したと情報が飛んできました。

東大の樺美智子*さんです。わたくしと同じ年。わたくしが紛れこんでしまつていた渦の、十メートル先での出来事。機動隊に踏み殺された、との声も飛んできて。いつそう騒然となりました。

指揮系統などなく、デモ隊は右往左往、逃げまどうだけ。わたくしもただもうオロオロ。よろけながら、渦からはじかれように飛ばされて。

永田町から霞ヶ関へ、といつても、銀座線以外の地下鉄はまだない時代です。トボトボと新橋駅へ歩きました。

見上げれば、上空がわずかに白じんできていました。

忘れもしません、この夜明けはわたくしの夜明けでした。

なんにもしなかった高校、大学の7年間は、通り過ぎただけの7年間。

自分の「空ッポ」に、遅ればせながら思いいたった夜明けでした。

とらえどころのない虚しさから、這いだしたかったのです。高度経済成長の波のなか、ただただ溺れ犬のように、バチャバチャ泳ぐだけでした。

NDCという華やかな現場に滑りこんで、夕方、ボスの替わりで新聞製版所に向いて出張校正。その途中に用意される、出前の鰻重を頬張り、校了が九時前。

製版所の社員がバイクにまたがって、鉛盤をかついで新聞社へ飛ぶ。そんな現場感に「オツカレサマデシタァ」の、業界挨拶だけはイッチョまえに。なにやら達成感を覚えて帰宅。

寝ている間、新聞社では輪転機が高速回転。

ボスのチームが作った新聞広告が刷り上がって、8百万部とも1千万部とも、そういう大新聞に載って、翌朝、家の新聞受けに届く。

慎太郎、健三郎ら人気作家の書いたものが載つかる文芸誌は、せいぜい10万部。

マスコミのダイナミックなメカニズムの、歯車として関わっている、そういう実感はまだ喜びなどというものではなく、ただただウロチョロ、キョロキョロ。

勘違いしそうな、麻薬のような、怖さでもありました。

△

いま、やっと、「空ッポ」という、なんの執着も、未練も、気負いもない、心の居住まいに至って。

計りしれない量の恥ずかしい知ったかぶりをした、半世紀をハンセイしきり。

でも、威張らなかつた。人を怒らなかつた。それは、横柄な金持ちや、醜い権力者を、けっこうたくさん見せてもらったおかげです。

生来の小心、気弱。パウロにいわれるまでもない弱者意識も幸いました。

そしていま、この期の大命題らしいので「自分は孤独か否か」を鏡に向かって問うてみなければならぬ運びです。

話④の「神はいるか否か」と同じです。

そりゃ、哲学的には、人間は孤独以外ではあり得ません。

しかし、心情的には、わたくしは孤独ではありません。だいいな妻がいます。だいいな娘もいます。「だいいな」は、あの山浦玄嗣さんのセケン語です。だいいな

友人がいつばいます。

△

登山の事故の多くは下山時に起こる、といわれていいいます。頂上を極め、やつたあとという心の緩みなんだそうです。武道家、キャンベル・ベネットさんは「残心がない」と戒めます。残心は「技を終えたあとも、心と体の緊張をたもって、油断せずに尽くす心」のことを指します。

では、いつをもつて「登山終了」とするか。登山隊の解散式でないんです。

わが家に戻って、いつもどおりに夕餉のスープで温まり、愛する家族におやすみの抱擁をし、ベッドにもぐって、フウツ、と息を吐いて、而して、このたびの登山は成功なのです。

このストーリーが好きで、わたくしは短い成句にしてみました。

一二三三二一

いわずもがなですが、三三が人生の頂点です。

いまが頂点かな、そろそろ頂点かな。その判断を間違えそうです。取りまく環境での動きも予測もあるでしょうし。退職金や企業年金など、お金の計算も頭の使いどころでしょう。

医学の目覚ましい進歩で長寿命時代。生きる日が長いから、頂点年月も長い。ですから、「いまが三」の判断は間違えやすいのです。早まる人は少なくて、遅れる人が多いのではないかなと思います。

で、「いまが三」の自覚は早いほどよしとしますか。

この造語を傘寿記念のカードにして配ろうと思い、デザインを友だちの副田高行さんに頼みました。同じく仲良しの書体設計家、片岡朗さん兄弟の、いわれある書体を選び、横組にして六つの文字を、それぞれを下ぞろえに並べました。さすがに見事。なだらかな山を描いたではありませんか。

クライアントの広告代理店、広告主企業、出版社のなかの、出世コースの役職者には、寂しい「三三」になった方も少なくありませんでした。

退職を機にそれまで賑々しく集まっていた面々が、夜中の団地の灯りのように一つ消え二つ消えしていき、ヨイショしていたすり寄り族も遠巻きになり。

四文字目の三に届いても、仲良く集っている人も少なくありません。リタイア後は、仕事ではなく人柄でつながる末永い関係。人間、つまるところ、人ですね。かくもうすわたくしは、弱小企業にして素人同然の経営、好況時の銀行の口ぐるまのせられた借入れ金返済があつて、なんとか後輩に譲つたのが70歳すぎ。十年遅れました。もつとも60歳前後の十年間は、憑かれたように海外ゴルフコース巡りをしていましたから、ドッコイドッコイでしたか。



ジャーナリズムでは、よく「老壮青」と書きます。長寿社会のこんにちでは、頭に「寿」の字を載せたりするほうが、実際的ではないかなと思います。

江戸を舞台にした、現代の小説を読むと、

「五十を過ぎた老婆」

「四十前後の老女」

なんて表現に出会わします。ひっかかりますね。いまどきは五十過ぎのご婦人でも、とても若見えしますし、とつてもお美しいではありませんか。

江戸や大坂など、大都市の町人世界にかぎると、流入人口が、男性中心だったため、男女比は、「男が女の1.5〜2倍」という、極端な男性過多だったそうです。

小説家の表現とはいえ、当時のアラフォー、アラフィを、もつと愛でる目で書いてくれても、いいんじゃないでしょうか。

新聞の死亡記事欄を毎日見ます。「誤嚥のため」をときおり見かけます。わたくしにはこのケがあるので油断なりません。

長寿時代、だといわれるわりには、わたくしよりひとまわり以上若い人が先に逝かれます。「老衰」という、むごい死因の方もいます。長生きするなら元気で。

老衰、わたくしの悪いクセで、漏水とも読んだりして。水が一滴ずつ漏れるように、生命の営為がひとしずつ漏れていくのですね。

かかりつけのクリニックの、医師は二代目でして、お父上は、最近までご存命だったのですが、しかし、いわゆる寝たきりで、自然死状態だったといえます。

社交辞令で、「それはそれは」と呟くと、笑って、「骨皮筋右衛門でした」と。想像して、ゾグッ、としました。



わたくしはウシ年。毎日、牛のように反芻を楽しんでいます。

長生きのおかげで古い記憶からアレコレ、思い出しては、食みなおします。

いろんなことがありました。いろんなドジを踏みました。チョンボもありました。月々金を五千円で過ごすため、昼食は四、五百円にし、残りを呑み会用にまわす耐乏時期も何年か過ぎました。でも、過ぎせたからラッキー。

あれでオジャンに、なっていたかともいうことも何度か。完璧にオジャンならいいけれど、半オジャンだったら、いまタイヘンで。ほんとに、ヨカッタ。

長くキヤノンの会長兼社長の椅子におられた御手洗富士男さんが、90歳にして弱冠67歳の小川一登さんにバトンタッチした時のメッセーじは、「おあとがよろしいようで」でしたね。

「おあとがよろしいようで」とは、「つぎの演者が楽屋に控えているので、私はこのあたりで下がります」という意味の寄席言葉です。

引き時を間違えた例をニュースでも見ましたし、わたくしの目の前でもたくさん目にしてきましたから、引き時は考えました。

何期か広告制作会社連盟の常務理事でいたとき、このままいるとつぎの選挙では、もう一つ上の票数になりそうに感じました。わたくしの会社はチッコイし、理事長会社としちゃあ貧しすぎる。いまが潮時と思い立ったとき、諸般の事情とか申し出て連盟をハイチャイしました。

東京コピーライターズクラブでは、長く会長を補佐するような立場でいましたけれど、長居する会長への退会しました。当時、仲間の葬儀で遺族が、お辞儀お辞儀でタイヘンなことを見ていましたので、そのことを退会理由にしましたつけ。

ピーターズクラブも、ゴルフ卒業で消えたもドーゼン。

退くと、席が空きます。そこにつきの人が、来て座り、人が育ちます。人が変わって、その席の機能まで、様変わりします。

退くことはいいことです。居すわることは迷惑です。

高齢者はそれだけで、「権力者」になったりします。若い世代に、そう見る、保守的な目があるのですね。もう、そういう時代ではないんですが、あるんです。老害になるな。邪魔になるな。気遣われるな。

同年代で近くには、松本幹宏*さんという身体、頭脳ともに並はずれたお達者さんがいます。

一つ上なんです、高校時代に甲子園球児だった人、基礎体力と大腦がすぐれているんでしょう。ニッকারボツカーできめてこの歳でスコットランドを巡ったり、最近クラブ・フィッターについてドライバーのシャフト改造に取り組んで。

ミート率を高め、飛距離を伸ばし、周回を驚かせています。その費用わずか数千円とか。この成功は高齢ゴルフアーにとつての福音です。

詳細をわたくしにはツンポンカンペンの図表や動画に描いてユーチューブに。なんか早々、CMもついているようです。

CMといえば、むかしアメックスのTVコマーシャル*で、大西久光さんと青木功プロがコースにいて、同カードの有効性を話す一編を思い出しませんか。1秒24コマというフィルムの時代、ほんの10コマほどですが、ハンチングにニッকারボツカーで立つ偉丈夫がチラツと映るんですよ。

撮影の話を耳にして現場に押しかけたさる人で。撮影クルーはアメリカから来た人たちだったんですが、あまりにも絵になつていたので、コンテにないワンカットを挿入することにした、と聞きました。それが、松本幹宏さんというわけで。

その一編、ユーチューブに収められています。

松本さんと、知る人ぞ知る関西の達人ゴルフアー、池戸秀行さんとは『天國ゴルフ倶楽部』の共同発起人なんですが、コリヤ、わたくしたちはあつちでだいふ待たされることになりそうです。



思えば、先に逝つた知人が多いです。お気づきでしょうね、本書中には「故・ダレソレ」表記がたいへん多いですよ。

なかには、朝いつもの時間に起きてこないで、奥さんが声かけにいったら…、という話もよくきいて。

けさがた、ローソクがパチパチしたのち、消えたんですね。

三遊亭圓朝の名作、『死神』*の一席。近年では、五代目三遊亭圓楽 十代目柳家小三治らが、名演しています。

前表、ぜんひよう、という評判の悪い幫間がいました。

幫間なのに口のきき方が、いちいちネガティブなのが致命的で、お呼びがかからなくなります。

貧乏に明け暮れしていると、貧乏神に声をかけられます。貧乏神は死神株式会社の一員であります。ある金儲けを教えてください。

玄関に「医者」の看板をかげなさい。長く伏せている病人を専門に往診しなさい、と。病人が大店の旦那がだったら願ってもない。

病人にはかならず死神がついておる。死神が枕もとのほうに座っていたら、助かる病人だ。てきとうに脈でもとって「うーむ。こちらさんは助かります。ご安心なされませ」と微笑んで、焙じ茶でも包んで、札金をもらって、帰ればよい。

もし死神が寝床の裾のほうに座っていたら、助からない病人だ。その場合は祈祷するのだ。

呪文は小声で「アーアハハモシモシ、オ茶ノ水ノ、五百五番」とブツブツ、手をポンポンポンと打ち、「交々替ッ」と呟く。そうすると、死神は枕もとのほうへ移る、という段どりなんです。

この呪文は嘶家によって違います。

創作語「ベケンヤ」や「アバラカベッソン」で、人気があつた名人八代目桂文楽は、名調子で「アジャラカモクレン、テケレッツツノパ」とやった。

名人六代目三遊亭圓生は、客席にいい加減な呪文であると受けとってもらおうという意図から、「ハイジャック、テケレッツツのパー」とか、「セキグンハ、テケレッツツのパー」などと、ハズすこともありました。

六代目三遊亭円楽は、「キタチヨーセン・テケレッツツのパー」。

四代目立川談志は、「アジャレン、モクレン、キンチャン、カール、セキテイ喜ぶ、テケレッツツのパー」。

立川志らくは、「アジャラカモクレン、ダンシガシンダ、ウエカラヨンデモ、シタカラヨンデモ、ダンシガシンダ」と遊んでいます。

さて前表先生、感謝されてしまった治療費をもらって、町じゅうに名医の評判がたつて、ホクホク。

金を儲けて、うつつをぬかしているうちに、案の定お呼びがかからなくなり、米びつも空っぽ。女房がグチりはじめる。

と、ひさびさに赤坂のとあるお屋敷からお呼びがかかった。

出むいてみると、死神が裾のほうにいる。ところが、ぐあいの悪いことに、眠りこんじやつている。「モシモシ、オ茶ノ水ノ、五百五番」。呪文を唱えても、聞こえていない。

前表、屋敷のなかの力持ちを四人集めさせる。寝床の四隅を持って枕もとの裾を、いれかえる戦法。死神は目が覚めて仰天した。会社へ駆け戻ってしまった。

主人は快復。懷手して帰路につく前表に死神が「オイッ」と怒る。襟髪をひつつかまれて、連れていかれたのは死神株式会社の本社。なん百なん千ものローソクが燃えている。

人間みんなの寿命だという。炎が、勢いよく伸びているもの震えているもの、蠟がたれて芯が短くなっているもの。

蠟がたれているのは貧乏している、おまえの家族だと。でな、炎に勢いがあるのはお前の子どもとかみさんだよ。いまにも消えそうなのが、おまえだ、と。

あせる前表——。ここからオチに向かうのですが、嘶家によつて、いろいろと工夫が絶妙でありましてね、木戸銭払ってそれぞれをお楽しみに。

△

小津安二郎さんの『小早川家の秋』は、1960年ごろの映画ですが、ずっと後になってテレビで見ました。

話はよくある小津さんものなのですが、なぜかその後、忘れられなくなったシーンがあります。いかにも小津映画らしいにげないシーンなのですが、あるセリフが、忘れられなくなつたんです。

京都のつくり酒屋の三人娘でしたか、原節子、新珠三千代、司洋子、で、小津映画といえば、定番の笠智衆と望月優子は百姓の夫婦で出ていて、老いた父親があの中村鴈治郎さんでした。

原節子の結婚相手を探していて、みんながすすめるたびに「私みたいなおばあちゃんに」と口にする。これは姉妹間の禁句。口にしたら一回百円の罰金。物覚えの悪いわたくしが、こんなことまで覚えていた大した映画なんです。

居間での団欒が長くなって、柱時計が鳴ります。雁治郎さん、お休みの時間です。娘のだれかが二階へ連れて行く。

そして、ころあいを見てもう一人の娘が、つれあいに「さ、あなた、そろそろおいとましましょう」、というんです。

この、「そろそろ、おいとま」って、優しくて気遣いがあつて、美しい日本語の一つですね。

シーンが続いて、父を連れて上がった娘が、二階から慌ただしく、降りて来て、「お父さんが倒れた」。

わたくしは、とくに脚本を研究しているわけじゃありませんけれど、小津さんの映画には、こういう象徴性に富んだ上質なセリフが、まるで、名残惜しい色づきのままの落ち葉のようにそこにある、そういうセリフがありますね。

ひとたび気づいてしまうと、忘れられなくなるんです。小津ファンはそれが余韻となつて残るので、タマランのです。

「そろそろ、おいとま」の「いとま」は「暇」で、文字どおり「ひま」や「休み」「辞する」「別れ」の意味。作法上で用いられる場合は、丁寧語として「お」をつけます。

「おいとまする」は、「帰る」の謙譲語で。相手に対して、自分がへりくだつた立場として使う、情感あふれる丁寧語なんです。

訪問者のほうから、「おやおや」とか「あらまあ」、とふつておいて、「ついつい長居をしてしまいました、そろそろ、おいとましよう」と切りだすと、美しい心として伝わるんです。

晩酌のあと歯を磨いて、モニョーン。

キッチンで洗っている老いた人に「お先にー」と声かけののですが、わたくしはほろ酔いながら、それがダブル・ミーニングの駄洒落になつていることに気づいてドキッ。慌てて「ヨロシク」に変えようか、いや、なにを「ヨロシク」なんだと、気がまわつたりして困るきょうこの頃。

ピンピンコロリが、いちばん平和な「サヨナラ」だといいます。

朝起きてこないのが、めでたいのだと。

「どうりで、昨晩はお酒が、いつもより多ございました」
なんて仕儀に相成り――。

やっと、空になれて、この身の軽さ、この頭の軽さ。

カンラカラカラ、です。

*

003 樺英智子 1937～1960年 東大生 共産党員 墓所は多磨霊園

005 アレック・ベネット 970～年 日本経済新聞2013年10月12日 武道学会理事

008 松本幹宏 大阪ブルフクラブ前総支配人

008 ユーチューブ「懐かCM集1995年」

008 『古典落語』講談社

謝辞

本稿を書き上げられたのは、

長いおつきあいの編集者・高橋純子さんのおかげです。
はやくから中身の無い中身を分かってくださり、

「ツンポンカンペン」「ヌーン」を笑ってくださり、
書き加えるほどに声援を送ってくださいました。

ただ国民年金暮らしゆえ、ポーンと具面できず、
純子さんのプランを無にしてみましたこと、
お詫びの言葉がみつからなくて、ニューン、です。